

高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第2冊

奥の坊遺跡群Ⅱ

（奥の坊権現前遺跡）

2004年3月

高松市教育委員会

例 言

1. 本報告書は、高松市東部運動公園（仮称）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2冊で、高松市高松町に所在する奥の坊権現前遺跡（おくのぼうごんげんまえいせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査地ならびに調査期間は次の通りである。
高松市高松町奥ノ坊
発掘調査：平成9年2月10日～3月24日
平成9年10月7日～平成10年3月13日
整理作業：平成9年4月1日～平成16年3月31日
3. 発掘調査から整理作業及び報告書編集まで高松市教育委員会文化部文化振興課文化財専門員大嶋和則が担当した。
4. 発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたって、下記の関係諸機関ならびに方々からご教示を得た。記して厚く謝意を表すものである。（五十音順、敬称略）
香川県教育委員会、(財)香川県埋蔵文化財調査センター、古高松土地改良区、地元自治会、地元水利組合、大久保徹也、片桐節子、片桐孝浩、國木健司、塩崎誠司、丹羽佑一、信里芳紀、乗松真也、松本和彦、松田重治
5. 発掘調査から整理作業、報告書執筆まで下記の方々の協力を得た。記して厚く謝意を表すものである。（敬称略）
大野宏和、川部浩司、信吉純恵、増田ゆず、山内康郎（徳島文理大学大学院）
坂東祐介、林田真典、水田貴士、宮地舞子（徳島文理大学）
6. 本調査に関連して、以下の業務を業務委託発注により実施した。
発掘調査掘削工事 (株)瀬戸内コムテック
航空写真測量 平成8年度……国際航業(株)、平成9年度……アジア航測(株)
遺物写真撮影 西大寺フォト
金属器保存処理 (財)元興寺文化財研究所
7. 挿図として、国土地理院発行1/25,000地形図「高松北部」「高松南部」「五剣山」「志度」を一部改変して使用した。
8. 本報告の高度値は海拔高を表し、方位は国土座標第IV系（日本測地系）の北を示す。
9. 本書で用いる遺構の略号は次の通りである。
SA：柱穴列 SB：掘立柱建物 SD：溝 SH：竪穴住居 SK：土坑 SO：落ち込み
SP：柱穴 NR：旧河道
10. 調査は複数年度・複数調査区・複数遺構面になることが想定されたため、遺構番号は調査区番号、遺構面番号、遺構番号の順に5桁の数字で記載した。（例 IV区・第2遺構面・土坑109 = SK42109）
11. 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

目 次

第1章 調査の経緯と経過	
第1節 事業全体の経緯と経過	1
第2節 奥の坊権現前遺跡発掘調査の経緯と経過	2
第3節 整理作業の経過	3
第2章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	
第1節 I区の調査	7
(1) 概要と基本層序	7
(2) 弥生時代の遺構	9
(3) 古代の遺構	9
第2節 II区の調査	12
第3節 III区の調査	15
第4節 IV区の調査	21
(1) 概要と基本層序	21
(2) 弥生時代の遺構	25
(3) 古代の遺構	40
(4) 近世以降の遺構	41
第5節 V区の調査	42
(1) 概要と基本層序	42
(2) 弥生時代の遺構	42
(3) 古代の遺構	49
(4) 近世の遺構	51
第6節 VI区の調査	52
(1) 概要と基本層序	52
(2) 近世以前の遺構	52
(3) 近世以降の遺構	53
第4章 まとめ	
第1節 遺構の変遷について	56
第2節 SK42063の性格について	61
第3節 奥の坊権現前遺跡出土弥生後期土器の特徴について	62
第4節 山田郡北部の地形と地割について	63
観察表	67
写真図版	81
報告書抄録	95

挿図目次

<p>第1図 高松市東部運動公園(仮称)整備事業発掘調査地 … 2</p> <p>第2図 奥の坊権現前遺跡調査区割図 …………… 3</p> <p>第3図 周辺遺跡分布図 …………… 6</p> <p>第4図 I区平面図 …………… 7</p> <p>第5図 I区西壁土層断面図及び包含層出土遺物実測図 … 8</p> <p>第6図 SH11001平・断面図…………… 9</p> <p>第7図 SD11001断面図及び出土遺物実測図…………… 9</p> <p>第8図 SD11005断面図及び出土遺物実測図…………… 9</p> <p>第9図 SD11008平・断面図及び出土遺物実測図 …………… 10</p> <p>第10図 SK11012平・断面図及び出土遺物実測図 …………… 11</p> <p>第11図 SK11013・11014平・断面図及び SK11013出土遺物実測図…………… 11</p> <p>第12図 II・III区平面図 …………… 12</p> <p>第13図 II区西壁土層断面図及び包含層出土遺物実測図 … 13</p> <p>第14図 III区西壁土層断面図 …………… 14</p> <p>第15図 NR31001下層遺物出土状況図 …………… 16</p> <p>第16図 NR31001出土遺物実測図① …………… 17</p> <p>第17図 NR31001出土遺物実測図② …………… 18</p> <p>第18図 NR31001出土遺物実測図③ …………… 19</p> <p>第19図 NR31001出土遺物実測図④ …………… 20</p> <p>第20図 IV区第2遺構面平面図 …………… 21</p> <p>第21図 IV区第1遺構面平面図 …………… 22</p> <p>第22図 IV区西壁土層断面図 …………… 23</p> <p>第23図 IV区包含層出土遺物実測図 …………… 24</p> <p>第24図 IV区SH42001平・断面図及び出土遺物実測図 …… 25</p> <p>第25図 SH42002平・断面図 …………… 26</p> <p>第26図 SH42003平・断面図 …………… 27</p> <p>第27図 SB42001平・断面図及び出土遺物実測図 …………… 28</p> <p>第28図 SB42002平・断面図 …………… 28</p> <p>第29図 SB42003平・断面図 …………… 29</p> <p>第30図 SA42001平・断面図 …………… 29</p> <p>第31図 SK42013・SK42018平・断面図…………… 30</p> <p>第32図 IV区土坑群平面図…………… 31</p> <p>第33図 IV区第2遺構面検出遺構断面図…………… 32</p> <p>第34図 SK42063平・断面図 …………… 33</p>	<p>第35図 SK42063出土遺物実測図① …………… 35</p> <p>第36図 SK42063出土遺物実測図② …………… 36</p> <p>第37図 SK42063出土遺物実測図③ …………… 37</p> <p>第38図 SK42063出土遺物実測図④ …………… 38</p> <p>第39図 SK42063出土遺物実測図⑤ …………… 39</p> <p>第40図 SK42068平・断面図及び出土遺物実測図 …………… 40</p> <p>第41図 SO42001出土遺物実測図 …………… 40</p> <p>第42図 SB41001平・断面図 …………… 41</p> <p>第43図 V区第3遺構面平面図及び 包含層出土遺物実測図 …………… 43</p> <p>第44図 V区第1・第2遺構面平面図…………… 44</p> <p>第45図 V区東壁土層断面図…………… 45</p> <p>第46図 SH53001平・断面図及び出土土器実測図 …………… 46</p> <p>第47図 SH53001出土石器実測図① …………… 47</p> <p>第48図 SH53001出土石器実測図② …………… 48</p> <p>第49図 SH53002平・断面図 …………… 49</p> <p>第50図 SB53001平・断面図 …………… 49</p> <p>第51図 SB53002平・断面図 …………… 50</p> <p>第52図 SD53001断面図及び出土遺物実測図 …………… 50</p> <p>第53図 SH53003平・断面図及び出土遺物実測図 …………… 51</p> <p>第54図 VI区第2遺構面平面図…………… 52</p> <p>第55図 VI区第1遺構面平面図…………… 53</p> <p>第56図 NR62001出土遺物実測図 …………… 54</p> <p>第57図 NR61001断面図及び出土遺物実測図…………… 55</p> <p>第58図 NR61002断面図 …………… 55</p> <p>第59図 弥生中期の主要遺構 …………… 57</p> <p>第60図 弥生後期の主要遺構 …………… 58</p> <p>第61図 古代の主要遺構 …………… 59</p> <p>第62図 近世の主要遺構 …………… 60</p> <p>第63図 SK42063出土破裂痕土器 …………… 61</p> <p>第64図 口縁端部上面ナデ技法を施す土器 …………… 62</p> <p>第65図 原中村遺跡出土土器 …………… 62</p> <p>第66図 高松平野の条里プラン …………… 64</p> <p>第67図 山田郡北部地形復元案 …………… 65</p>
--	---

写真図版目次

<p>写真1 I~Ⅲ区調査区全景（南から）…………… 82</p> <p>写真2 IV~Ⅵ区調査区全景（西から）…………… 82</p> <p>写真3 Ⅱ・Ⅲ区調査区全景（西から）…………… 83</p> <p>写真4 I区完掘状況（東から）…………… 83</p> <p>写真5 SH11001完掘状況（西から）…………… 83</p> <p>写真6 SD11008土器出土状況（南から）…………… 83</p> <p>写真7 SK11012完掘状況（西から）…………… 83</p> <p>写真8 SK11013・11014完掘状況（東から）…………… 83</p> <p>写真9 Ⅲ区NR31001掘削風景（北から）…………… 83</p> <p>写真10 Ⅱ区西壁断面（北から）…………… 83</p> <p>写真11 Ⅲ区NR31001完掘状況（西から）…………… 84</p> <p>写真12 Ⅲ区NR31001土器出土状況（東から）…………… 84</p> <p>写真13 IV区西壁断面（南から）…………… 84</p> <p>写真14 IV・V区完掘状況（北から）…………… 84</p> <p>写真15 SH42001完掘状況（南から）…………… 84</p> <p>写真16 SH42002完掘状況（東から）…………… 84</p> <p>写真17 SH42003・SB42003完掘状況（南から）…………… 84</p> <p>写真18 SB42001半掘状況（南から）…………… 84</p> <p>写真19 SB42003柱穴断面（南から）…………… 85</p> <p>写真20 SB42003完掘状況（北から）…………… 85</p> <p>写真21 SB42002完掘状況（東から）…………… 85</p> <p>写真22 SK42018完掘状況（東から）…………… 85</p> <p>写真23 IV区土坑群完掘状況（南から）…………… 85</p> <p>写真24 SD42002完掘状況（北から）…………… 85</p> <p>写真25 SK42063掘削状況（東から）…………… 85</p> <p>写真26 SK42063掘削状況（西から）…………… 85</p> <p>写真27 SK42063断面（南東から）…………… 86</p> <p>写真28 SK42063断面（北東から）…………… 86</p> <p>写真29 SK42063土器出土状況（北東から）…………… 86</p> <p>写真30 SK42063土器出土状況（南から）…………… 86</p> <p>写真31 SK42063土器出土状況（東から）…………… 86</p> <p>写真32 SK42063土器出土状況（西から）…………… 86</p> <p>写真33 SK42063平面図作成風景（北東から）…………… 86</p> <p>写真34 SK42063完掘状況（東から）…………… 86</p> <p>写真35 SK42063下部遺構（北西から）…………… 87</p> <p>写真36 SK42063土器出土状況（南から）…………… 87</p> <p>写真37 SK42063土器出土状況（南から）…………… 87</p> <p>写真38 SK42063土器出土状況（東から）…………… 87</p> <p>写真39 SK42063土器出土状況（南から）…………… 87</p> <p>写真40 SK42063土器出土状況（北から）…………… 87</p> <p>写真41 SK42063土器出土状況（北から）…………… 87</p>	<p>写真42 SK42063土器出土状況（西から）…………… 87</p> <p>写真43 SK42063土器出土状況（西から）…………… 88</p> <p>写真44 SK42063土器出土状況（北から）…………… 88</p> <p>写真45 SK42063土器出土状況（北から）…………… 88</p> <p>写真46 SK42063土器出土状況（南から）…………… 88</p> <p>写真47 SK42063土器出土状況（西から）…………… 88</p> <p>写真48 SK42063土器出土状況（北から）…………… 88</p> <p>写真49 SK42063土器出土状況（東から）…………… 88</p> <p>写真50 SK42063炭化材検出状況（南から）…………… 88</p> <p>写真51 SK42068断面（南から）…………… 89</p> <p>写真52 SK42068土器出土状況（西から）…………… 89</p> <p>写真53 SB41001完掘状況（北西から）…………… 89</p> <p>写真54 IV区作業風景（東から）…………… 89</p> <p>写真55 V区完掘状況（東から）…………… 89</p> <p>写真56 SH53001完掘状況（西から）…………… 89</p> <p>写真57 SH53001完掘状況（東から）…………… 89</p> <p>写真58 SH53001壁部分断面（北から）…………… 89</p> <p>写真59 SH53001炭化材出土状況（東から）…………… 90</p> <p>写真60 SH53002完掘状況（北から）…………… 90</p> <p>写真61 SH53003完掘状況（北から）…………… 90</p> <p>写真62 SB53001完掘状況（北から）…………… 90</p> <p>写真63 SB53001完掘状況（南東から）…………… 90</p> <p>写真64 SB53002完掘状況（北東から）…………… 90</p> <p>写真65 SB53002完掘状況（南西から）…………… 90</p> <p>写真66 V区西半柱穴群（東から）…………… 90</p> <p>写真67 SD53001完掘状況（東から）…………… 91</p> <p>写真68 SD53001完掘状況（東から）…………… 91</p> <p>写真69 SD53001断面（西から）…………… 91</p> <p>写真70 SD53001断面（西から）…………… 91</p> <p>写真71 SB51001完掘状況（北西から）…………… 91</p> <p>写真72 Ⅵ区第1遺構面完掘状況（北から）…………… 91</p> <p>写真73 NR61001木杭列（南から）…………… 91</p> <p>写真74 Ⅵ区完掘状況（西から）…………… 91</p> <p>写真75 奥の坊権現前遺跡出土遺物①…………… 92</p> <p>写真76 奥の坊権現前遺跡出土遺物②…………… 93</p> <p>写真77 奥の坊権現前遺跡出土遺物③…………… 94</p>
---	---

第1章 調査の経緯と経過

第1節 事業全体の経緯と経過

高松市では全市的なレベルでまとまった総合的なスポーツレクリエーション活動拠点として高松市東部運動公園（仮称）の整備が計画され、その基本構想・基本計画が平成5年度に作成された。運動公園整備予定地となったのは高松市の東端の丘陵地帯で、高松町の奥ノ坊・大空・金川渕地区で、総事業面積は47.2haに及ぶ広大なものであった。整備予定地内には香川県の弥生後期を代表する大空遺跡をはじめ、奥ノ坊古墳及びスベリ古墳の存在が知られており、この他にも未周知の埋蔵文化財が所在する可能性は高いと考えられた。このため工事に先立ち整備予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて都市開発部公園緑地課と協議を行い、事前に試掘調査を実施し、埋蔵文化財の包蔵状況を明らかにすることで合意した。

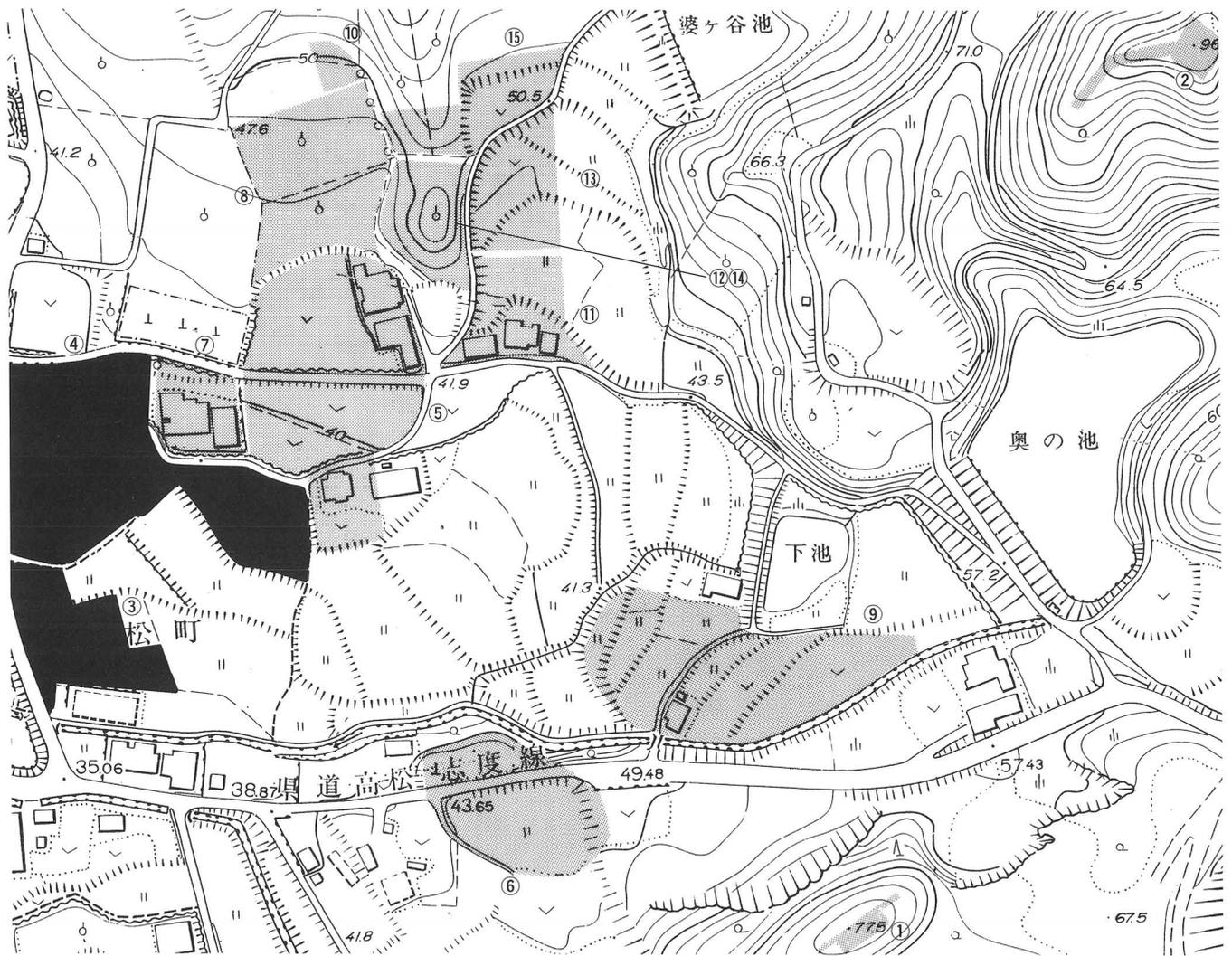
高松市教育委員会では、平成7年度から用地買収の完了した土地について試掘調査を実施した。平成7年度では大空古墳、金川渕古墳、奥ノ坊2号墳（その後の本調査で3・4号墳も発見）を発見した。これを受け、再度都市開発部公園緑地課と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、発掘調査による記録保存を行うことで合意した。試掘調査はその後も継続して行い、平成9年度までに整備予定地内に203箇所のトレンチを掘削した。この試掘調査により、周知の埋蔵文化財包蔵地であった大空遺跡、奥ノ坊古墳、スベリ古墳の3遺跡については、既にほとんど消滅しており事前の保護措置の必要がないことが判明した。一方、新たに奥の坊権現前遺跡、奥の坊遺跡、奥の坊奥池西遺跡、大空北遺跡の4集落遺跡が発見された。新たに発見された遺跡の総面積は約30,000㎡である。これらの遺跡についても順次都市開発部公園緑地課と協議を行い、発掘調査による記録保存を行うことで合意した。

一方、運動公園整備については、平成9年度から洪水調整池の工事を行い、平成12年度後半から全体の造成工事を行うことが予定されていた。このため洪水調整池部分の発掘調査を早期に着手し、平成12年度前半までに全調査を終えることとした。調査対象地は遺跡総面積30,000㎡のうち現道及び現水路を除く約26,910㎡とした。その後、工事計画が変更になり、平成14年度後半から全体造成工事が開始されることになり、発掘調査についても14年度前半まで期間を延長できることとなった。このため、当初は掘削深度が深く、調査面積も広大で、調査期間も短いことから、掘削業務を委託発注して調査を実施していたが、平成11年度より比較的掘削深度の浅い部分については直営で調査を行った。

また、平成15年1月には運動公園整備工事に使用する粘土を新田町久米池から採取することとなり、同地に所在する久米池遺跡について工事立会により調査を実施した。

東部運動公園（仮称）整備事業に伴う発掘調査経過

番号	遺跡名	調査区	調査期間	調査面積(㎡)	調査方法	報告書
	試掘調査	全域	1995.8.4～1997.10.8	2,997	直営	I (1999.3刊)
①	大空古墳	全域	1996.2.14～1996.2.23	150	直営	
②	金川渕古墳	全域	1996.2.23～1996.3.8	300	直営	
③	奥の坊権現前遺跡	I～III	1997.2.10～1997.3.24	1,560	委託	II (本報告書)
④	奥の坊権現前遺跡	IV～VI	1997.10.7～1998.3.13	5,200	委託	
⑤	奥の坊遺跡	I～IV	1998.9.14～1999.2.19	4,900	委託	未刊
⑥	大空北遺跡	全域	1999.4.16～1999.6.4	2,200	直営	未刊
⑦	奥の坊遺跡	V	1999.5.28～1999.7.13	700	直営	未刊
⑧	奥の坊遺跡	VI・VII	1999.11.10～2000.3.3	2,300	委託	未刊
⑨	奥の坊奥池西遺跡	全域	2000.4.17～2000.7.25	3,600	直営	未刊
⑩	奥の坊遺跡	VIII	2000.10.2～2000.12.28	300	直営	未刊
⑪	奥の坊遺跡	IX	2000.10.5～2001.1.12	1,180	委託	未刊
⑫	奥ノ坊古墳群（測量）	全域	2001.6.5～2001.6.27	—	直営	未刊
⑬	奥の坊遺跡	X	2001.8.27～2002.1.18	1,320	委託	未刊
⑭	奥ノ坊古墳群	全域	2001.9.4～2001.11.28	1,020	直営	未刊
⑮	奥の坊遺跡	XI	2002.4.2～2002.7.5	1,180	直営	未刊
	久米池遺跡	全域	2003.1.8～2003.1.21	200	立会	未刊

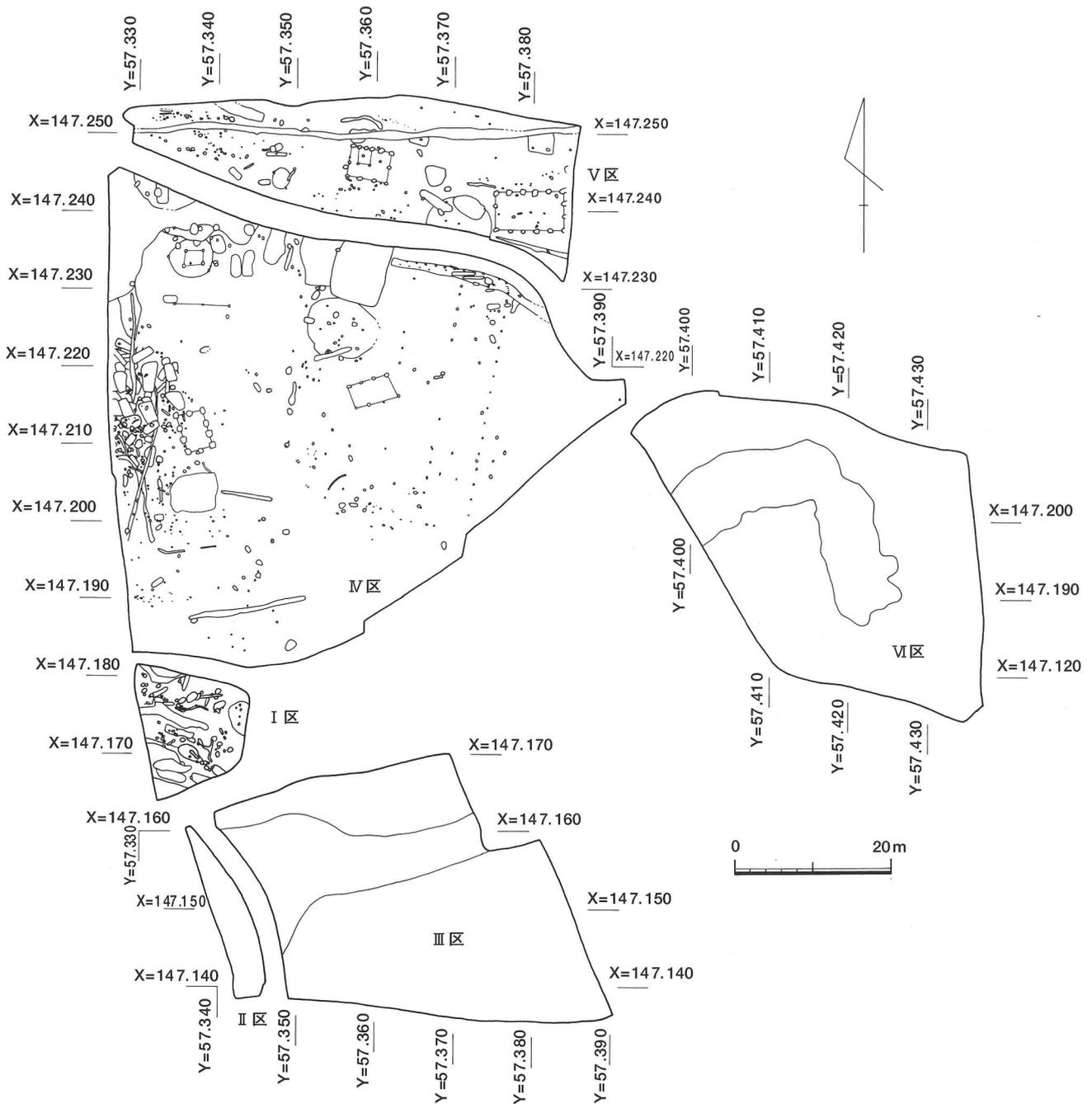


第1図 高松市東部運動公園（仮称）整備事業発掘調査地

第2節 奥の坊権現前遺跡発掘調査の経緯と経過

平成7年度から用地買収の進捗状況に応じて実施してきた試掘調査は、8年度ではわずかに運動公園整備予定地内の西端の谷状地形部分において遺物を多量に包含する旧河道部分（本報告書Ⅱ・Ⅲ区）及び集落の一部（本報告書Ⅰ区）が確認されているに過ぎなかった。しかしながら、旧河道の北岸部分の未買収地には、広範囲な平坦面及び南向きの緩斜面（本報告書Ⅳ～Ⅵ区）が認められ、集落が存在することが想定された。一方、同地は運動公園整備工事の中でも早急に着工する洪水調整池部分にあたることから早期の発掘調査が望まれた。このため、想定される集落部分を合わせ奥の坊権現前遺跡とし、平成8年度調査地としてはⅠ～Ⅲ区の約1,560㎡を対象とした。調査においては、現道及び現水路部分については保護し、これにより現地形の水田の区画ごとに調査区を設定した。調査期間は平成9年2月13日から3月24日である。旧河道遺物の中には弥生中期～近世までの遺物を含むが、特に弥生後期と古代の遺物が多いことから、北岸に想定される集落は同時期のものと考えられた。

平成9年度になり、整備予定地内のほぼ全域の用地買収が完了したことを受け、旧河道北岸の集落想定部分の試掘調査を実施したところ、想定どおり弥生後期の集落が存在することが判明した。また、この他にも複数の集落遺跡が発見されるに至ったが、洪水調整池部分を優先することから、奥の坊権現前遺跡の調査を早期に終了する必要があるがあった。このため、約5,200㎡の調査地を前年度同様現地形の水田の区画ごとにⅣ～Ⅵ区とし、平成9年10月7日から開始した。本調査では掘立柱建物や竪穴住居が多数検出されたことから、平成10年2月21日に現地説明会を実施し、500名を越える人が見学に訪れた。調査はその後も続き、平成10年3月13日に終了した。



第2図 奥の坊権現前遺跡調査区割図

第3節 整理作業の経過

東部運動公園整備事業に伴う発掘調査は平成14年度まで行われた。このため、各調査年度の翌年度に土器洗浄や接合等の基礎整理を行うのみで、本格的な整理作業は全調査終了後の平成14年度後半から実施した。

奥の坊権現前遺跡の整理作業は、平成9・10年度において基礎整理を実施し、本格的な整理作業は平成15年1月から16年3月において実施した。以下に工程表を掲載した。

整理作業工程表

	平成9・10年度	平成14年度			平成15年度												
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
基礎整理																	
実測																	
トレース																	
レイアウト																	
報告書執筆																	

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松市は香川県のほぼ中央、瀬戸内海に面している。高松市域の大部分は高松平野によって占められている。東を立石山、雲附山等に、南を日山、上佐山、西を五色台山塊に遮られ、北に瀬戸内海を望み位置しており、南北約20 km、東西約16 kmを測る。平野の境界を画する低位山塊及び屋島、紫雲山等の独立山塊は、侵食の容易な花崗岩層（三豊層群）が風化侵食に抵抗の強い安山岩層に覆われていたことによって侵食解析から取り残されて形成されたメサまたはビュートと呼ばれるもので、讃岐ののどかな田園風景の象徴の一つである。

高松平野は四国中央部に東西に連なる讃岐山脈に端を発する中小河川により形成された沖積地である。高松平野には、西から本津川、香東川、春日川、新川といった河川が瀬戸内海に向けて北流している。本調査区の位置する古高松（高松町・新田町・春日町）は、この中の春日川、新川にほど近い地域である。春日・新川の両河川は水量に乏しく、平野中央部を流れる香東川のように大規模な扇状地は見られない。また、古高松の北部は、江戸時代初期の干拓により陸地化されたものであり、寛永10（1633）年の『讃岐国絵図』によると、その頃の海岸線はかなり内陸に入り込んでおり、屋島は島として描かれている。北を屋島に面した海岸（旧地形による）、東を立石山山塊、南を久米山丘陵、西を春日川によって限られた高松平野北東部の一角は、古代・中世を通じて「高松」（讃岐国山田郡高松郷）と呼ばれたが、天正16（1588）年の生駒親正による高松城築造以後は、城下高松に対して「古高松」と呼称されてきた。江戸時代以前の古高松の地形が推定可能な史料として香西成資が古老の話を元に享保4（1719）年に成立させた『南海通記』がある。その中に天正10（1582）年頃の地形として「…春日ノ里ニ至ル、此所ハ屋島山、石清尾山両受ノ間、入海ニテ山田郡小山ノ下マデ潮サシ来ル、遠干潟ナ春日里ト木太郷ノ間、海ノ中道アツテ通用ス。…」と記載している。ここでいう小山とは、現在の高松市新田町小山にあたりと考えられ、この小山近辺まで海岸線あるいは河口が湾状に入り込んでいたと想定できる。

今回、東部運動公園（仮称）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として発掘調査が行われた「奥ノ坊」は高松町の北東端にあたり、地形的には高松市と牟礼町にまたがる標高100～200 mの山塊の、西側低丘陵地の尾根及び谷部に位置する地域である。現在はかなり内陸的な様相を示すが、上記の推定海岸線から考えると海岸から1～1.5 kmと非常に近かったと推測される。

第2節 歴史的環境

高松平野では、昭和60年代以降、高松東道路建設、太田第2土地区画整理事業、空港跡地再開発などの大規模プロジェクトに伴い発掘調査件数が増大したことによって遺跡数は飛躍的に増大しつつある。また新たな遺跡の発見と併せて、香東川の旧河道が平野の形成に大きな影響を及ぼしていた事実も次第に明らかになってきた。今回の調査地区は高松平野の東部にあたり、平野北西部に位置する石清尾山塊と共に遺跡の多い地帯として早くから認識されてきた地域で、近年も数多くの遺跡が調査されている。

調査地区周辺の遺跡の大部分は弥生時代から古墳時代にかけてのものであるが、旧石器時代、縄文時代の遺物、遺構も若干知られている。旧石器時代については、本格的な遺構は知られていないが、久米池南遺跡（東山崎町）においてナイフ型石器が出土している。縄文時代については、小山・南谷遺跡において落とし穴状の土坑が14基検出されているほか、旧河道中から縄文土器が出土している。また平野部の発掘調査において縄文晩期を中心とした遺跡出土例の増加が特筆でき、林・坊城遺跡、浴・長池遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡、井手東Ⅰ遺跡、井手東Ⅱ遺跡、居石遺跡、上天神遺跡、東中筋遺跡、宗高・坊城遺跡などをあげることができる。これらの多くは旧河道の堆積から遺物の出土が確認されたものであるが、井手東Ⅰ遺跡では遺物の確認はなかったものの、地表面下約70 cmからアカホヤの堆積層が確認されており、縄文早期の高松平野の形成過程をうかがうことができる。

弥生時代前期の遺跡としては、平野中央部では二重の環濠が検出された汲仏遺跡等が知られているが、平野東部では現在のところ発見されていない。中期前半では今回の調査事業で発見された奥の坊遺跡が見られる。南向きの緩斜面に営まれた集落で、多量の土器・石器に伴い分銅形土製品等も出土している。また、牟

礼町羽間では細形銅剣が出土している。中期後半では久米山東側丘陵上に立地する高地性集落の久米池南遺跡がある。後期前半では、大空遺跡、スベリ山南遺跡、南谷遺跡、小山・南谷遺跡がある。この中の、大空遺跡は香川県の弥生時代後期前半の標式土器が出土したことで知られる遺跡である。これらの遺跡においては多量の製塩土器が出土しており、今回の調査でも製塩土器が多量に出土していることから、この地域での土器製塩活動の一端を知る良い資料となりうる。後期後半では牟礼町の原中村遺跡があげられる。

古墳時代になると、周辺では集落遺跡は発見されていない。平野中央部では空港跡地遺跡、上天神遺跡などで前期初頭まで集落が存在していたことが確認されている。また、太田下・須川遺跡では古墳時代中期の遺構を検出している。古墳としては、高松平野では積石塚として有名な石清尾山古墳群があるが、平野東部では盛土古墳しか見られない。高松市茶臼山古墳は全長60mの前方後円墳で、後円部には竪穴式石室が2箇所設けられており、第1主体からは鍬形石2点、画文帯神獣鏡1点などが出土している。また高松市茶臼山古墳に続く、前期から中期にかけての茶臼山古墳群、後期の小山古墳、久本古墳、山下古墳、瀧本神社古墳、岡山小古墳群、平尾古墳群といった古墳が引き続いて築かれていく。後期の久本古墳は讃岐唯一の石棚を設けた横穴式石室を有するもので、出土品として承盤付銅椀、石棚直下に置かれた亀甲型陶棺等がある。

古代の遺跡では、『日本書紀』にも記載されている古代山城屋嶋城の存在が知られている。近年の調査で城門遺構や石垣が検出されている。また新田本村遺跡と小山・南谷遺跡では高松平野の条里地割に先行し、方向の異なる条里地割が発見されている。古代寺院としては山下廃寺がある。古式の瓦を出土していることが知られているが、発掘調査は行われていないので詳細は不明である。また屋島北嶺の千間堂において10～11世紀と考えられる建物礎石及び集石遺構が検出されており、屋島寺の前身遺構と考えられている。

中世に入ると高松平野でも武士の台頭が目立つ。特に中央政権との関わりも多く、数多くの戦いが行われている。まず、源氏と平氏が屋島に戦い、那須与一や佐藤継信の戦い振りが『平家物語』によって今日まで伝えられている。南北朝期には讃岐の守護となった高松（舟木）頼重が喜岡城を築城するが、北朝方の細川定禅により落城した。その後喜岡城は秀吉の四国征伐時にも落城している。中世の遺跡としては、中世末～近世初頭にかけての溝で区画された屋敷が検出された川南西遺跡があげられる。

近世の遺跡としては、近年高松城周辺で数多くの調査が実施されており、武家屋敷等が検出されている。平野東部では、東山崎水田遺跡や川南東遺跡等の農村が見られる。

参考文献

- 『古高松郷土誌』 古高松郷土誌編集委員会 1977
- 『久米池南遺跡発掘調査報告書』 高松市教育委員会 1989
- 『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小山・南谷遺跡Ⅰ』 香川県教育委員会 1997
- 『県道高松志度線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 小山・南谷遺跡』 平成5年度 香川県教育委員会 1994
- 『史跡天然記念物屋島 一史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅰ-』 高松市教育委員会 2003
- 『県道高松志度線緊急整備工事および県立医療短期大学建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 原中村遺跡』 香川県教育委員会 2000
- 『高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 奥の坊遺跡群Ⅰ』 高松市教育委員会 1999
- 『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 浴・長池遺跡』 高松市教育委員会 1993
- 『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 浴・長池Ⅱ遺跡』 高松市教育委員会 1994
- 『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 井手東Ⅰ遺跡』 高松市教育委員会 1995
- 『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊 井手東Ⅱ遺跡』 高松市教育委員会 1995
- 『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第7冊 居石遺跡』 高松市教育委員会 1995
- 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 東山崎・水田遺跡』 香川県教育委員会 1992
- 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 林・坊城遺跡』 香川県教育委員会 1993
- 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 太田下・須川遺跡』 香川県教育委員会 1995
- 『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 川南・西遺跡』 高松市教育委員会 1999
- 『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 川南・東遺跡』 高松市教育委員会 2000
- 『新田本村遺跡』 『香川県文化財調査年報 平成8年度』 香川県教育委員会 1997
- 『新田本村遺跡』 『香川県文化財調査年報 平成9年度』 香川県教育委員会 1999



第3図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

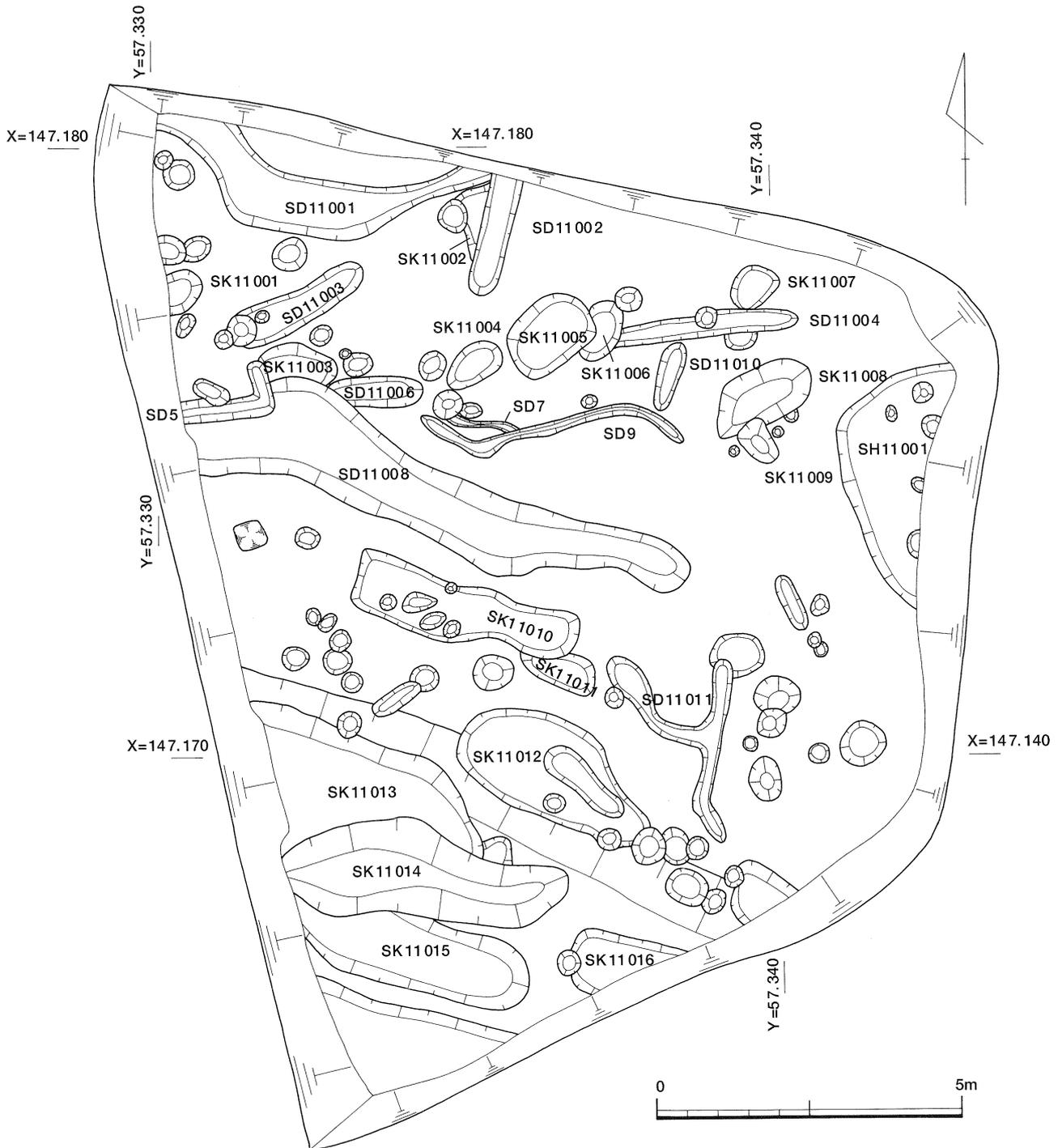
- | | | | | |
|------------|----------|----------------|--------------|---------------|
| 1 奥の坊権現前遺跡 | 2 奥の坊遺跡 | 3 大空北遺跡 | 4 奥の坊奥地西遺跡 | 5 奥ノ坊1号墳 (消滅) |
| 6 奥ノ坊2～4号墳 | 7 金川淵古墳 | 8 大空古墳 | 9 スベリ古墳 (消滅) | 10 大空遺跡 (消滅) |
| 11 大空南遺跡 | 12 屋嶋城跡 | 13 喜岡城 (高松城) 跡 | 14 羽間遺跡 | 15 長尾1号墳 |
| 16 長尾2号墳 | 17 長尾3号墳 | 18 南谷遺跡 | 19 小山・南谷遺跡 | 20 新田本村遺跡 |
| 21 小山古墳 | 22 山下古墳 | 23 山下廃寺 | 24 久本古墳 | 25 岡山古墳群 |
| 26 岡山小古墳群 | 27 漆谷古墳群 | 28 久米池遺跡 | | |

第3章 調査の成果

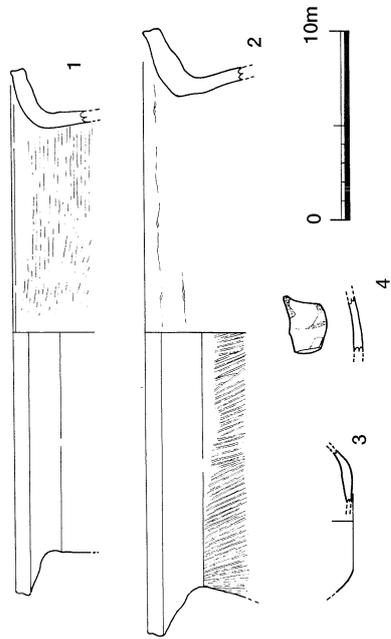
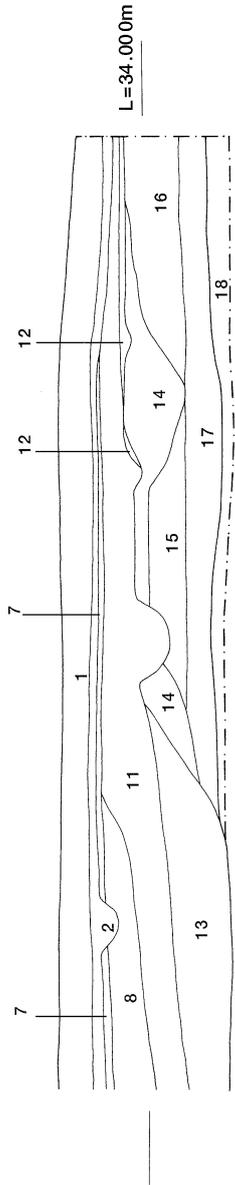
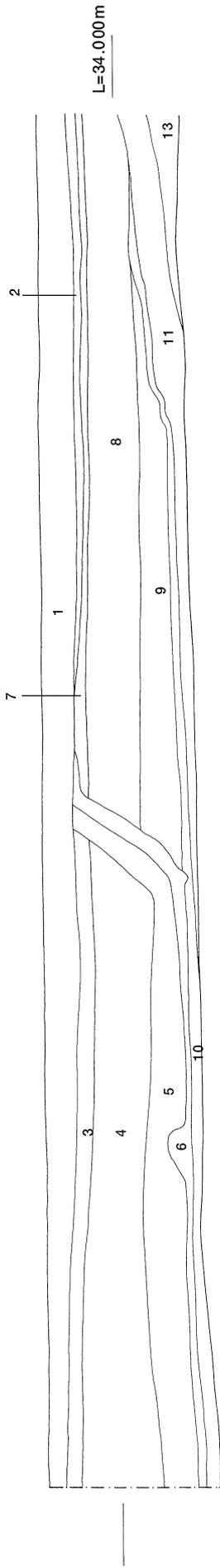
第1節 I区の調査

(1) 概要と基本層序

調査地の南西部に位置し、集落域の南端にあたる。遺構面は北東から南西に向け低くなる緩やかな斜面で、標高33.3m~34.1mである。基本層序は18層に分層できる。6層までが近世以降の耕作土等である。8層の黒褐色砂混粘質土層、9層の灰黄褐色粘質土層は中世の遺物を含む包含層で、11層の黒褐色砂混粘質土層が弥生~古代の遺物を含む包含層である。包含層出土遺物は第5図に掲載した。1・2は土師器の甕である。3



第4図 I区平面図



1 耕作土	黄灰	粘質シルト (旧耕作土)	11 10YR3/1	黒褐	砂混粘質土
2 2.5Y6/1	淡黄	粘質シルト (床土)	12 7.5YR4/6	褐	粗砂
3 2.5Y8/3	灰黄褐	砂混粘質土	13 10YR4/2	灰黄褐	粘質土
4 10Y R5/2	にぶい褐	砂混粘質土	14 10YR6/4	にぶい黄橙	粘質土
5 7.5YR5/3	灰	粘質シルト (旧耕作土)	15 10YR4/4	褐	粘質土
6 5Y5/1	灰黄	粘質シルト (床土)	16 10YR7/2	にぶい黄橙	粗砂
7 2.5 7/2	黒褐	砂混粘質土	17 10YR8/1	灰白	粗砂
8 10Y R3/2	灰黄褐	粘質土	18 10YR7/1	灰白	細砂
9 10Y R6/2	明黄褐	粘質土			
10 10Y R6/6					

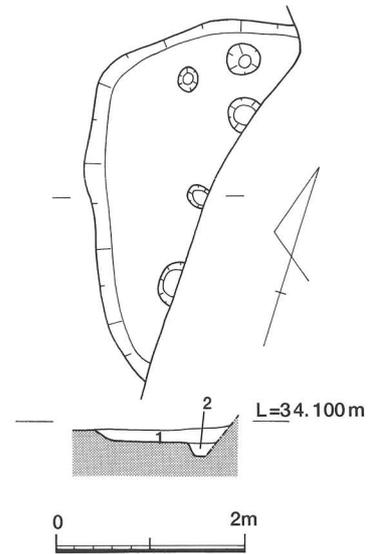
第5図 I区西壁土層断面図及び包含層出土遺物実測図

は土師器の坏である。4は龍泉窯系青磁碗である。1・2が11層出土、3・4が8・9層出土のものである。18層が地山となる灰白色細砂である。遺構面は18層上面の1面のみで、北東から南西に向け低くなる緩やかな斜面である。検出遺構としては弥生時代後期の竪穴住居1棟、古代の溝・土坑・ピット等がある。

(2) 弥生時代の遺構

SH11001 (第6図)

I区北東端で検出した遺構で、南北約4mを測り、隅丸方形を呈すると考えられる。深さ約20cmで埋土は単層で黒褐色砂混粘質土である。床面は平坦面になっており、径20~40cmの柱穴を検出したことから、竪穴住居の可能性が考えられる。弥生土器の小片しか出土しておらず詳細な時期は不明であるが、弥生後期の遺構の可能性が高い。



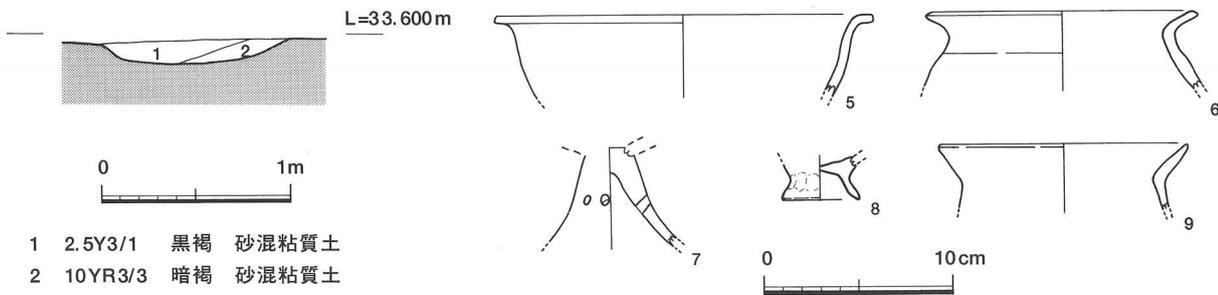
- 1 10YR3/1 黒褐 砂混粘質土
- 2 10YR3/2 黒褐 砂混粘質土

第6図 SH11001 平・断面図

(3) 古代の遺構

SD11001 (第7図)

I区北西端で検出した最大幅1m、深さ15cmの溝である。やや蛇行する東西方向の溝で、東側ほど細くなる。出土遺物を第7図に掲載した。5~8は弥生土器である。5は鉢、6は甕、7は高杯、8は製塩土器である。9は土師器の甕の口縁部である。弥生土器が多く含まれるが、7~8世紀頃の遺構と考えられる。

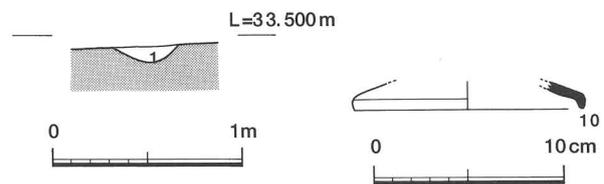


- 1 2.5Y3/1 黒褐 砂混粘質土
- 2 10YR3/3 暗褐 砂混粘質土

第7図 SD11001 断面図及び出土遺物実測図

SD11005 (第8図)

幅30cmの東西方向の溝で、西端が北側に屈曲し、L字を呈する。埋土は単層で、深さ10cmを測る。出土遺物は須恵器の蓋1点のみである。8世紀の遺構と考えられる。



- 1 10YR4/1 褐灰 砂混粘質土

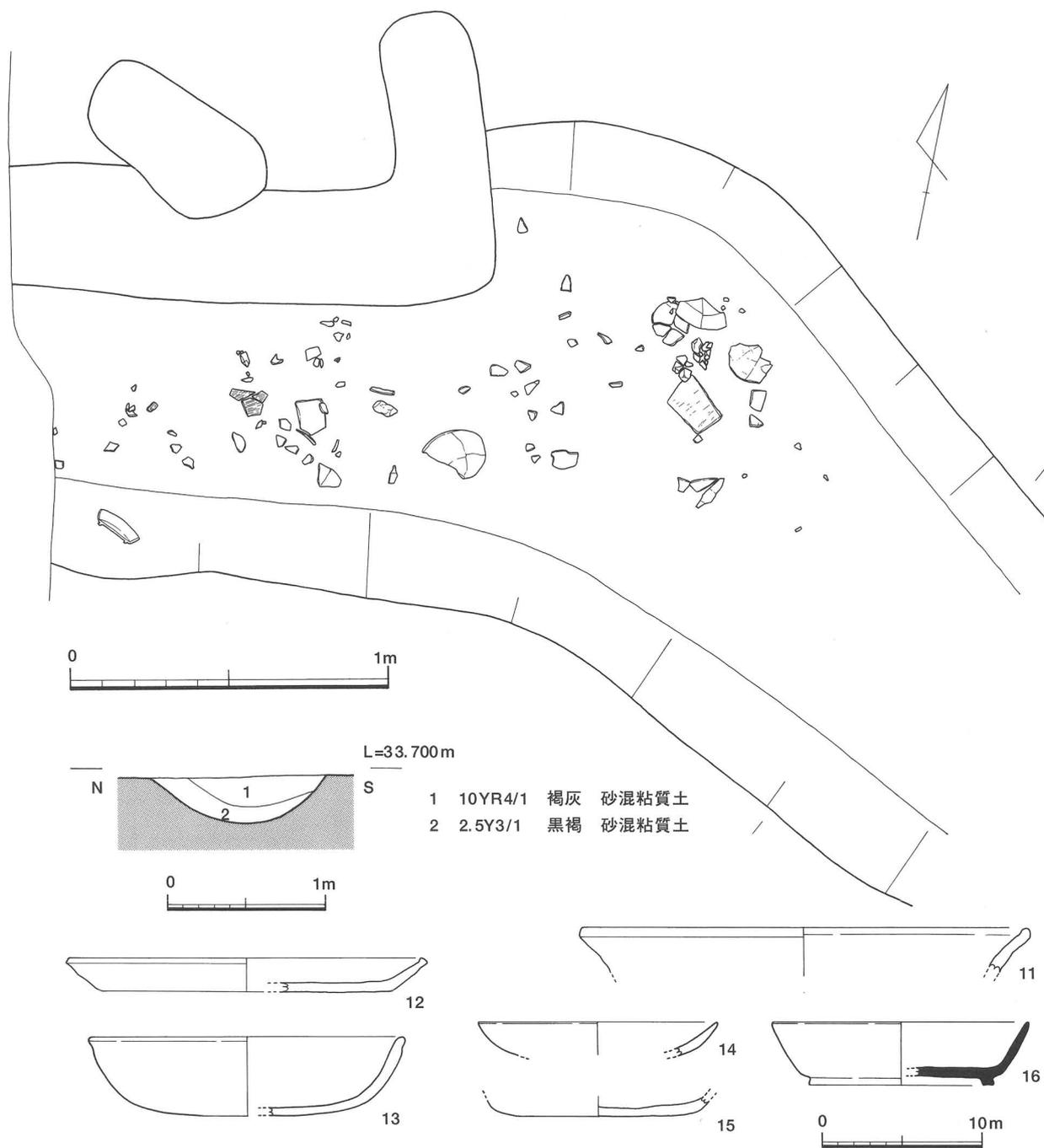
第8図 SD11005 断面図及び出土遺物実測図

SD11008 (第9図)

I区中央で検出した東西方向の溝で、検出長8.5m、幅1.6mを測る。埋土は褐灰色砂混粘質土と黒褐色砂混粘質土の2層に分層できる。溝の西端付近で遺物がまとまって出土した。11は土師器の甕の口縁である。12は土師器の皿である。13~15は土師器の坏である。16は須恵器の坏である。8世紀の遺構と考えられる。

SK11012 (第10図)

不整形な楕円形を呈する土坑で、長径3.44m、短径1.64m、深さ20cmを測る土坑である。埋土は単層で、断面は二段落ちになっている。17・18は弥生土器の甕である。19~24は弥生土器の製塩土器の脚部である。体部外面ヘラケズリ、脚部外面は指頭圧が見られる。25は土師器の甕である。弥生土器が多いが、7~8世紀の遺物を含んでおり、この頃の遺構と考えられる。



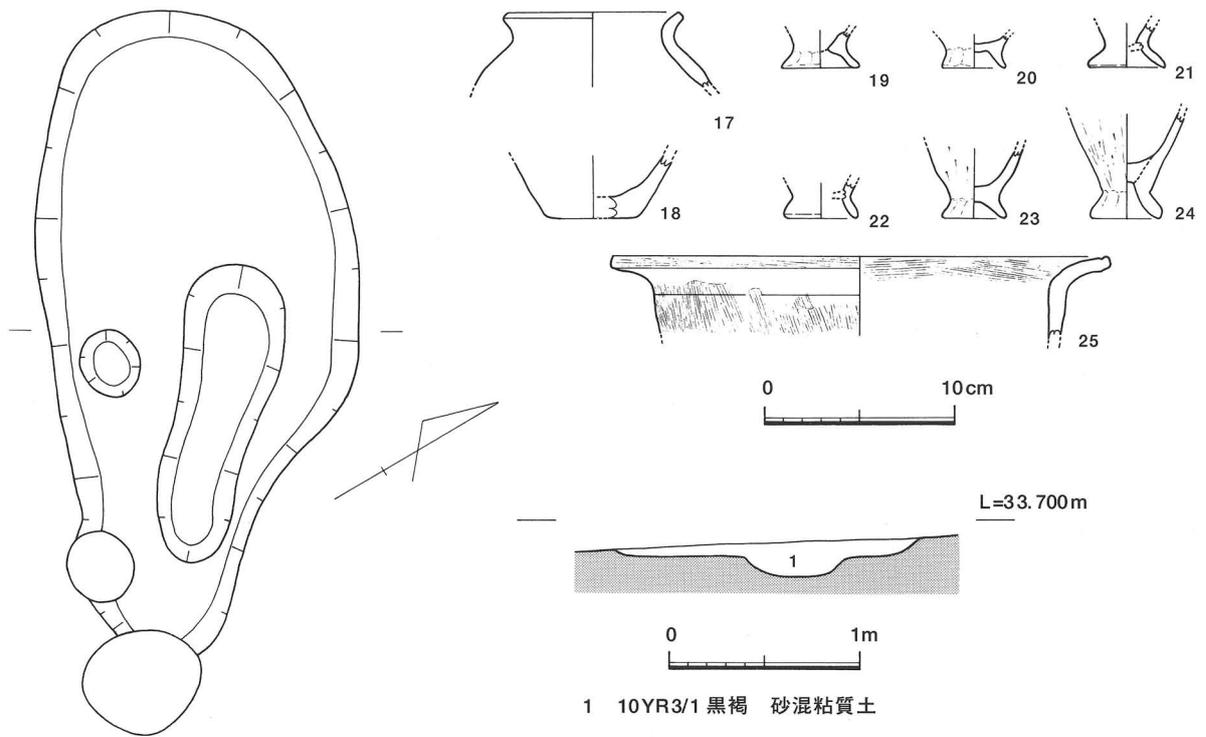
第9図 SD11008 平・断面図及び出土遺物実測図

SK11013 (第11図)

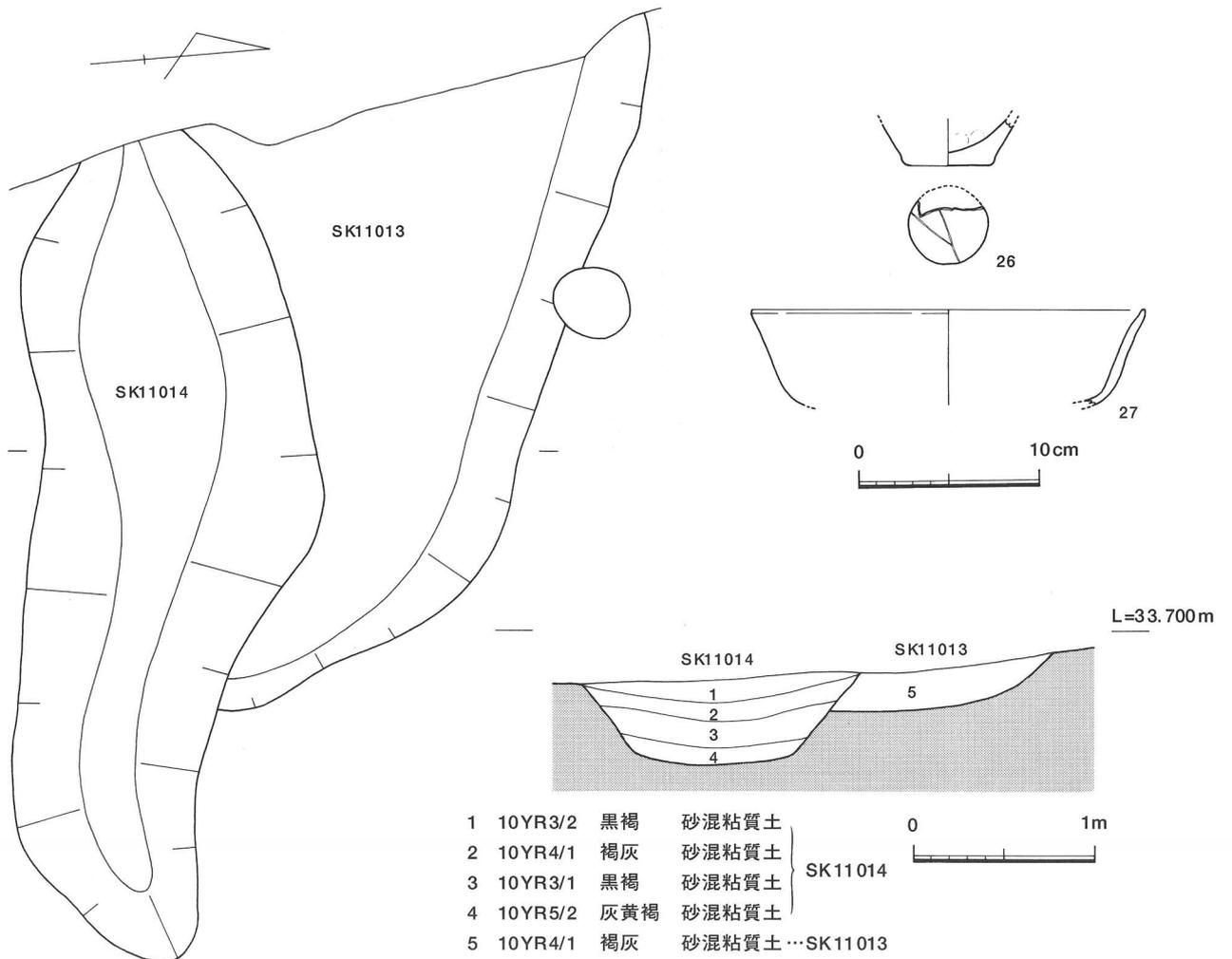
I区の南部で検出した土坑である。後述するSK11014に切られており、規模は不明であるが、4.5m以上の土坑である。埋土は褐灰色砂混粘質土の単層で、深さ25cmを測る。底面は平坦であるが、遺構面同様南西が低くなっている。遺物は2点のみ出土した。26は弥生土器の甕の底部で底面に線刻が認められる。27は土師器の坏である。7～8世紀頃の遺構と考えられる。

SK11014 (第11図)

検出長4.6m、最大幅1.56mの東西に長い溝状の土坑である。東西両端が比較的浅く、中央部が最深部となっており、深さ50cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は4層に分層でき、黒褐～灰褐色の埋土で、いずれも10～20cmの堆積である。SK11013を切ることから後出する遺構と考えられるが、遺物は出土しておらず、時期は不明である。



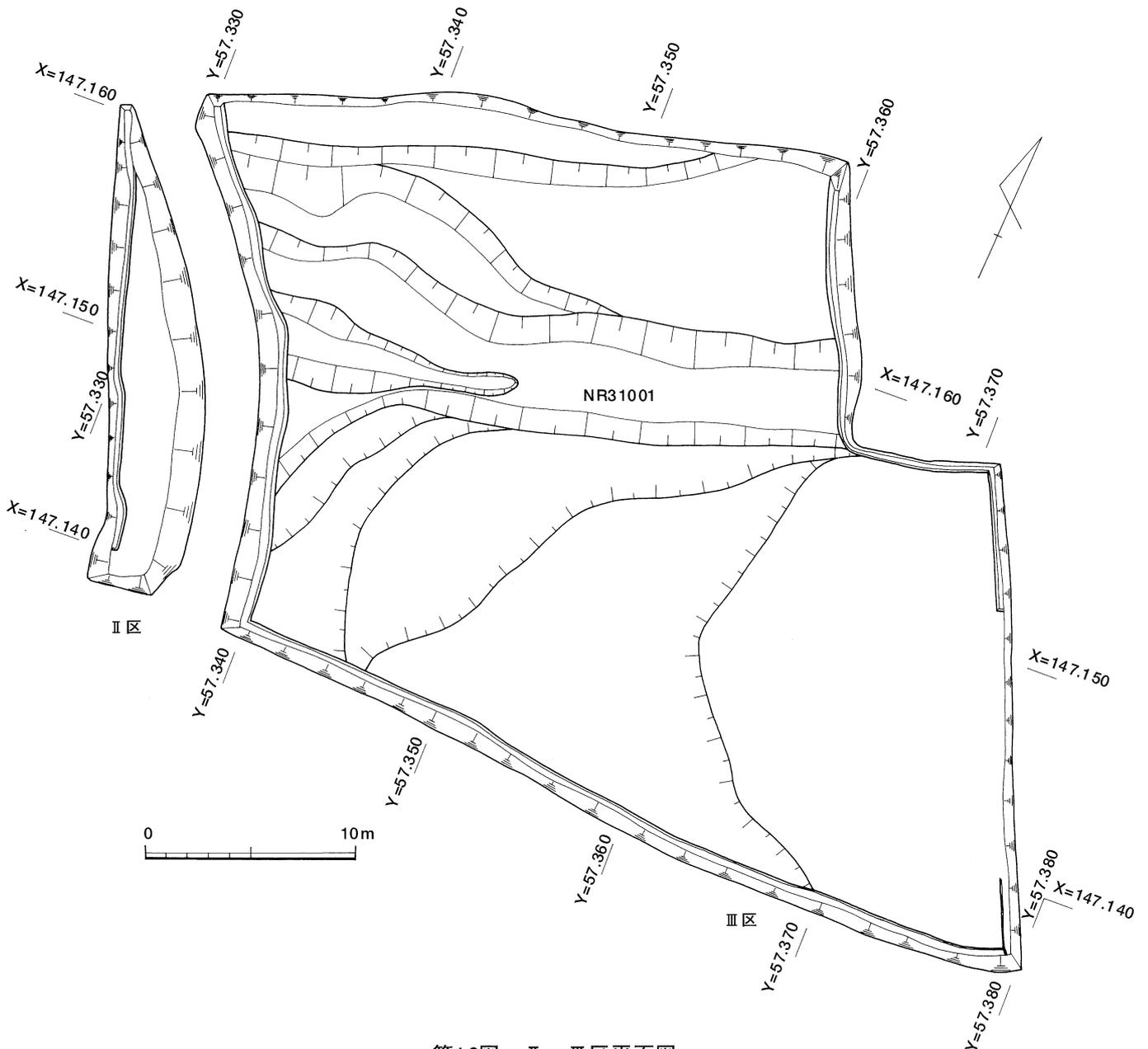
第10図 SK11012 平・断面図及び出土遺物実測図

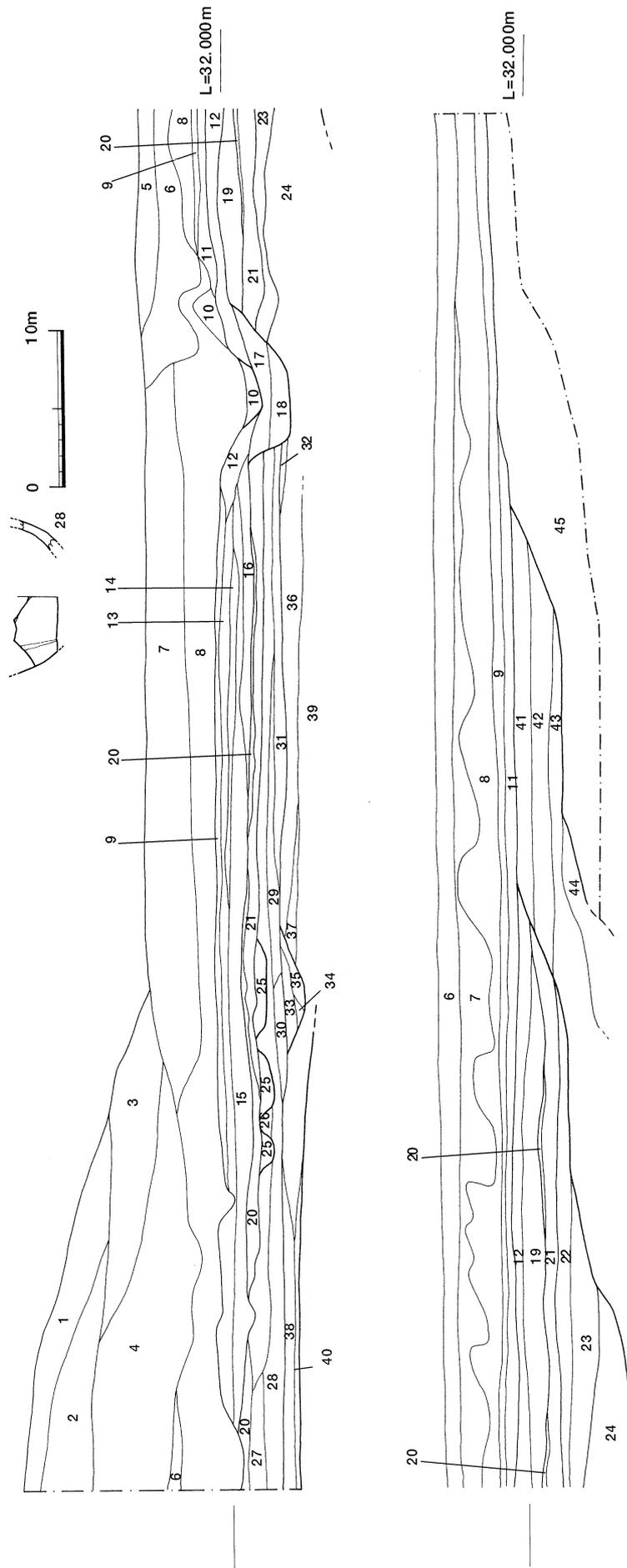


第11図 SK11013・11014 平・断面図及びSK11013 出土遺物実測図

第2節 II区の調査

調査地の南西端に位置し、最も狭い調査区である。調査区西壁において断面図を作成した。層序は45層に分層できる。1～4層は現代の客土層である。5～10層は近現代の耕作土層である。11層～44層は旧河道埋土である。45層は鈍い黄褐色砂混粘質土層で地山と考えられる。遺構面はこの45層上面の1面のみで、調査区のほぼ全域が旧河道（NR21001）で、川幅は15mを測る。最大幅4.5mの調査で、掘削深度が2mを越え、掘削に危険が伴うことから、土層の確認調査のみを行った。大別して5時期に分層できる。まず41～44層の粘質土層が堆積していることがうかがえる。その後流路の北肩は2mほど南へ移動し33～40層の砂層が堆積している。砂層の堆積の最終段階（33～35層）では幅約80cm、深さ約15cmの溝状の流路となっている。また、第3時期として25～32層の粘質土層が堆積し、この最終段階（25層）においても溝状の流路が認められる。さらに、第4時期についても17～24層の粘質土の堆積が認められ、最終段階（17・18層）では幅約1m、深さ約40cmの溝状の流路となっている。最終的に11～14層の粘質土の水平堆積により、河川としての機能を失っている。しかしながら、流路中央部は用水路としての機能を残していたことがうかがえる。旧河道出土遺物としては、第13図28の龍泉寮系青磁碗がある。





1	焼土	31	10GY7/1	明緑灰	シルト	41	2.5Y6/2	灰黄	粘質土
2	花崗土	32	5BG5/1	青灰	シルト	42	2.5Y5/3	黄褐	粘質土
3	10YR5/2 灰黄褐	33	10Y7/1	灰白	細砂	43	10YR5/3	にぶい黄褐	砂混粘質土
4	10YR3/1 黒褐	34	10YR4/6	褐	粗砂	44	10YR5/1	褐灰	砂混粘質土
5	10YR3/1 黒褐	35	5BG7/1	明青灰	シルト	45	10YR6/3	にぶい黄橙	砂混粘質土
6	10YR3/1 暗青灰	36	10GY8/1	明緑灰	粗砂				
7	10BG3/1 暗青灰	37	2.5Y5/6	黄褐	粗砂				
8	5B3/1 暗青灰	38	10Y8/1	灰白	細砂				
9	7.5GY5/1 緑灰	39	N7/0	灰白	細砂				
10	2.5Y8/1 灰白	40	10YR5/6	黄褐	細砂				
11	7.5YR5/6 明褐	21	2.5Y5/1	黄灰					
12	N5/0 灰	22	10YR6/3	にぶい黄橙	粘質土				
13	7.5YR4/6 褐	23	10BG5/1	青灰	粘質土				
14	10YR5/1 褐灰	24	10G7/1	明緑灰	微砂~シルト				
15	10YR8/1 灰白	25	2.5Y8/2	灰白	シルト				
16	5YR4/6 赤褐	26	10YR4/2	灰黄褐	粗砂				
17	N3/0 暗青灰	27	10YR3/2	黒褐	粗砂				
18	5B5/1 暗青灰	28	10YR5/2	灰黄褐	粘質土				
19	2.5Y3/1 緑灰	29	10YR4/3	にぶい黄褐	砂混粘質土				
20	2.5Y7/2 灰白	30	2.5Y6/3	にぶい黄	シルト				
21	7.5YR5/6 明褐	21	2.5Y5/1	黄灰	粘質土				
22	N5/0 灰	22	10YR6/3	にぶい黄橙	粘質土				
23	7.5YR4/6 褐	23	10BG5/1	青灰	粘質土				
24	10YR5/1 褐灰	24	10G7/1	明緑灰	微砂~シルト				
25	10YR8/1 灰白	25	2.5Y8/2	灰白	シルト				
26	5YR4/6 赤褐	26	10YR4/2	灰黄褐	粗砂				
27	N3/0 暗青灰	27	10YR3/2	黒褐	粗砂				
28	5B5/1 暗青灰	28	10YR5/2	灰黄褐	粘質土				
29	2.5Y3/1 緑灰	29	10YR4/3	にぶい黄褐	砂混粘質土				
30	2.5Y7/2 灰白	30	2.5Y6/3	にぶい黄	シルト				
31	10YR5/2 灰黄褐	31	10GY7/1	明緑灰	粘質土				
32	10YR3/1 黒褐	32	5BG5/1	青灰	粘質土				
33	10YR5/1 褐灰	33	10Y7/1	灰白	微砂~シルト				
34	10YR8/1 灰白	34	10YR4/6	褐	シルト				
35	5YR4/6 赤褐	35	5BG7/1	明青灰	粗砂				
36	N3/0 暗青灰	36	10GY8/1	明緑灰	砂混粘質土				
37	5B5/1 暗青灰	37	2.5Y5/6	黄褐	粘質土				
38	7.5GY5/1 緑灰	38	10Y8/1	灰白	粘質土				
39	2.5Y8/1 灰白	39	N7/0	灰白	砂混粘質土				
40	10YR5/2 灰黄褐	40	10YR5/6	黄褐	砂混粘質土				
41	10YR5/1 褐灰	41	10YR6/3	にぶい黄橙	粘質土				
42	10YR8/1 灰白	42	2.5Y5/3	黄褐	粘質土				
43	10YR5/3 砂混粘質土	43	10YR5/3	にぶい黄褐	砂混粘質土				
44	10YR5/1 砂混粘質土	44	10YR5/1	褐灰	砂混粘質土				
45	10YR6/3 砂混粘質土	45	10YR6/3	にぶい黄橙	砂混粘質土				

第13図 II区西壁土層断面図及び包含層出土遺物実測図

Ⅲ区土層断面図土色一覧

1	耕作土			34	2.5Y4/1	黄灰	砂混粘質土	旧河道中層
2	花崗土			35	7.5YR6/6	橙	砂混粘質土	
3	10YR5/4	にぶい黄褐	砂混粘質土	36	10YR5/4	にぶい黄橙	砂混粘質土	
4	10YR7/2	にぶい黄橙	細砂～粗砂	37	10YR5/1	褐灰	砂混粘質土	
5	7.5YR2/1	黒	粘質土	38	7.5YR6/3	にぶい褐	細砂～粗砂	
6	10YR3/1	黒褐	粘質土	39	10YR5/4	にぶい黄褐	粗砂	
7	7.5YR3/1	黒褐	粘質土	40	7.5YR5/3	にぶい褐	細砂～粗砂	
8	2.5Y3/1	黒褐	砂混粘質土	41	10YR4/2	灰黄褐	粗砂	
9	7.5Y5/2	灰オリーブ	砂混粘質土	42	2.5Y6/2	灰黄	粗砂	
10	5Y3/1	オリーブ黒	砂混粘質土	43	7.5YR4/4	褐	砂混粘質土	
10	2.5Y2/1	黒	砂混粘質土	44	2.5Y3/1	黒褐	砂混粘質土	
12	10YR6/4	にぶい黄橙	砂混粘質土	45	10YR5/2	灰黄褐	砂混粘質土	
13	5Y4/3	暗オリーブ	砂混粘質土	46	7.5YR6/3	にぶい褐	砂混粘質土	
14	2.5Y6/2	灰黄	砂混粘質土	47	10YR3/2	黒褐	砂混粘質土	
15	10YR7/2	にぶい黄橙	砂混粘質土	48	2.5Y7/2	灰黄	シルト	
16	7.5GY5/1	緑灰	砂混粘質土	49	10YR6/2	灰黄褐	細砂	
17	2.5Y6/1	黄灰	砂混粘質土	50	2.5Y6/1	黄灰	細砂	
18	10YR5/2	灰黄褐	砂混粘質土	51	2.5Y5/3	黄褐	砂混粘質土	
19	2.5Y5/2	暗灰黄	砂混粘質土	52	2.5Y5/1	黄灰	砂混粘質土	
20	10YR6/1	褐灰	シルト	53	7.5YR3/2	黒褐	砂混粘質土	
21	2.5Y2/1	黒	砂混粘土	54	10YR7/2	にぶい黄橙	粗砂	
22	2.5Y8/3	淡黄	細砂	55	10YR8/2	灰白	粗砂	
23	2.5Y6/1	黄灰	粘質シルト	56	10YR6/1	褐灰	細砂～粗砂	
24	10YR6/4	にぶい黄橙	砂混粘質土	57	5Y5/1	灰	細砂～粗砂	
25	2.5Y6/2	灰黄	粘質シルト	58	10YR6/3	にぶい黄橙	細砂	
26	10BG4/1	暗青灰	細砂～粗砂	59	5YR3/6	暗赤褐	細砂～粗砂	
27	10YR6/4	にぶい黄橙	粗砂	60	7.5YR7/2	明褐灰	細砂～粗砂	
28	7.5YR4/2	灰褐	砂混粘質土	61	2.5GY6/1	オリーブ灰	粘質シルト	
29	2.5GY7/1	明オリーブ灰	粗砂	62	7.5YR4/1	褐灰	砂混粘質土	
30	10YR5/1	褐灰	砂混粘質土	63	10YR3/1	黒褐	砂混粘質土	
31	10YR8/3	浅黄橙	砂混粘質土	64	10YR7/1	灰白	細砂	
32	7.5YR3/1	黒褐	砂混粘質土	65	10YR5/4	にぶい黄褐	粗砂	
33	10YR6/4	にぶい黄橙	粗砂					

第3節 Ⅲ区の調査

調査地の南端に位置する。Ⅱ区同様ほぼ全域が旧河道（NR31001）である。旧河道流路に直交するように調査区西壁において断面図を作成した。層序は65層に分層できる。概ね1～15層は近現代の耕作土層である。16層～64層は旧河道埋土である。65層は鈍い黄褐色混粘質土層で無遺物層である。試掘調査時には65層以下に堆積する青灰色砂混粘質土層においても弥生土器の小片が数点出土していることから、旧河道はさらに深くなることが予想された。しかしながら、掘削深度が3mを越え、壁面の崩壊が起こったことから、調査は64層までとした。旧河道は大別して7時期に分層できる。まず65層以下の青灰色砂混粘質土層が堆積しており、その後、厚さ50cmの65層の粗砂層で旧河道が一気に埋没している。また、今回調査部分最下層の56～64層の細砂～粗砂層が堆積している。次いで流路が北側へ移動し、下層部分の40～55層の砂混粘質土層が堆積している。その後、中層部分の23～39層の砂混粘質土層が堆積し、ほぼ水平堆積となっている。最後に、上層部分の15～22層が堆積し、完全に埋没していることがうかがえる。

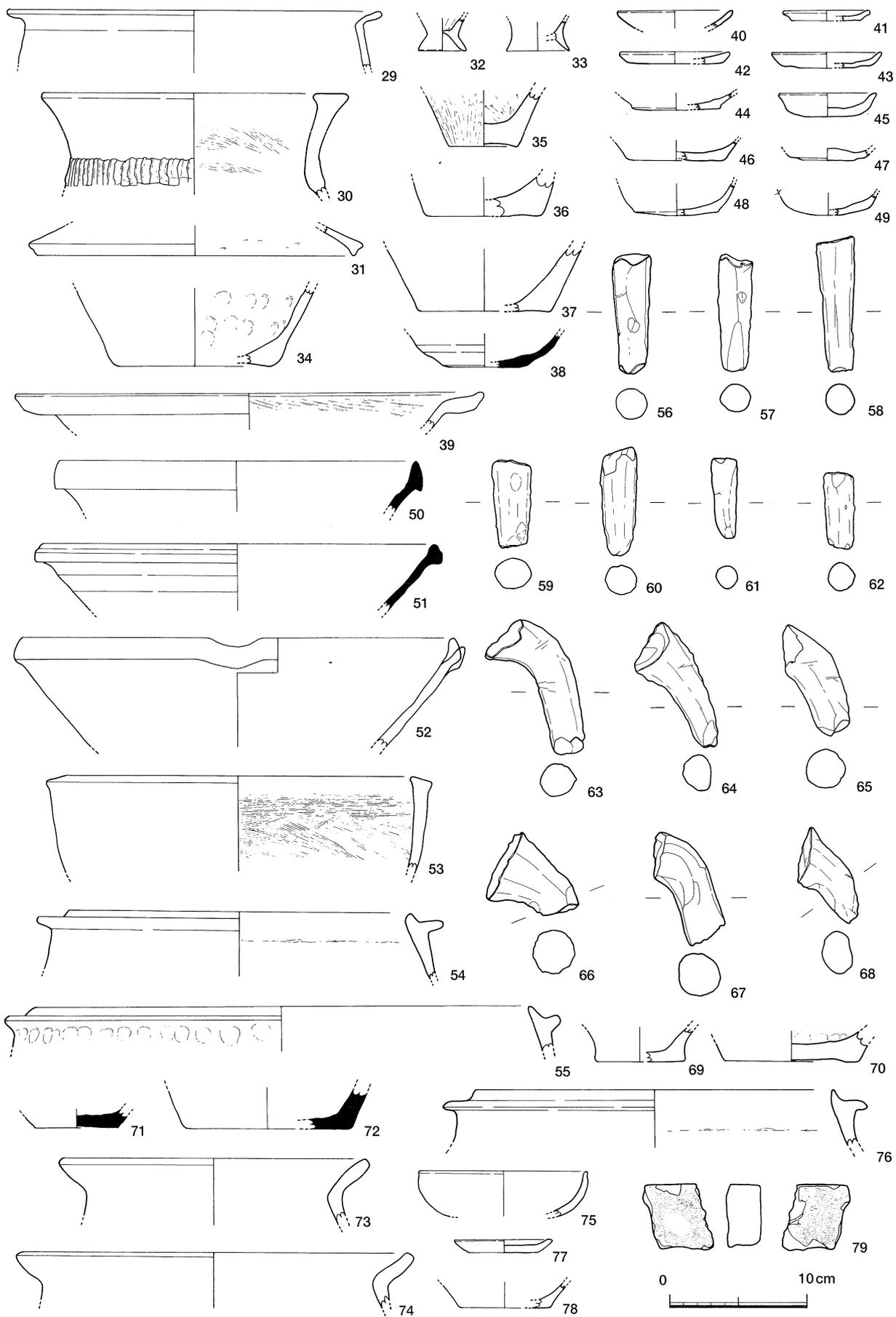
出土遺物は第16～19図に掲載した。29～68は上層出土遺物である。29～37は弥生土器である。29は弥生中期の甕である。30は弥生中期の広口壺で、頸部に押圧突帯を施している。31は弥生後期の高杯脚裾部で、内面ヨコハラケズリが見られる。32・33は弥生後期の製塩土器脚部である。35～37は弥生中期の甕底部である。38は須恵器の坏である。39は土師器の鍋である。40～49は土師器の皿である。50・51は須恵器の鉢である。52は土師器の鉢で、片口が見られる。53～55は土師器の羽釜である。56～68は土師器の鍋の脚である。69～92は中層出土遺物である。69・70は弥生土器の底部である。71・72は須恵器の壺である。73・74は土師器の甕である。75は土師器の坏である。77・78は土師器の皿である。79は土師質焼成の平瓦で、布目が見られる。

80～83・85は龍泉窯系青磁碗で、外面に鎬蓮弁が見られるものもある。84は同安窯系青磁皿である。86は石鍋である。87～91は土師器の鍋の脚である。92は土師器の竈である。前面に短い庇がつき、ハケ及び指頭圧

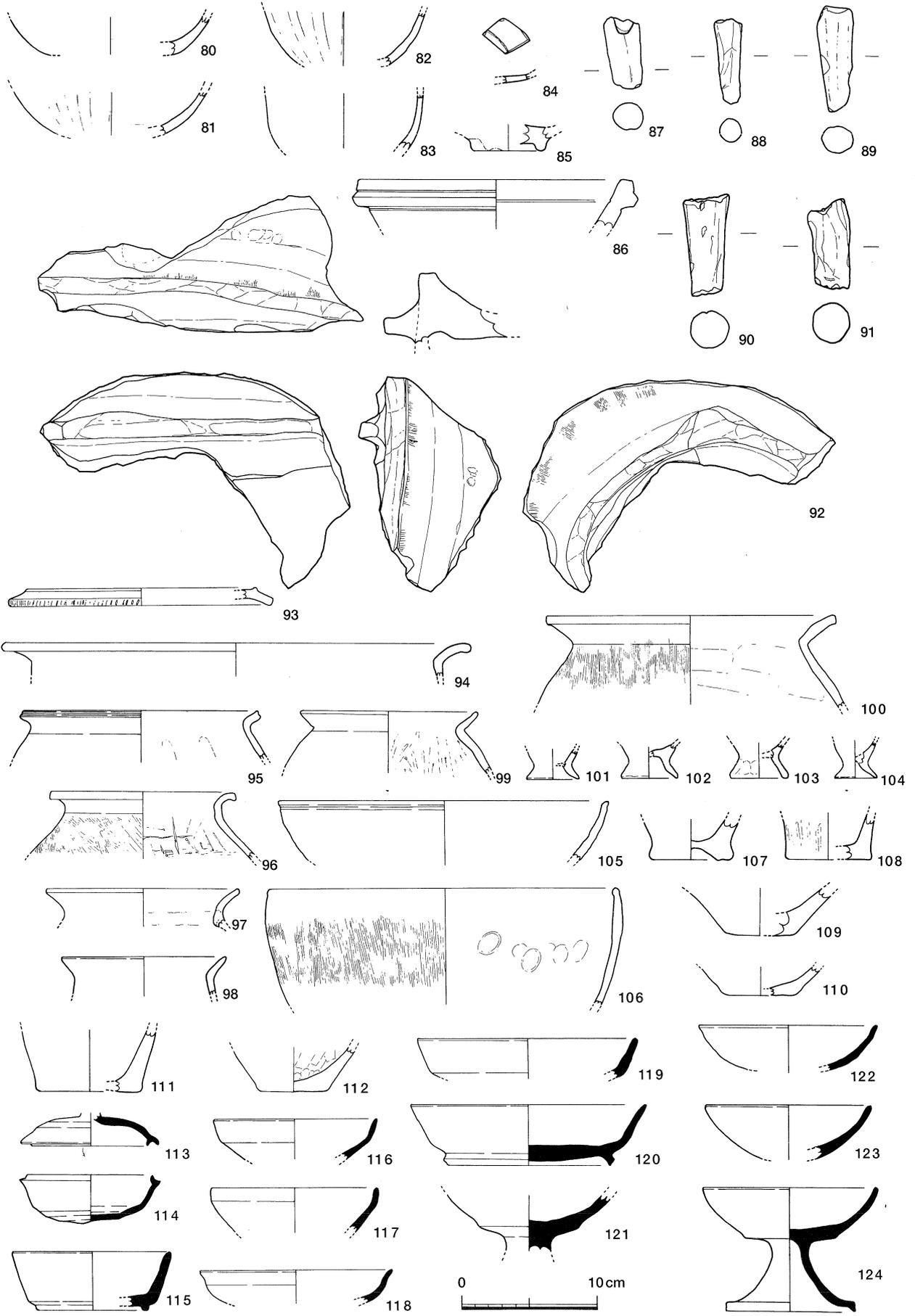
が見られる。93～143及びS1・S2は下層出土遺物である。93～112は弥生土器である。93は弥生中期の広口壺で、口縁端部に刻目を施し、内面突帯が見られる。94は弥生中期の甕である。95～98は弥生後期の甕である。95は口縁端部に凹線1条施し、内面指頭ナデである。96は外面タテハケ、内面タテヘラケズリのちヨコハラケズリである。99は球形の体部で、内面タテヘラケズリである。100は外面タテハケ、内面板ナデである。101～104は製塩土器の脚部である。105・106は弥生後期の鉢である。105は口縁部外面に凹線1条を施している。106は外面タテハケ、内面指頭圧である。107～112は底部である。113～129は須恵器である。113は坏蓋で、つまみがつくものである。114～120は坏である。121～128は短脚高杯で、129は長脚である。130～139は土師器の甕である。外面タテハケ、内面ヨコハケである。140～143は土師器の坏である。S1は凹基



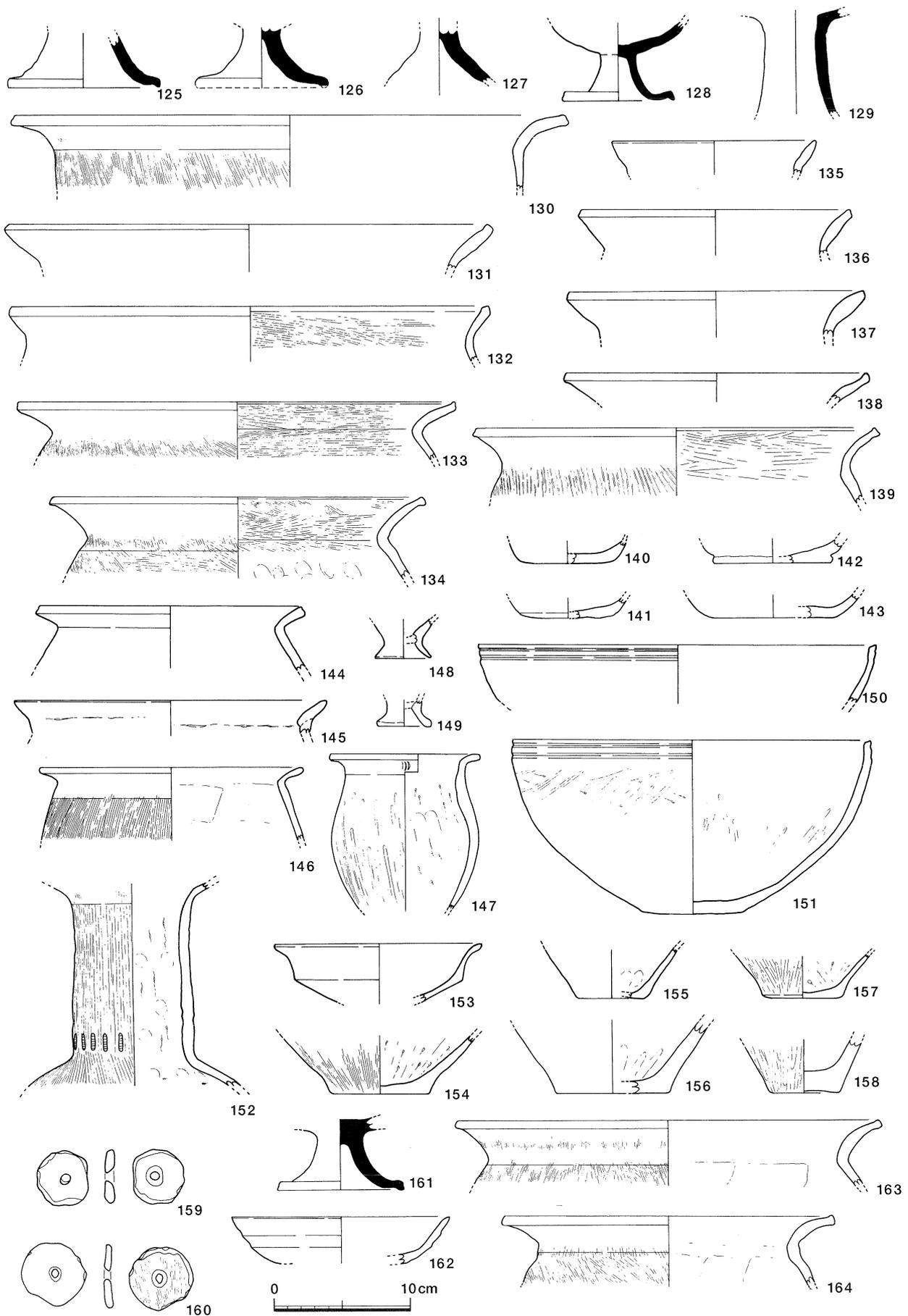
第15図 NR31001 下層遺物出土状況図



第16图 NR31001 出土遺物実測图①



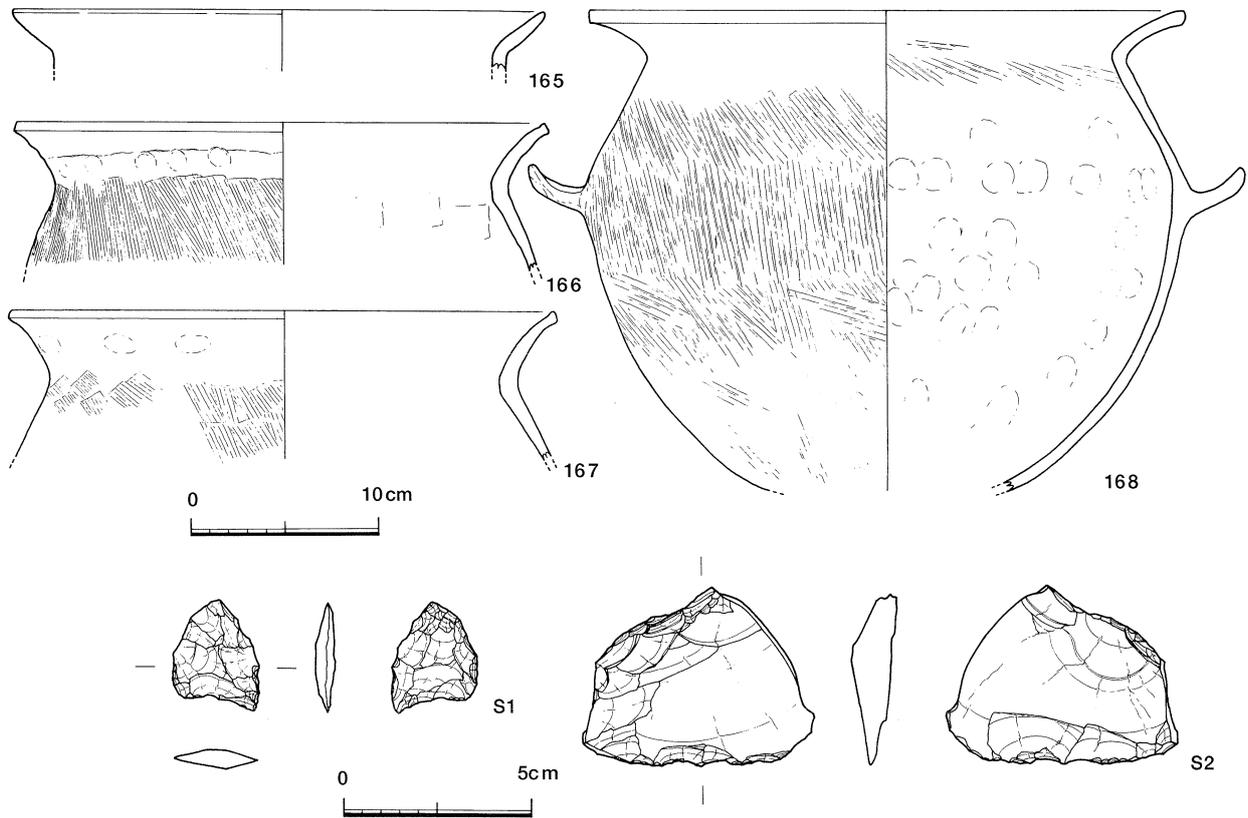
第17图 NR31001 出土遺物実測图②



第18图 NR31001 出土遺物実測图③

式の石鏃である。S2は石庖丁である。144～168は最下層出土遺物である。144～160は弥生土器である。144～147は甕である。146は中期の甕で、外面タテハケ、内面板ナデである。147は後期の甕で、外面タテハラミガキ、内面タテハラケズリのち指頭ナデである。また、頸部外面に3個の爪形の記号文が見られる。148・149は弥生後期の製塩土器脚部である。150・151は弥生後期の鉢で、口縁部外面に凹線2条を施している。152は弥生後期の長頸壺で、外面タテハケ、内面指頭圧で、頸部外面最下段にハケ原体による刺突文が見られる。153は弥生後期の高杯である。154～158は底部である。159・160は土器転用の紡錘車である。161は須恵器の高杯である。162は土師器の坏である。163～168は土師器の甕である。外面タテハケ及び指頭圧、内面ヨコハケまたは板ナデである。168には取手が見られる。

旧河道の時期は、先述した層序のとおり、7時期が考えられる。遺物の出土状況と合わせて、65層以下については弥生土器しか出土しておらず、弥生時代の流路と考えられる。65層については遺物が含まれておらず、不明であるが、上下層の出土遺物から弥生～古代の間に位置づけられる。今回調査の最下層部分においては弥生土器及び7・8世紀の遺物しか含まないことから、奈良時代頃の堆積層と考えられる。下層においてもほぼ同時期の遺物であるが、わずかに中世の遺物が含まれることから、古代～中世までの流路と考えられる。中層では中世の遺物が主体となっていることから、中世の流路と考えられる。上層も中層とほぼ同様であるが、図示した遺物の外に、陶磁器の小片も少量含んでいたことから、最終埋没は近世と考えられる。



第19図 NR31001 出土遺物実測図④

第4節 IV区の調査

(1)概要と基本層序

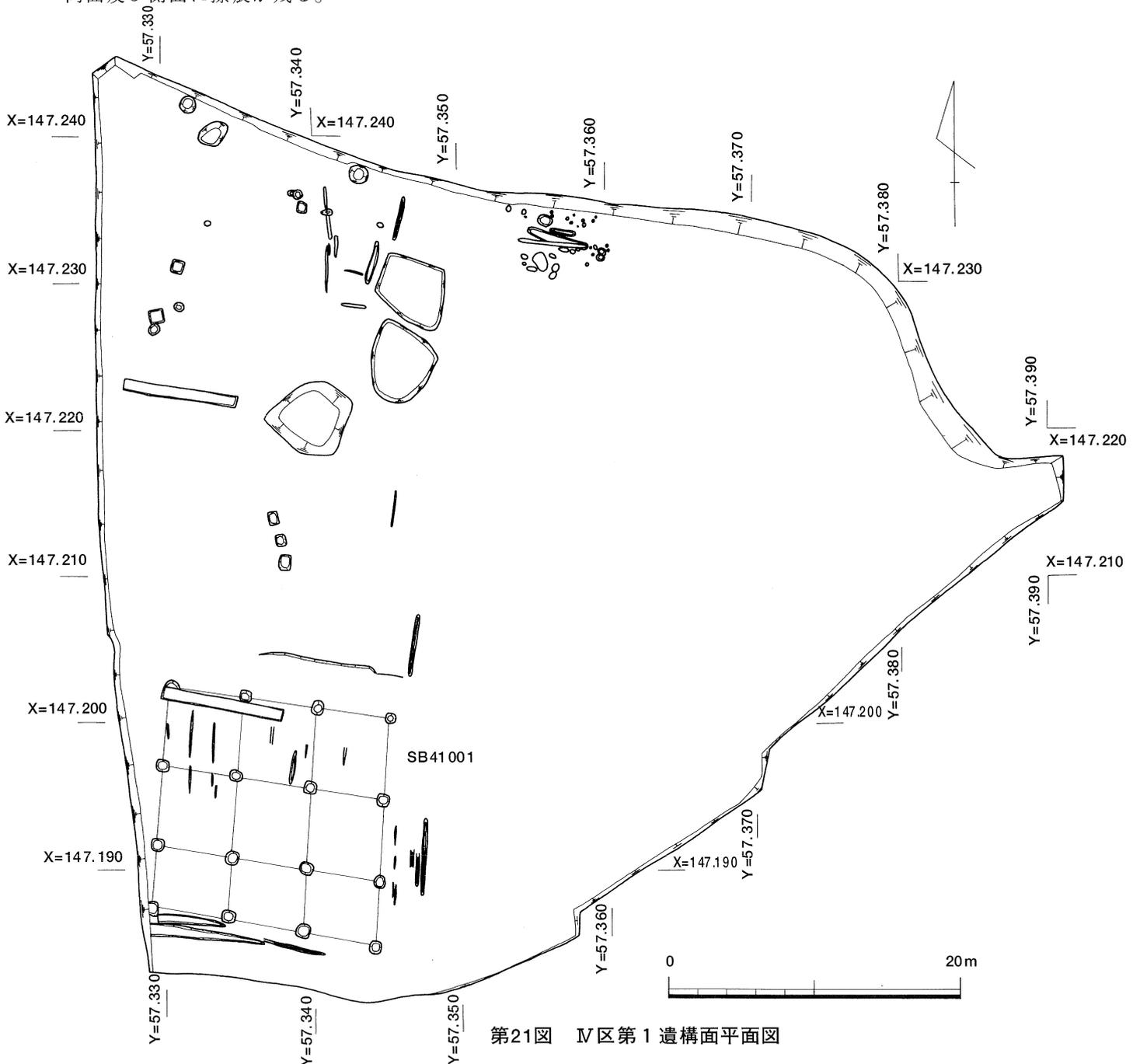
調査地の中央部に位置し、最も広い調査区で、現状では平坦面である。最も残りの良い調査区西壁において断面図を作成した。1～13層は近現代の耕作等に伴う層で、11層は畦畔である。14～17層の砂混粘質土層は中世以前の遺物包含層で、特に17層の黒褐色砂混粘質土層から多量の遺物が出土した。19層の淡黄色シルト～細砂層は地山である。18層はこの地山上面から掘り込まれた遺構である。調査区東半では14～17層については認められず、近現代の耕作土層直下で19層の地山となる。遺構面は14層上面および19層上面の2面を検出した。14層上面の第1遺構面は調査区西半のみで認められ、近世以降の遺構面と考えられる。鋤溝と掘立柱建物が認められる。19層上面の第2遺構面は弥生中期～古代の遺構面と考えられる。ただし、調査区東半では近世以降の遺構も同一面で検出した。第2遺構面の主な遺構としては竪穴住居、掘立柱建物、土坑等がみられる。遺構面はほぼ平坦面であるが、北東から南西に向けわずかに斜面となっており、遺構面の標高



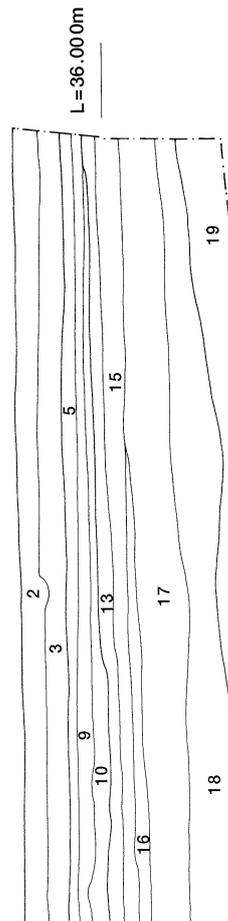
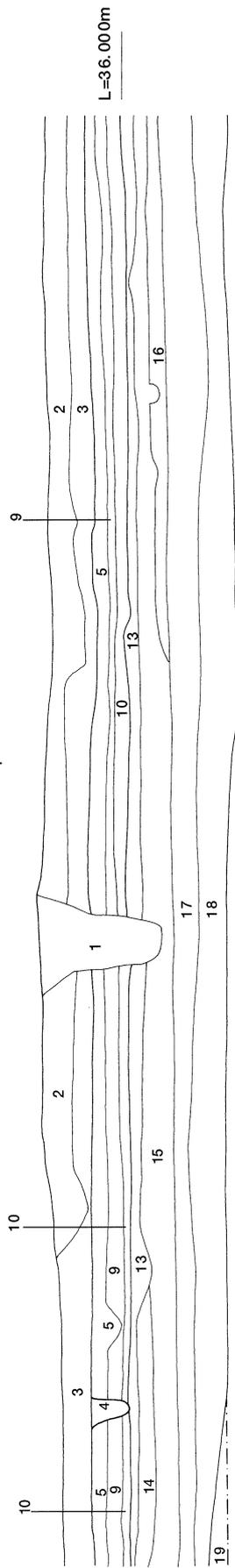
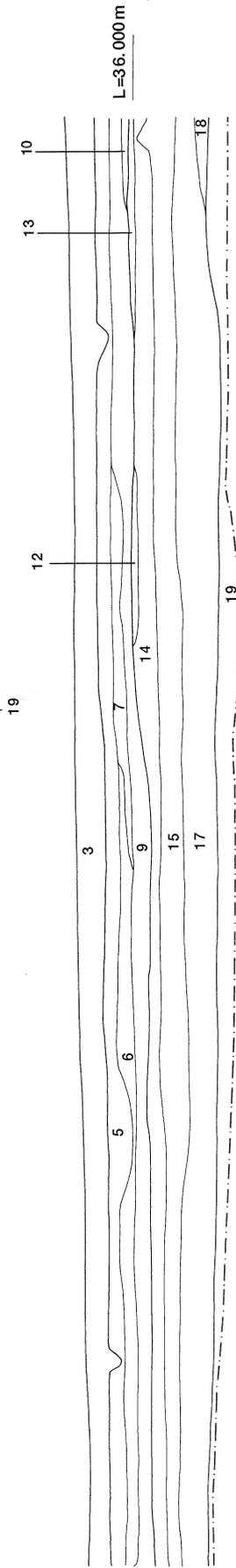
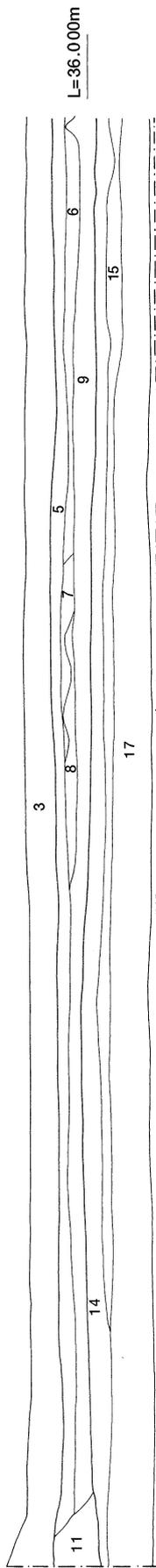
第20図 IV区第2遺構面平面図

は北東端で36.8m，南西端で35.6mである。調査区東半は削平が著しく，遺構も西半に密集しており，東半は散漫で近世以降の遺構しか検出していない。

遺物包含層の14～17層から多量の遺物が出土した。概ね弥生中期から中世の遺物で，特に弥生後期と古代の遺物が多く出土した。遺物の実測図は第23図に掲載した。169～172は弥生後期の甕である。169は外面にタテハケが見られる。170は内面にヨコヘラケズリが見られる。171・172は外面タテハケ，内面指頭圧が見られ，口縁端部内面をわずかに窪ませる。173・174は弥生後期の鉢で，外反する口縁部を有する。173は内面ヨコヘラケズリのちヨコヘラミガキである。175は弥生中期の甕である。176～178は外面にタテヘラケズリを施す製塩土器である。176の脚部内面には山形の線刻が認められる。179は土師器の甕で，外面粗いタテハケ，内面ヨコヘラケズリである。180は須恵器の甕で，頸部外面に三本線の線刻が認められる。181～184は須恵器の坏の底部である。185は須恵器の壺の底部である。186は須恵器の高杯の脚部である。187は龍泉窯系青磁碗である。188～190は土師器の坏である。191は土師器の皿である。S3は石槍で，側縁部は両面より丁寧に調整が施されている。S4は磨製の石庖丁で，円孔が認められる。S5は石核である。S6は砥石である。両面及び側面に擦痕が残る。

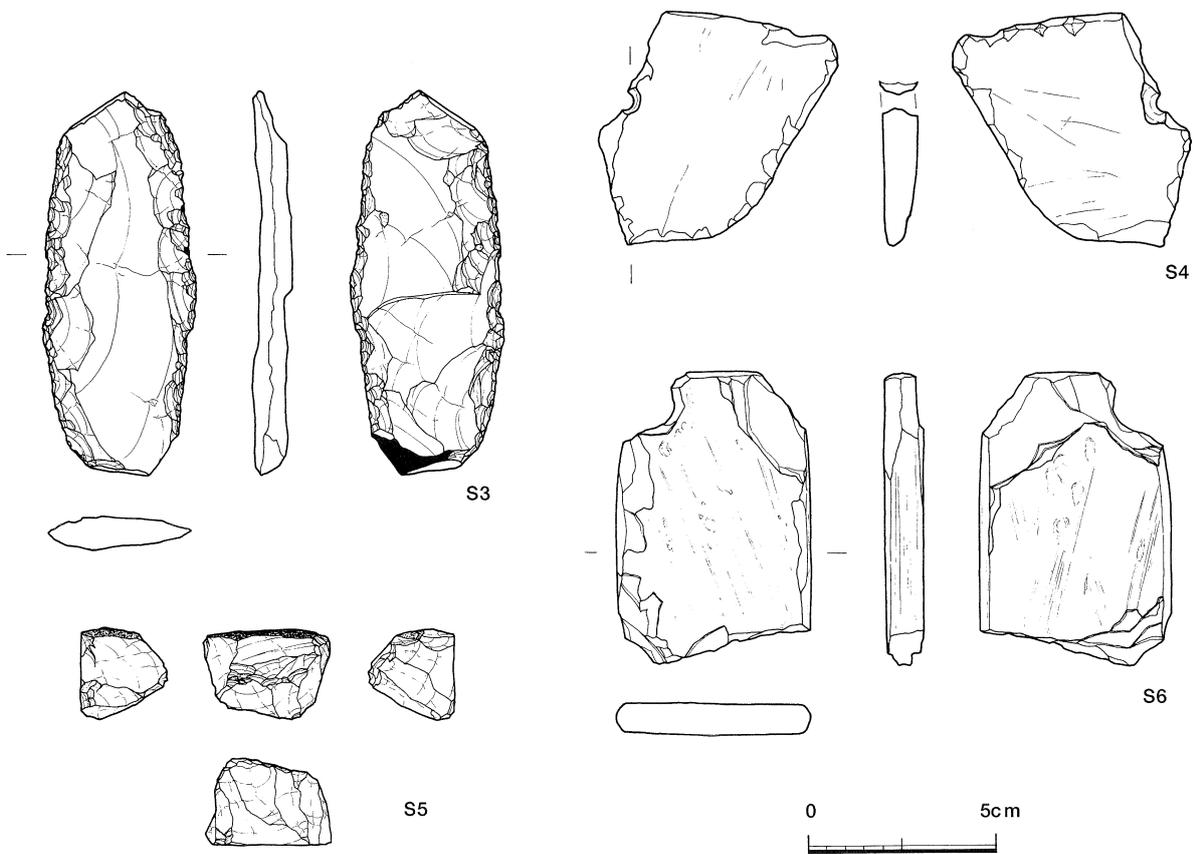
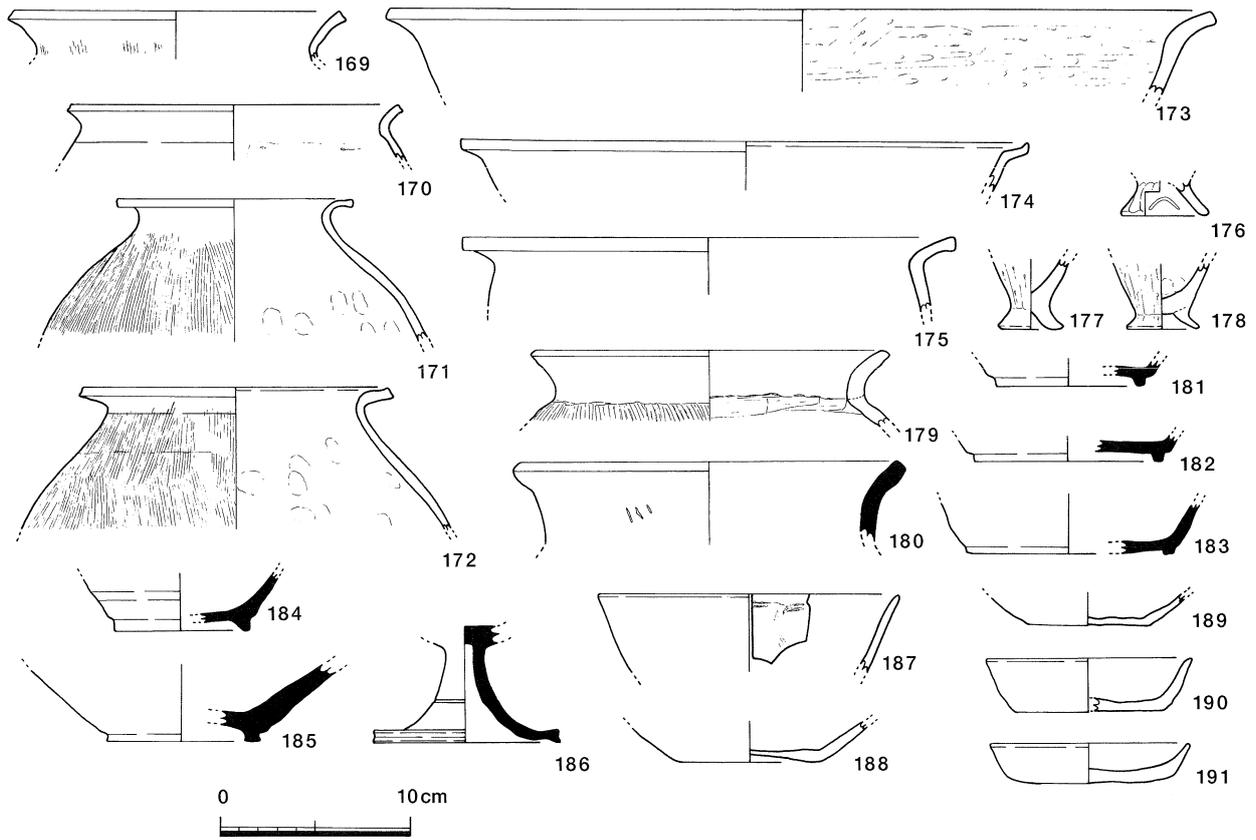


第21図 IV区第1遺構面平面図



- | | | | | |
|----|---------------|----|---------------|--------|
| 1 | 花崗土 | 11 | 10YR4/2 灰黄褐 | 砂混粘質土 |
| 2 | 攪乱 | 12 | 2.5Y4/3 オリーブ褐 | 粗砂 |
| 3 | 耕作土 | 13 | 10YR6/4 にぶい黄橙 | 砂混粘質土 |
| 4 | 5Y5/1 灰 | 14 | 10YR6/3 にぶい黄橙 | 砂混粘質土 |
| 5 | 床土 | 15 | 10YR4/3 にぶい黄褐 | 砂混粘質土 |
| 6 | 7.5YR3/4 暗褐 | 16 | 10YR4/1 褐灰 | 砂混粘質土 |
| 7 | 10YR6/3 にぶい黄褐 | 17 | 10YR3/1 黒褐 | 砂混粘質土 |
| 8 | 7.5YR3/3 暗褐 | 18 | 10YR4/1 褐灰 | 砂混粘質土 |
| 9 | 7.5YR5/1 褐灰 | 19 | 2.5Y8/3 淡黄 | シルト～細砂 |
| 10 | 7.5YR4/2 灰褐 | | | 砂混粘質土 |

第22図 IV区西壁土層断面図

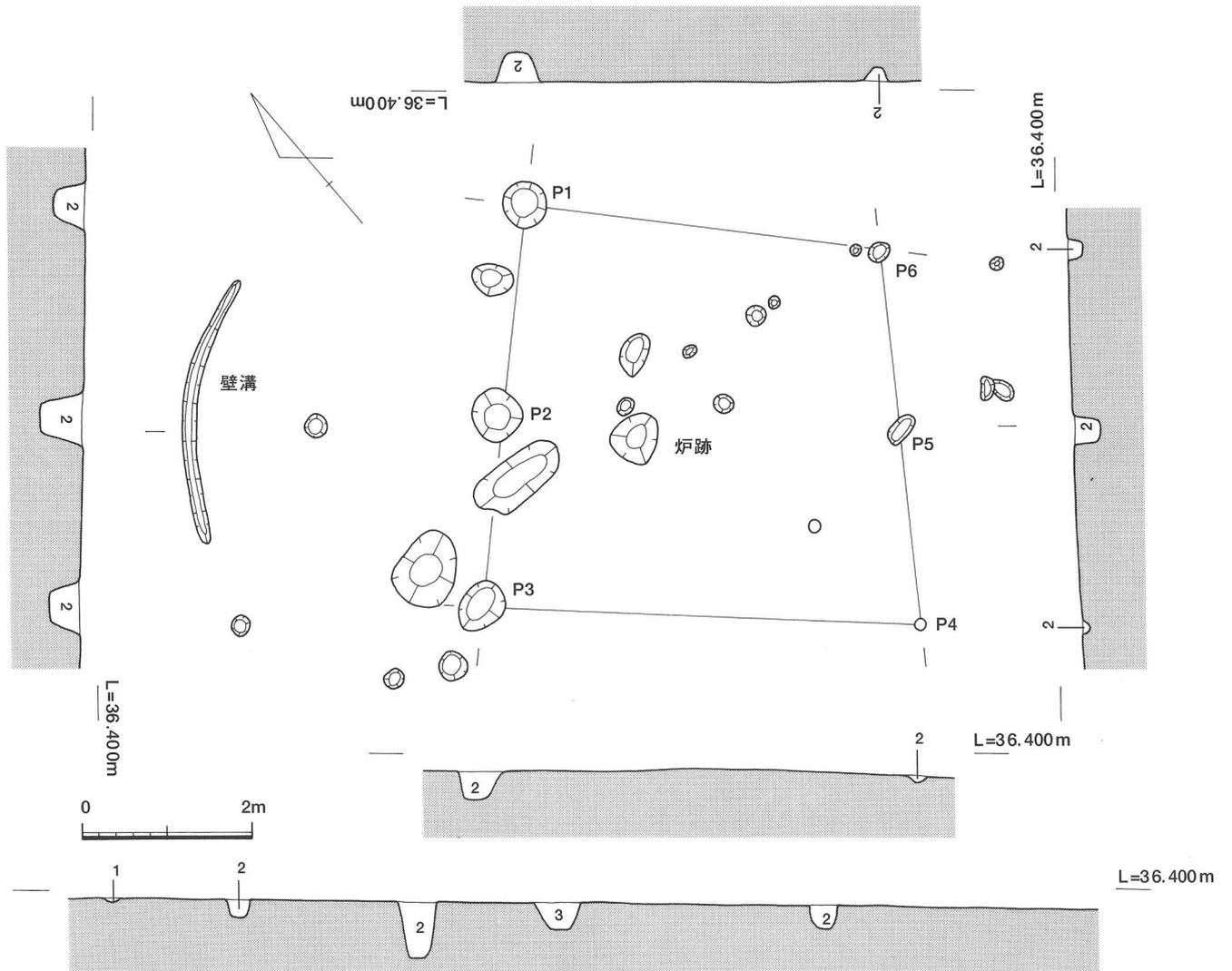


第23图 IV区包含层出土遗物实测图

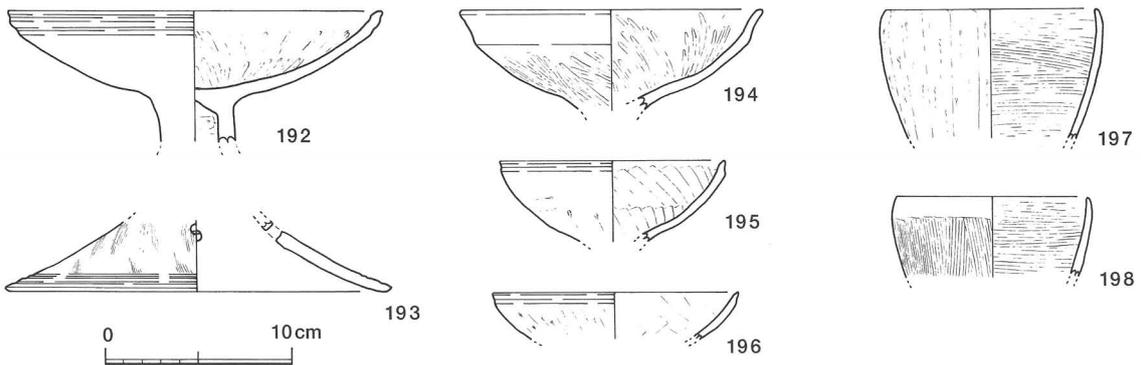
(2) 弥生時代の遺構

SH42001 (第24図)

調査区の中央部で検出した竪穴住居である。削平が著しく、壁溝の一部と支柱穴及び炉跡を検出したにすぎない。埋土は全く残っておらず、削平が著しい。壁溝と考えられる溝は竪穴住居の北西部のみ残存しており、幅15cm、深さ5cm、検出長3.1mである。支柱穴はP1～P6と考えられ、1間(5.2m)×2間(4.8m)を測



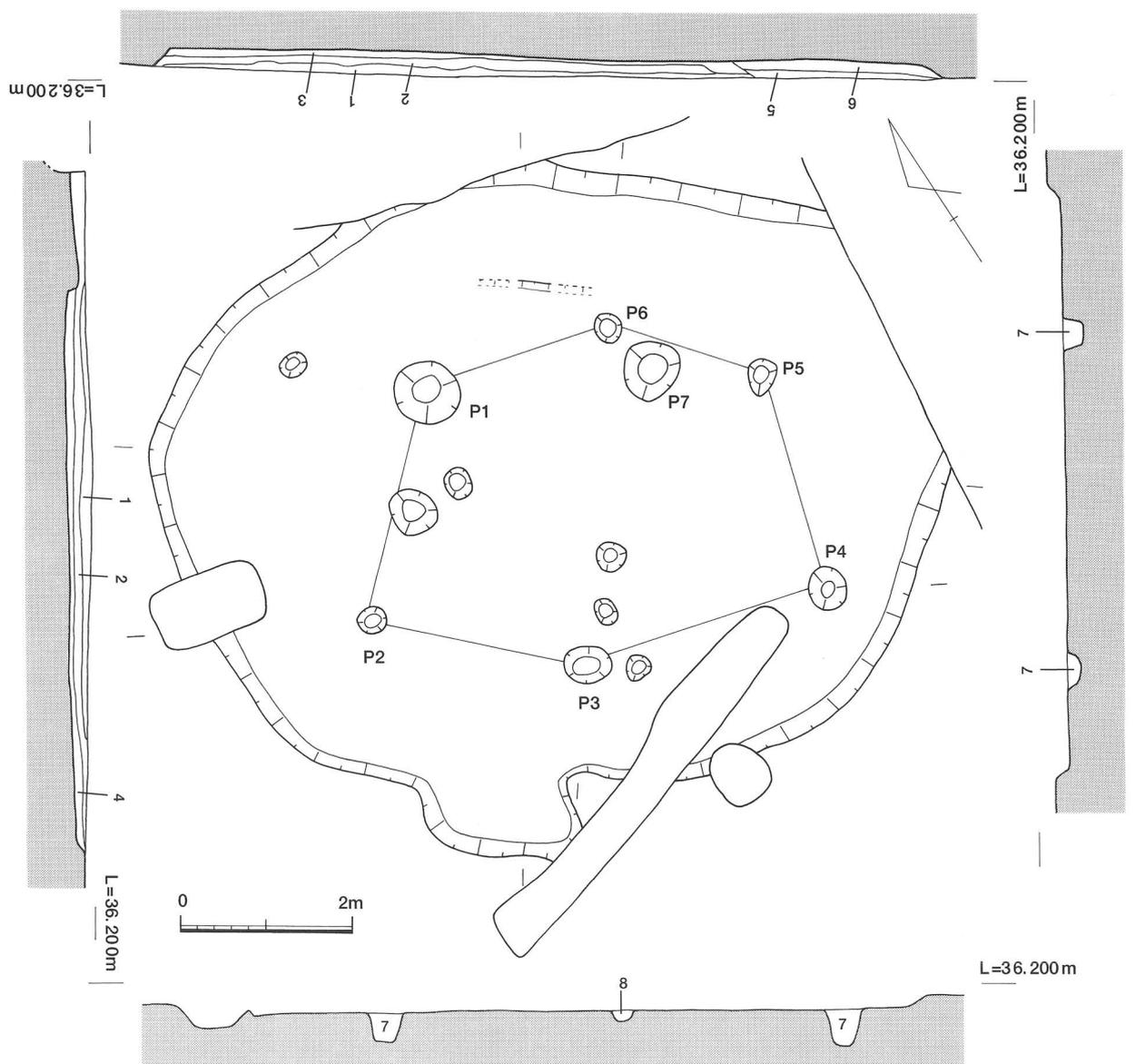
1 10YR 4/1 褐灰 砂混粘質土 2 10YR 3/1 黒褐 砂混粘質土 3 10R 6/6 赤橙 粘土 (炭・焼土含む)



第24図 IV区SH42001 平・断面図及び出土遺物実測図

る。P4～P6は削平が著しく小規模な柱穴であるが、P1～P3は直径50cm前後、深さ35～50cmを測る。主柱穴の内外ではピットを多数検出した。中でもP2の南東側で焼土を多く含むピットを1基検出しており、炉跡と考えられる。炉跡は長径60cm、短径52cmの卵形を呈し、深さ30cmを測る。主柱穴であるP1～P6の中心を竪穴住居の中心と考えれば、直径約12mの円形の竪穴住居を復元できる。

遺物は遺構直上で検出したものと主柱穴から出土したものがある。192・193は遺構検出作業時に竪穴住居上面で出土したものである。192は高杯の杯部で、皿状の形態を呈し、口縁部外面に凹線を2条施している。内面は杯部がタテヘラミガキで、脚柱部はヨコヘラケズリである。193は192と同一個体の可能性が高いもので、高杯の脚裾部である。外面はタテハケで、円形スカシ4方向と凹線2条が施されている。194～197は主柱穴のP2から出土した遺物である。194～196は高杯の杯部である。194は外反する口縁部を持つもので、内外面ともタテヘラミガキが施されている。195・196は皿状の杯部で口縁部外面に凹線を1条巡らせている。外面タテヘラケズリ、内面板ナデである。197は製塩土器の口縁部で外面タテヘラケズリ、内面ヨコハケである。198は主柱穴のP5から出土した製塩土器である。外面タテハケ、内面ヨコハケである。弥生後期前半の竪穴住居と考えられる。

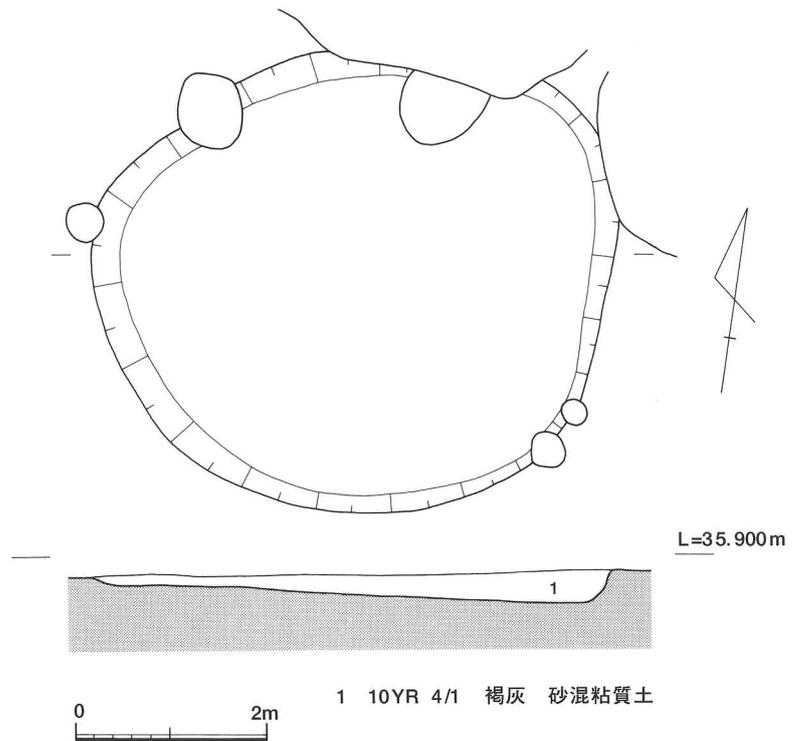


1	10YR 3/4	暗褐灰	細砂～粗砂	4	10YR 5/2	灰黄褐	細砂～粗砂	7	10YR 4/1	褐灰	砂混粘質土
2	10YR 4/4	褐	細砂～粗砂	5	10YR 4/2	灰黄褐	細砂～粗砂	8	10YR 3/1	黒褐	砂混粘質土
3	10YR 5/4	にぶい黄褐	細砂～粗砂	6	10YR 5/3	にぶい黄褐	細砂～粗砂				

第25図 SH42002 平・断面図

SH42002 (第25図)

調査区中央北部で検出した竪穴住居である。長径9.36m、短径7.48mの楕円形を呈し、南西側に幅1.75m、長さ1mの突出部を有する。深さは30cmを測り、埋土は6層に分層できたが、いずれも砂層であった。地山も砂層であったため平面では検出できなかったが、断面観察で住居内北壁にベッド状遺構を確認した。地山を削り出して作られており、幅1.4m、高さ10cmを測る。また東壁部分においては、壁から2.4m部分のみ埋土が異なることから、この部分についてもベッド状遺構の存在した可能性も考えられる。支柱穴はP1～P6の6本柱、あるいはP1～P3及びP7の4本柱の可能性が考えられる。この中でP1・P7は直径70～75cm、深さ40cmの大型のものであるが、その他のものは直径35～55cmで、深さ15～40cmである。遺物は弥生土器の小片しか出土していないため詳細な時期は不明であるが、弥生後期の遺構と考えられる。



第26図 SH42003 平・断面図

SH42003 (第26図)

調査区北西部で検出した遺構である。直径約5.5mの円形で、深さ30cmを測る。床面は平らであるが、上部からの掘り込みがあり、かなり攪乱されていた。このため柱穴等は検出されていないが、平面形及び規模から考えて竪穴住居の可能性が高いと考えられる。遺物は出土していないが、古代の遺構に切られており、弥生時代の遺構と考えられる。

SB42001 (第27図)

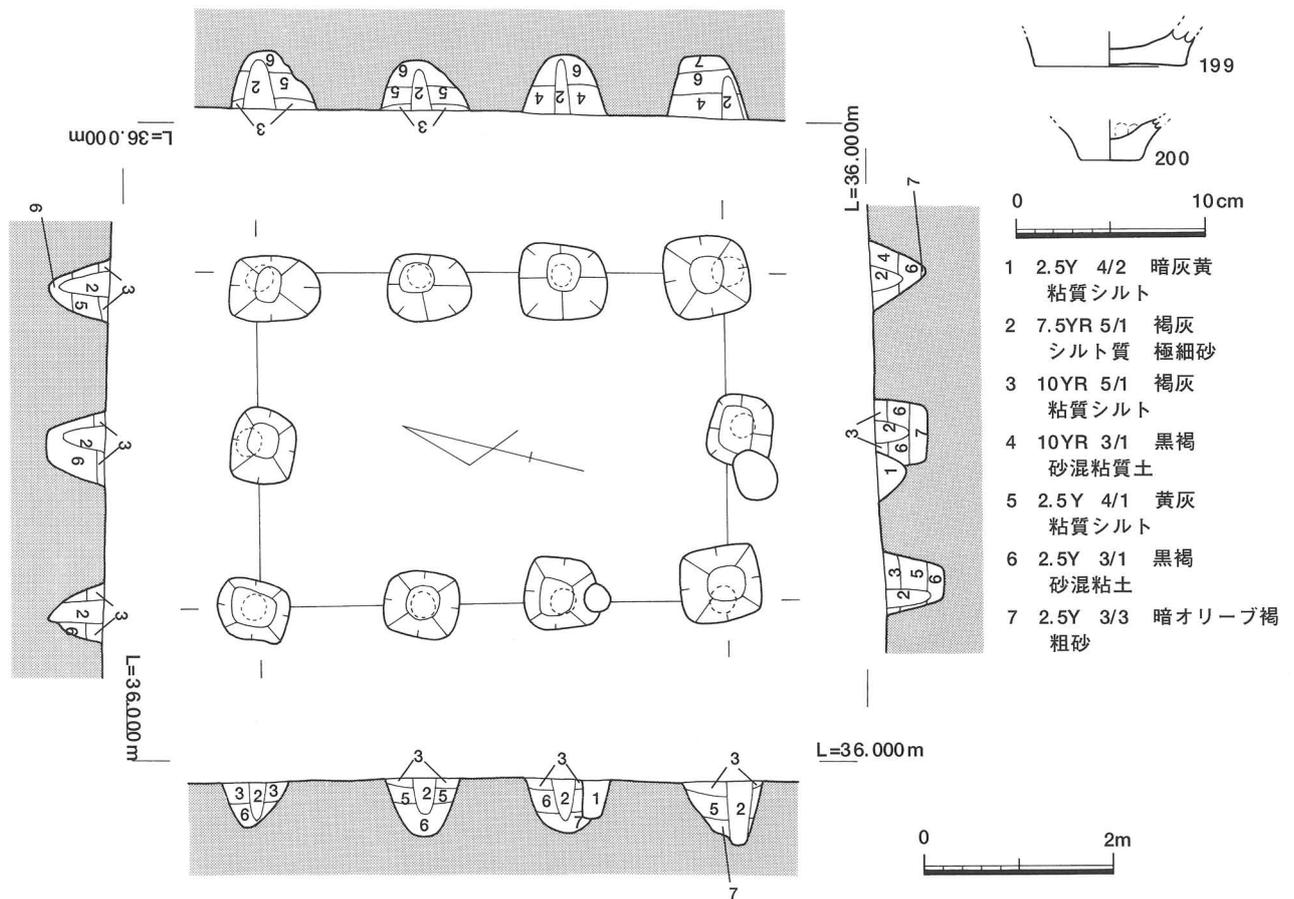
調査区中央西部で検出した掘立柱建物である。弥生時代の掘立柱建物としては遺跡内で最大のものである。南北3間(5m)、東西2間(3.6m)、床面積18㎡で、建物の主軸方位はN-25°-Wである。建物を構成する柱穴は隅丸方形を呈し、最大のもので長辺1m、短辺80cm、深さ60cmを測る。柱根から推定すると直径25～30cmの柱が使用されていたと考えられる。柱間はすべて1.6～1.8mとほぼ均一である。柱穴はきれいに直線的に並ぶが、棟持柱の柱根は柱1本分程度外側へ張り出している。周辺の掘立柱建物及び竪穴住居の分布から推定すると、集落の中心部に建てられた掘立柱建物の可能性が高い。出土遺物は南西隅の柱穴掘方から弥生土器の小片が出土した。199・200は弥生土器の底部で、弥生後期の遺構と考えられる。

SB42002 (第28図)

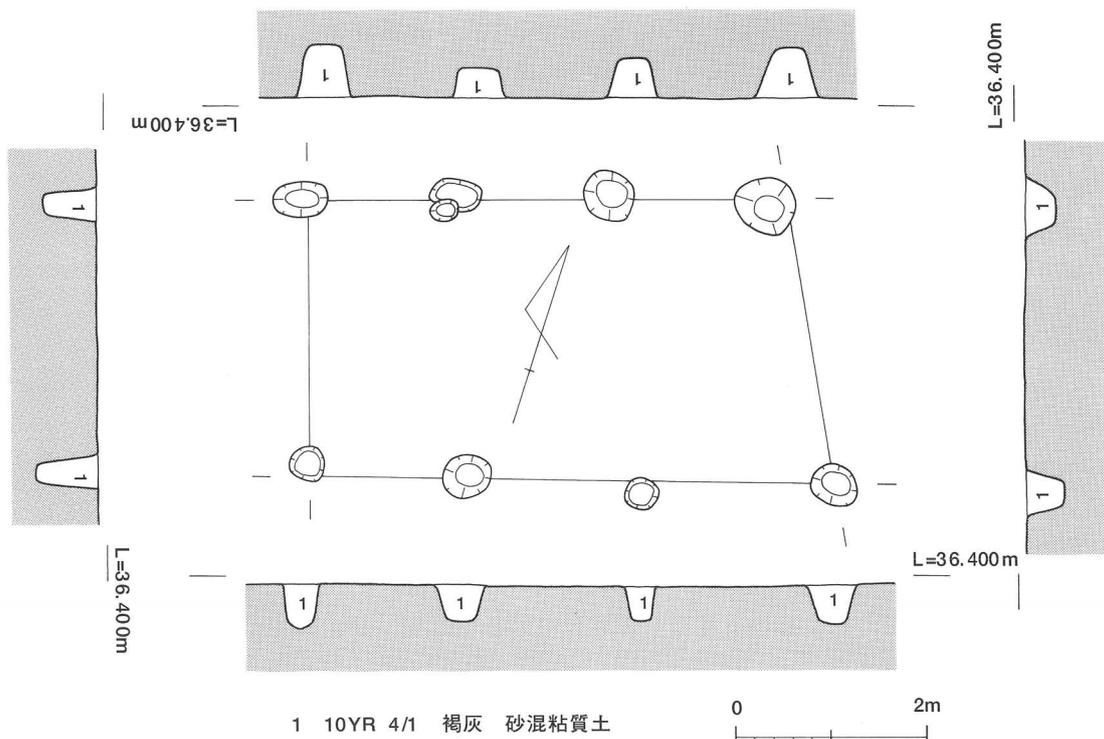
調査区中央部で検出した掘立柱建物である。東西3間(5.6m)、南北1間(3m)で、床面積16.8㎡で、建物の主軸方位はN-72°-Eである。建物を構成する柱穴は円形を呈し、最大のもので直径65cm、深さ60cmを測る。柱間はほぼ桁行1.7mと均一で、梁間が2.7mである。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SB42003 (第29図)

調査区北西部で検出した掘立柱建物である。東西1間(2.52m)、南北1間(1.64m)で、床面積4.13㎡で、建物の主軸方位はほぼ北である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。



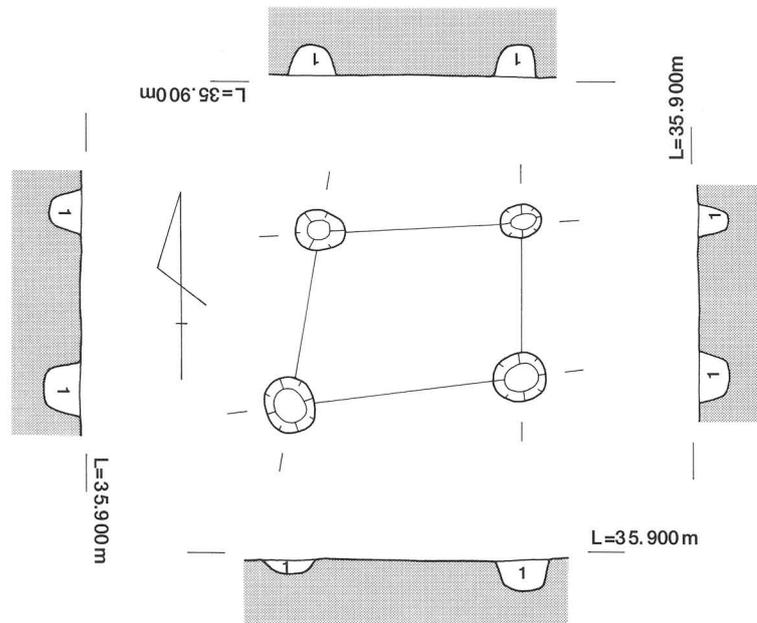
第27図 SB42001 平・断面図及び出土遺物実測図



第28図 SB42002 平・断面図

SA42001 (第30図)

調査区北西部で検出した柱穴列である。ほぼ東西方向に3基並び、柱間は3.5mである。遺物は出土しておらず、時期は不明である。



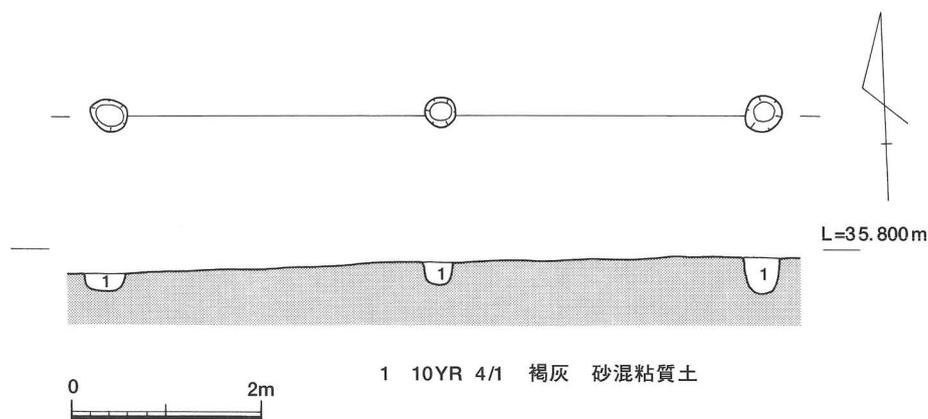
第29図 SB 42003 平・断面図

SD42001 (第32・33図)

調査区西部で検出した溝で、南北方向に流れる溝である。幅は30~60cm、深さ10cm、検出長20mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は黒褐色粘質シルトの単層である。弥生後期の土器片が少量出土していることから、弥生後期の遺構と考えられる。

SD420002 (第32・33図)

調査区西部で検出した溝で、幅30~60cm、深さ30cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は2層に分層できる。上層は黒褐色粘質シルト、下層は暗灰黄色細砂である。溝はほぼ南北方向に流れており、途切れながらではあるがL字に屈曲し、東側へ延びる。集落内の区画溝である可能性が考えられる。弥生後期の土器片が少量出土していることから、弥生後期の遺構と考えられる。



第30図 SA42001 平・断面図

SK42013 (第31図)

調査区北部で検出した大型の遺構である。SK42018

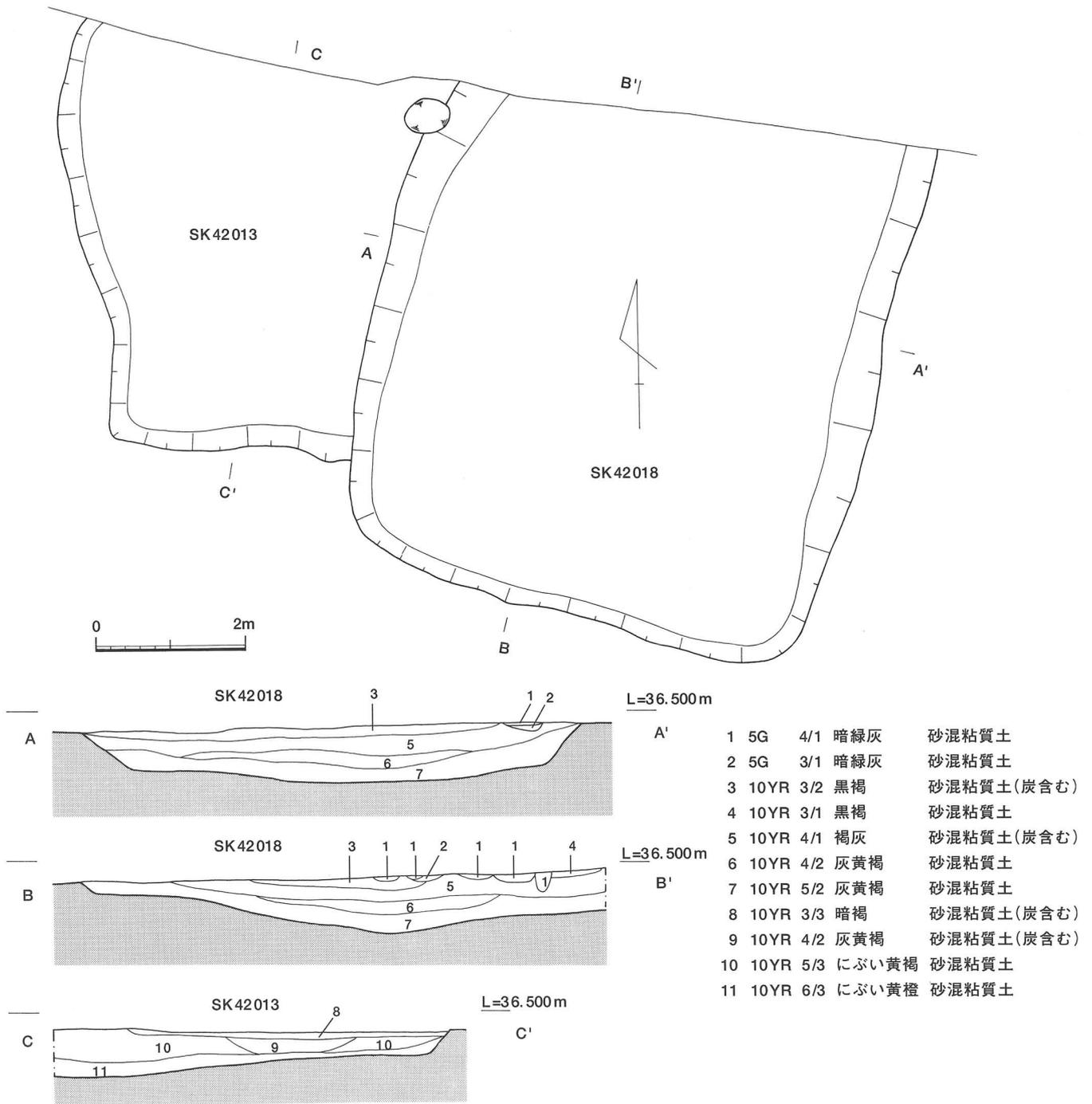
に切られているため、規模は不明であるが、南北5.6m以上、東西4.8m以上、深さ60cmの土坑と考えられる。埋土は4層に分層でき、上部2層は炭を含んでおり、暗褐色~灰黄褐色の砂混粘質土層である。下部2層はにぶい黄橙色砂混粘質土層である。床面は平坦面であるが、遺構は検出されなかった。遺物は1点も出土していないが、SK42018に切られていることから弥生後期以前の遺構と考えられる。

SK42018 (第31図)

SK42013を切った状態で検出した大型の土坑である。南北6.6m以上、東西6.8mの隅丸方形を呈する。遺構の中心部が深くなっており、南北はやや浅い断面形状で、埋土は5層に分層できる。上部3層は炭を含んでおり、黒褐色~褐灰色の砂混粘質土層である。下部2層は灰黄褐色砂混粘質土層である。遺物は弥生土器の小片がわずかに出土しており、弥生後期の遺構と考えられる。

土坑群 (第32・33図)

調査区中央西部で密集して土坑を検出した。ほとんどの土坑が長方形を呈し、長辺2~3m、短辺1~1.5mのものが多く、最大のものはSK42032で、長辺4.05m、短辺2.2m、深さ15cmである。弥生土器の小片をわず



第31図 SK42013・SK42018 平・断面図

かに含む程度である。長辺を南北に向けるものが多いが、一部東西方向や斜めになるものもあり、規則的な配置とは言い難い。ほとんどの遺構で遺物は出土しなかったが、弥生土器の小片を含むものがあり、弥生後期の遺構群と考えられる。

SK42028 (第32・33図)

調査区中央西部の土坑群の東端で検出した土坑である。上記の土坑群が比較的浅いのにに対し、深さ85cmを測る。平面形態は台形を呈し、南北2.8m、東西1.9mを測る。断面形状は逆台形で、埋土は6層に分層できる。上層の2層は粘質シルトで、中層部分の2層は細砂で炭を含み、下層の2層は粘土である。遺物は1点も出土しておらず、時期は不明である。

SK42029

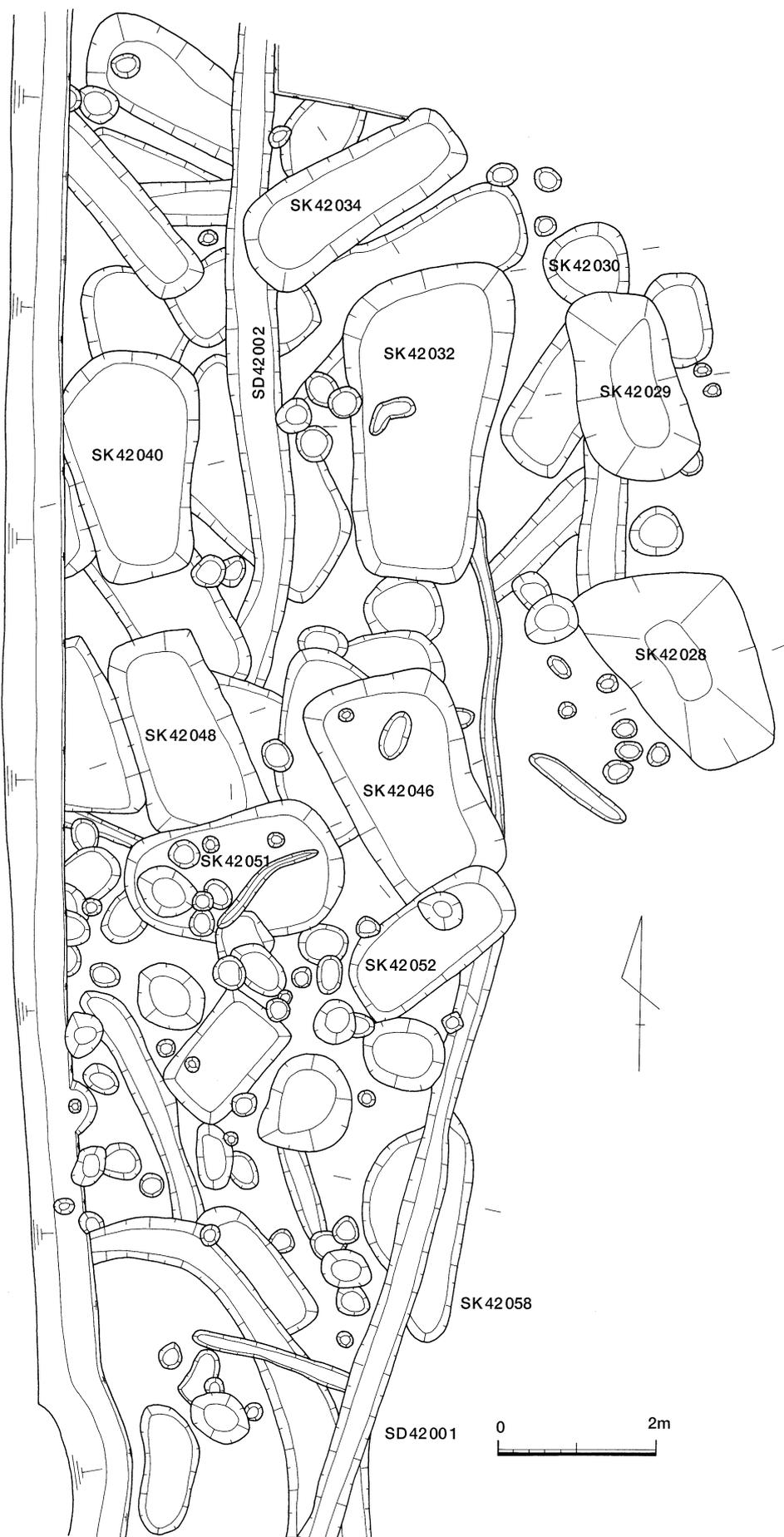
(第32・33図)

SK42028の北側に位置し、ほぼ同様相の遺構である。平面形態は長方形を呈し、長辺2.4m、短辺1.36m、深さ72cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は5層に分層できる。上層の2層は粘質シルトで、中層部分の2層は細砂で炭を含み、下層は粘土である。遺物は1点も出土しておらず、時期は不明である。

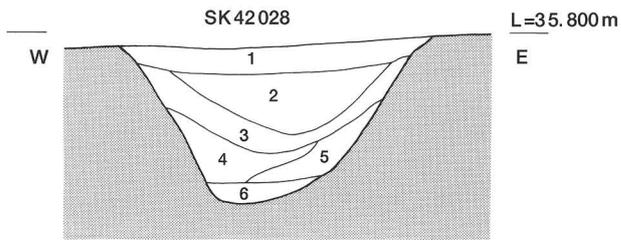
SK42063

(第34～39図)

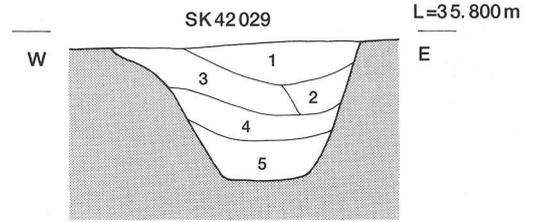
調査区南西部で検出した大型の遺構である。長辺6.12m、短辺5mを測り、東西に長い長方形を呈する。北東から南西に向かって地山の標高が下がっているため、深さは北東部で80cm、南西部で50cmとなっており、床面ではほぼ同一レベルとなっている。掘り込みは、標高が低い西壁及び南壁はほぼ垂直であるが、標高の高い北壁及び東壁は緩やかな斜面となっている。また、北東隅は階段状の掘り込みとなっている。検出面ですでに炭や焼土が認められ、埋土中にも多量の炭・焼土が含まれていた。埋土は5層に分層できる。第1層は黒褐色砂混粘質土層で炭を含む。第2層は灰黄褐色砂混粘質土層で第1層同様に炭を含む。第3層はにぶい黄橙色のやや粘性を持つ細砂～粗砂層で炭・焼土はほとんど含まないが、土器片が多量に出土した。第4層は遺構の東壁と西壁部分のみに認められるもので、に



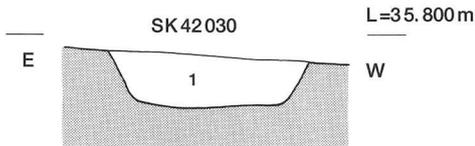
第32図 IV区土坑群 平面図



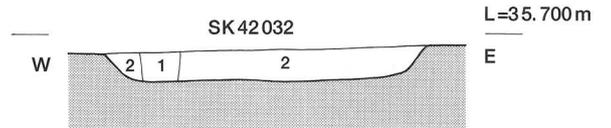
- | | | | | | | | | | |
|---|-------|-----|-----|---------|---|------|-----|-------|------|
| 1 | 10 YR | 4/2 | 灰黄褐 | 粘質シルト | 4 | 2.5Y | 4/1 | 黄灰 | 細砂 |
| 2 | 10 YR | 5/1 | 褐灰 | 粘質シルト | 5 | 10YR | 7/4 | にぶい黄橙 | 粘土 |
| 3 | 2.5Y | 3/1 | 黒褐 | 細砂(炭含む) | 6 | 10YR | 3/2 | 黒褐 | 砂混粘土 |



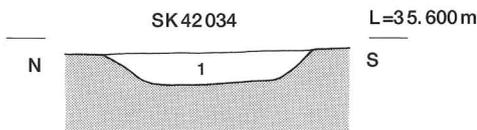
- | | | | | |
|---|------|-----|-----|---------|
| 1 | 10YR | 4/2 | 灰黄褐 | 粘質シルト |
| 2 | 10YR | 5/1 | 褐灰 | 粘質シルト |
| 3 | 2.5Y | 3/1 | 黒褐 | 細砂(炭含む) |
| 4 | 2.5Y | 4/1 | 黄灰 | 細砂 |
| 6 | 10YR | 3/2 | 黒褐 | 砂混粘土 |



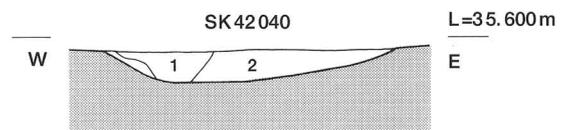
- | | | | | |
|---|------|-----|-------|--------|
| 1 | 10YR | 5/3 | にぶい黄褐 | 細砂への粗砂 |
|---|------|-----|-------|--------|



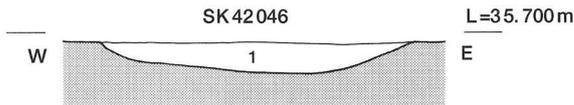
- | | | | | |
|---|------|-------|-------|-------|
| 1 | 10YR | 1.7/1 | 黒 | 粘質シルト |
| 2 | 10YR | 5/3 | にぶい黄褐 | 細砂～粗砂 |



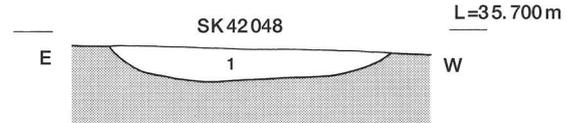
- | | | | | |
|---|-------|-----|---|-------|
| 1 | 7.5YR | 4/3 | 褐 | 砂混粘質土 |
|---|-------|-----|---|-------|



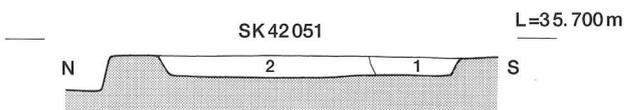
- | | | | | |
|---|------|-----|-------|-------|
| 1 | 10YR | 2/2 | 黒褐 | 砂混粘土 |
| 2 | 10YR | 5/3 | にぶい黄褐 | 細砂～粗砂 |



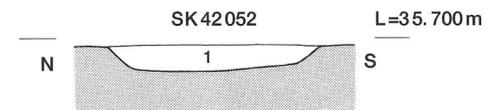
- | | | | | |
|---|------|-----|-------|-------|
| 1 | 10YR | 4/3 | にぶい黄褐 | 細砂～粗砂 |
|---|------|-----|-------|-------|



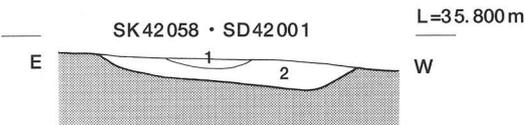
- | | | | | |
|---|------|-----|-------|-------|
| 1 | 10YR | 4/3 | にぶい黄褐 | 砂混粘質土 |
|---|------|-----|-------|-------|



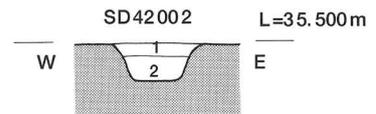
- | | | | | |
|---|------|-------|-------|-------|
| 1 | 10YR | 1.7/1 | 黒 | 粘質シルト |
| 2 | 10YR | 5/3 | にぶい黄褐 | 細砂～粗砂 |



- | | | | | |
|---|------|-----|-------|-------|
| 1 | 10YR | 4/3 | にぶい黄褐 | 砂混粘質土 |
|---|------|-----|-------|-------|



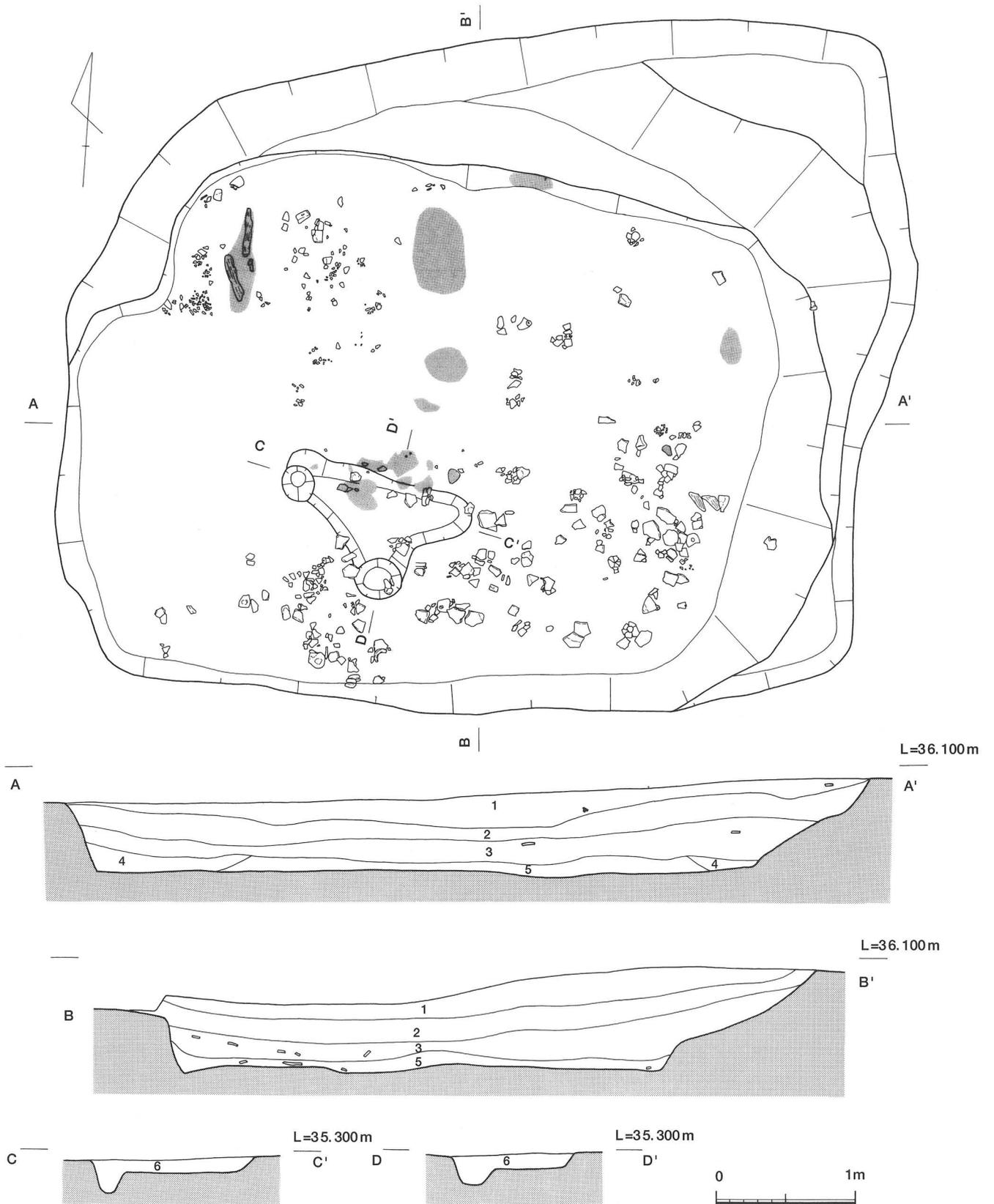
- | | | | | |
|---|------|-----|-------|-------------------|
| 1 | 10YR | 3/1 | 黒褐 | 粘質シルト (SD42001埋土) |
| 2 | 10YR | 4/3 | にぶい黄褐 | 細砂～粗砂 (SK42058埋土) |



- | | | | | |
|---|------|-----|-----|-------|
| 1 | 2.5Y | 3/1 | 黒褐 | 粘質シルト |
| 2 | 2.5Y | 5/2 | 暗灰黄 | 細砂 |



第33図 IV区第2遺構面検出遺構断面図

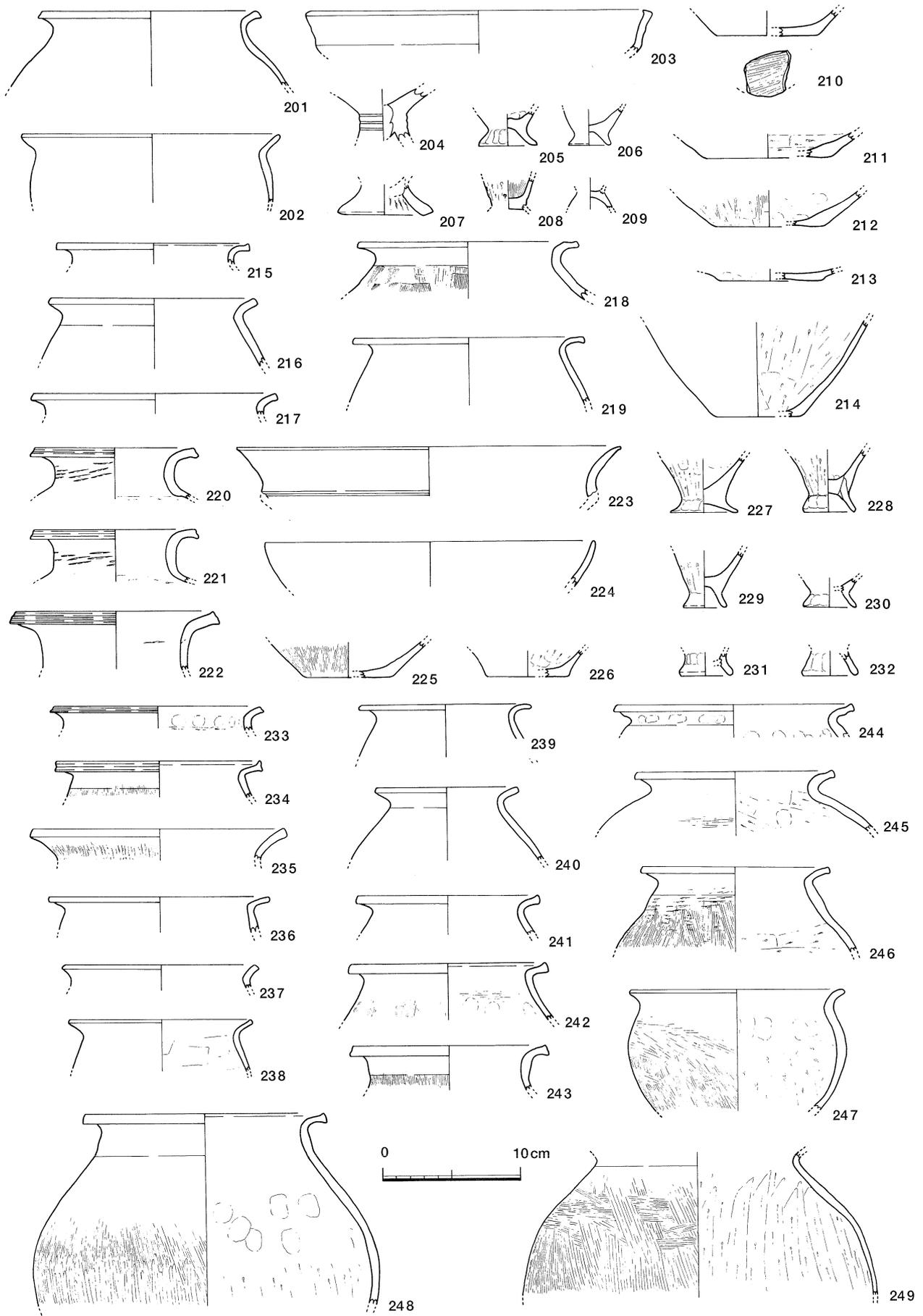


1	10YR 3/1	黒褐	砂混粘質土 (炭含む)	4	10YR 4/3	にぶい黄褐	砂混粘質土 (炭・焼土・土器片多く含む)
2	10YR 4/2	灰黄褐	砂混粘質土 (炭含む)	5	10YR 1.7/1	黒	粘質シルト (炭・焼土・土器片多く含む)
3	10YR 6/4	にぶい黄橙	細砂～粗砂 (やや粘性)	6	10YR 3/1	黒褐	砂混粘質土

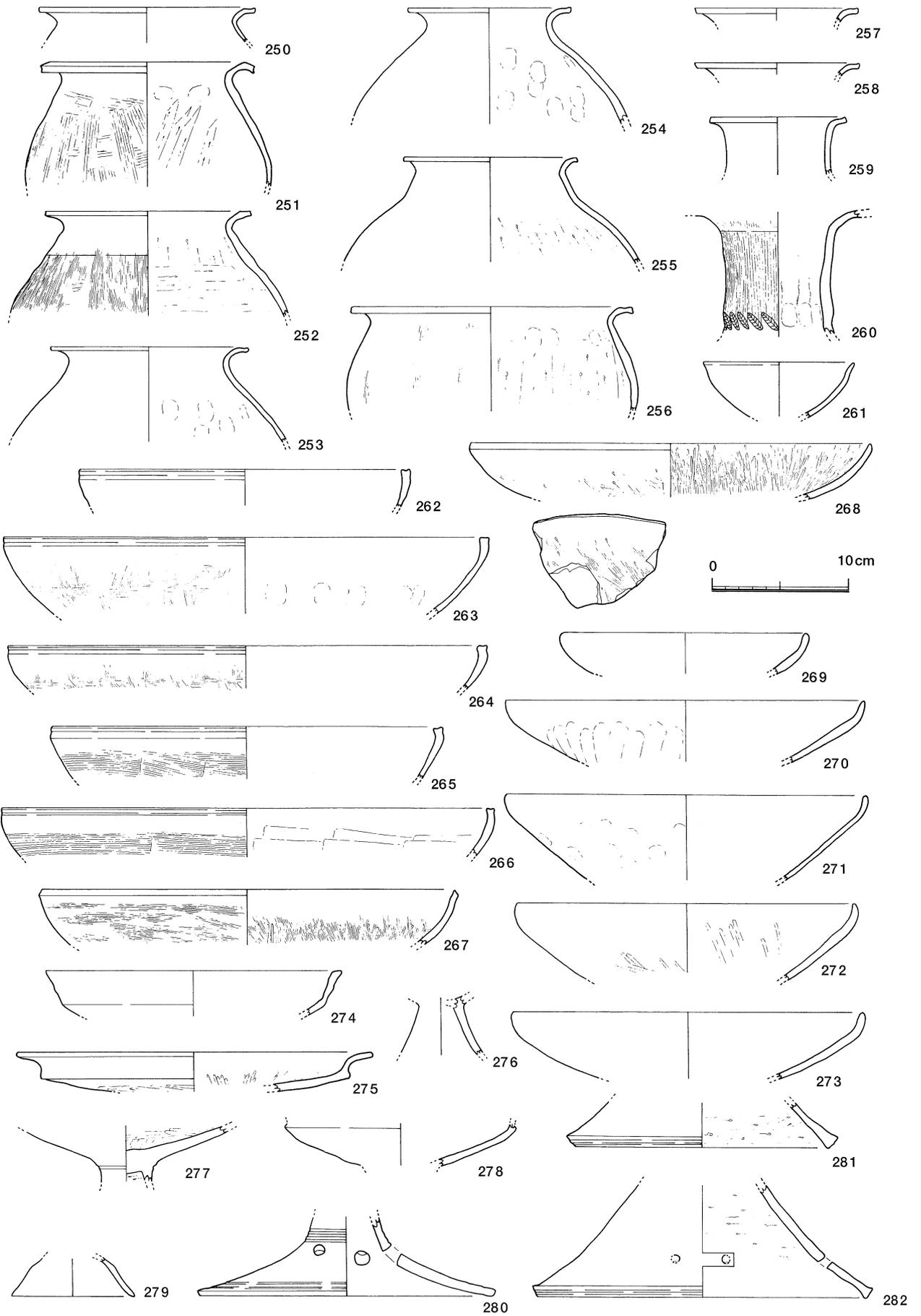
第34図 SK42063 平・断面図

ぶい黄褐色の砂混粘質土層で多量の炭や焼土含む。第5層は黒色の粘質シルト層で、きめの細かい灰が堆積したような層序である。第5層も多量の炭や焼土が含まれており、またそれに混じり土器片が多く出土した。底面は平坦で、床面の北半を中心に数ヶ所赤く焼けた痕跡が認められ、北西隅では炭化した木材が数本出土した。また、底面の中央やや南寄りにおいてT字状の土坑を検出した。東西方向に長く、その中央部から南にのびる形態で、東西1.4m、南北85cm、深さ10cmを測り、埋土は黒褐色砂混粘質土の単層である。土坑の西端では直径25cm、深さ15cm、南端では直径35cm、深さ10cmのピット状に窪む部分が見られる。

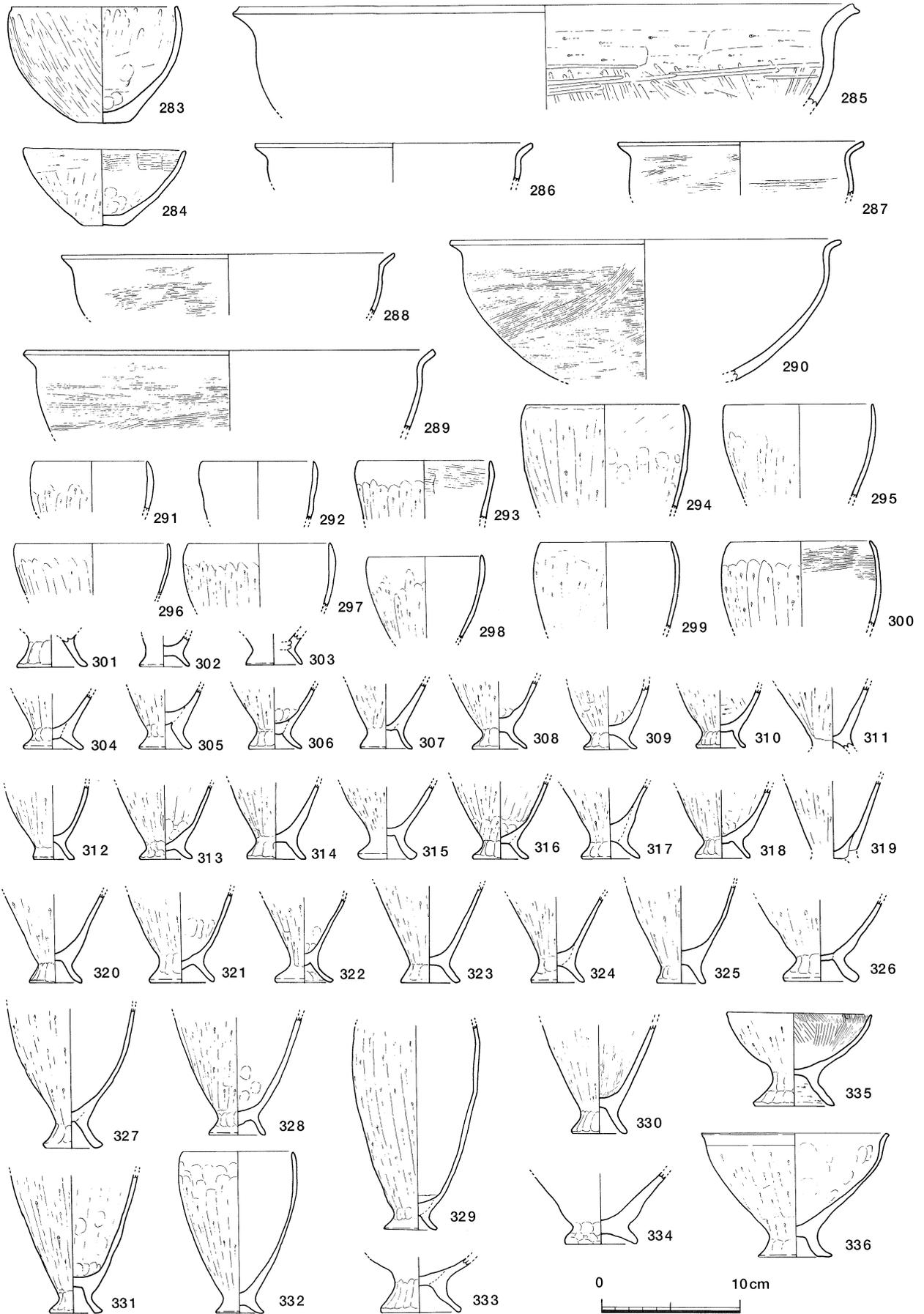
出土遺物は多く、コンテナ5箱分にのぼり、その多くは下層から出土した。調査時には第1層を上層、第2層を中層、第3層を下層、第4・5層を最下層として遺物を取り上げた。出土遺物は第35～39図に掲載した。201～214は上層出土遺物である。201・202は甕である。203は高杯または鉢の口縁部である。204は高杯の脚柱部で沈線3条が施されている。205～209は製塩土器である。210～213は壺の底部である。210の底面はヘラミガキが施されている。211の内面はヨコヘラケズリである。212は外面タテヘラケズリのちタテハケ、内面指頭圧が見られる。213は外面に指頭圧が見られる。214は甕の底部で内面タテヘラケズリである。215～232は中層出土遺物である。215～219は甕である。218・219は口縁部内面を窪ませるものである。220～222は広口壺の口縁部～頸部である。220・221は口縁端部に凹線1条を巡らし、外面右上がりのタタキ、内面ヨコヘラケズリである。222は口縁端部をやや上下に拡張させ凹線2条を巡らしている。223は高杯の口縁部で、剥離した接合面に沈線が認められる。224は鉢である。225・226は甕の底部である。225は外面にタテハケが見られる。226は内面にタテヘラケズリが見られる。227～232は製塩土器である。いずれも外面は体部がタテヘラケズリ、脚部が指頭圧である。233～365は下層出土遺物である。233～256は甕である。233・234は口縁端部に凹線を施すものである。245は体部の肩が張るもので、外面ヨコハケ、内面ヨコヘラケズリのち指頭圧である。口縁部内面をわずかに窪ませている。246は頸部状に体部上半でわずかに外方へ屈曲するもので、外面はタタキのちタテハケ、内面ヨコヘラケズリである。245同様、口縁部内面をわずかに窪ませている。247は半球形の体部に短く外反する口縁部がつくもので、外面はハケ、内面は下半がタテヘラケズリ、上半が指頭圧である。248は外面タテハケのち下半のみタテヘラミガキ、内面は下半タテヘラケズリで上半に指頭圧を施しており、いわゆる下川津B類土器形態の土器であるが、角閃石は含まず、頸部の屈曲は緩い。249は体部の破片で、内面のタテヘラケズリは頸部付近まで延びている。250～256は口縁部内面を窪ませる一群である。251・252は外面ハケ、内面ヘラケズリを施すもので、251は口縁部が下方に下がっている。253・254は頸部の屈曲が緩やかなもので、内面指頭圧である。255は頸部状に体部上半でわずかに外方へ屈曲するもので、内面タテヘラケズリが見られる。256は半球形の体部に短く外反する口縁部がつくもので、外面はタテハケ、内面は下半がタテヘラケズリのち指頭圧である。257～260は長頸壺である。260は外面タテハケ、内面指頭圧が見られ、頸部外面にはハケ原体による刺突文が施されている。261～282は高杯である。261は小型のものである。262～266は皿鉢状の形態で、口縁部を直立するように屈曲した形態で、口縁部外面に凹線を1条巡らすもので、端部は面を持つ。外面ヨコハケ、内面ナデである。267・268は皿状のもので、外面ヨコハケ、内面タテハケのちタテヘラミガキである。268の外面には焼成時に弾け飛んだような破損部が認められる。269～273は口縁部が内彎するもので、端部は丸く仕上げる。274は外方へ開く口縁部で、端部は面を持つ。275は浅い皿状の杯部で外反する口縁部を持つもので、外面ヨコヘラミガキ、内面タテヘラミガキである。276は脚柱部である。277は杯部下半から脚柱部にかけてのもので、杯部内面ヨコヘラミガキ、脚柱部内面はヨコヘラケズリ、脚柱部外面に沈線1条が施されている。278は杯部下半の破片であるが、外反する口縁部を持つものと考えられる。279は小型の高杯の脚部と考えられる。280は脚部である。外反しながら広がる裾部外面には凹線2条を巡らせ、円形スカシは6方向である。脚柱部には沈線3条を巡らせている。280・281は裾部があまり広がらないもので、内面はヨコヘラケズリである。282の裾部には2個1対の小円孔が見られる。283～290は鉢である。283は球形の体部がそのまま内彎し口縁部になるもので、外面タテヘラミガキ、内面指頭圧及び板ナデのちタテヘラミガキである。284は半球形の形態で外面ヘラケズリ、内面指頭圧で、口縁部のみヨコハケである。285～290は体部から屈曲し、外方へ開く口縁部を持つものである。285は大型のもので、口縁部は面を持ち、内面ヨコヘラケズリのちヘラミガキである。286～290の端部は丸く、外面ヨコハケである。291～334は製塩土器である。概ね外面は体部がタテヘラケズリで、脚部が指頭圧、内面は指頭圧やナデで、一部にハケが見られる。外面のヘラケズリは下方から口縁部に向け一気に削るが、粗雑なものが多く、口縁部までは削らない。また、口縁部は調整を省略するものが多い。



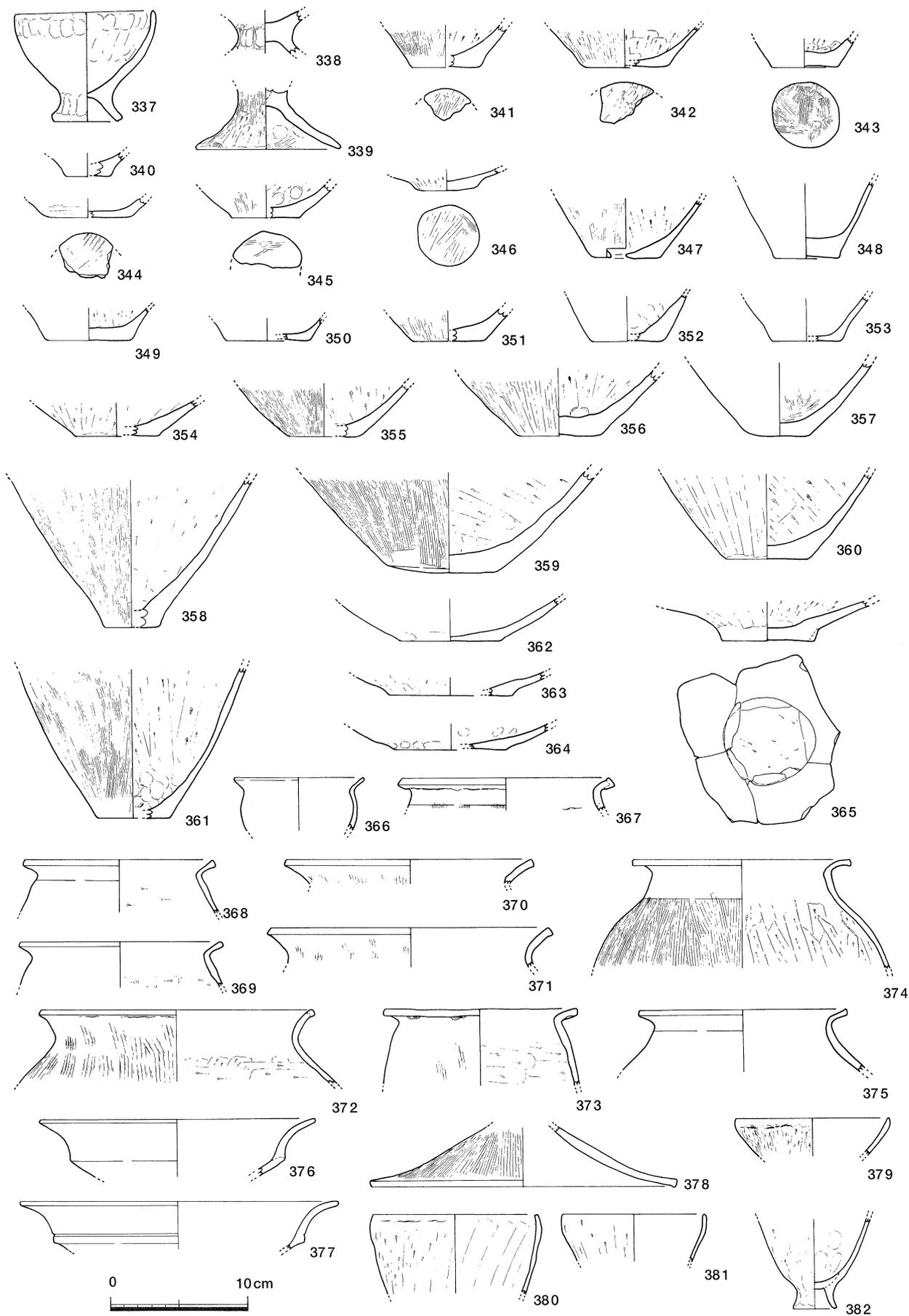
第35图 SK42063 出土遗物实测图①



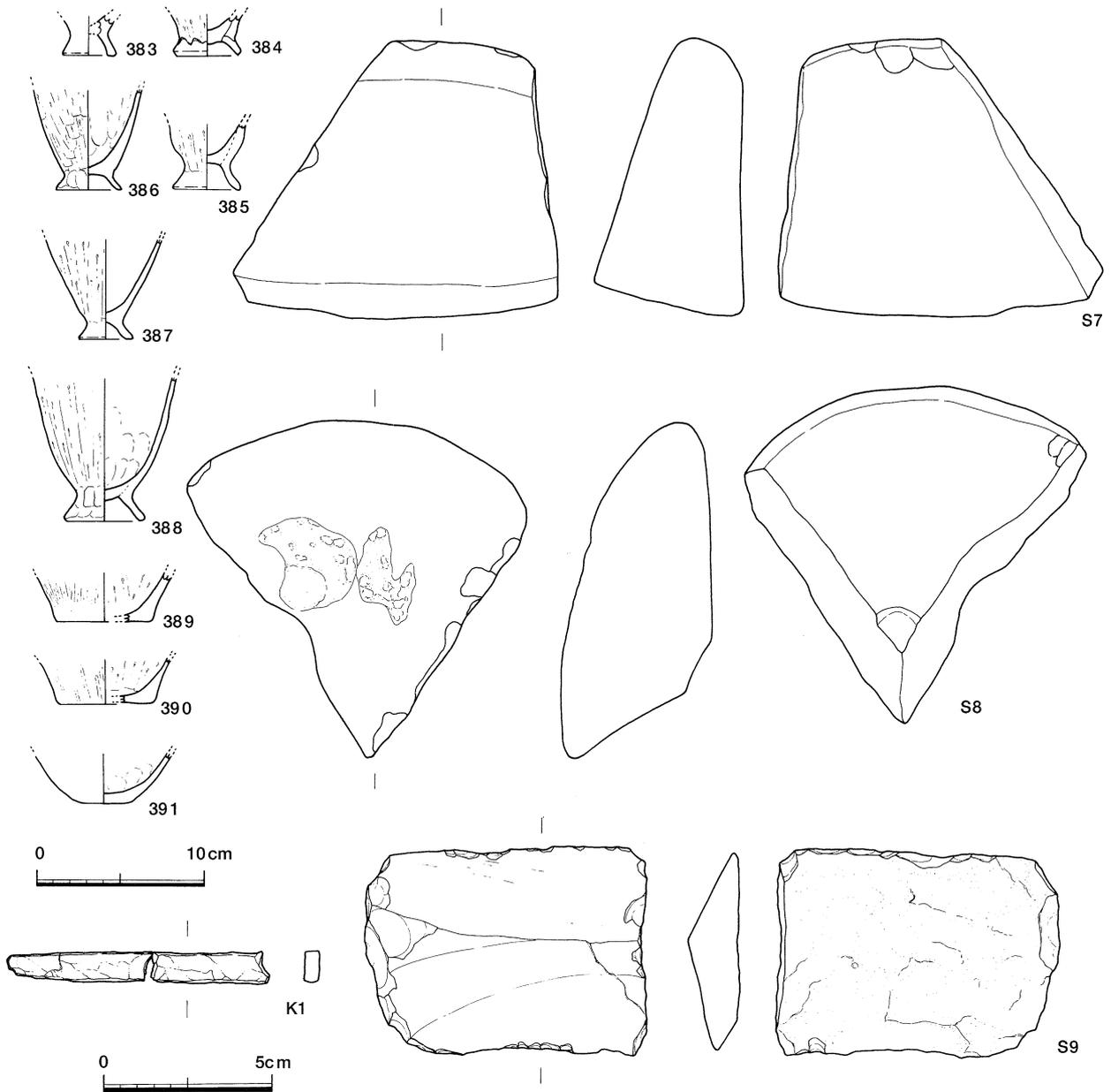
第36图 SK42063 出土遺物実測图②



第37图 SK42063 出土遺物実測图③



第38图 SK42063 出土遗物实测图④



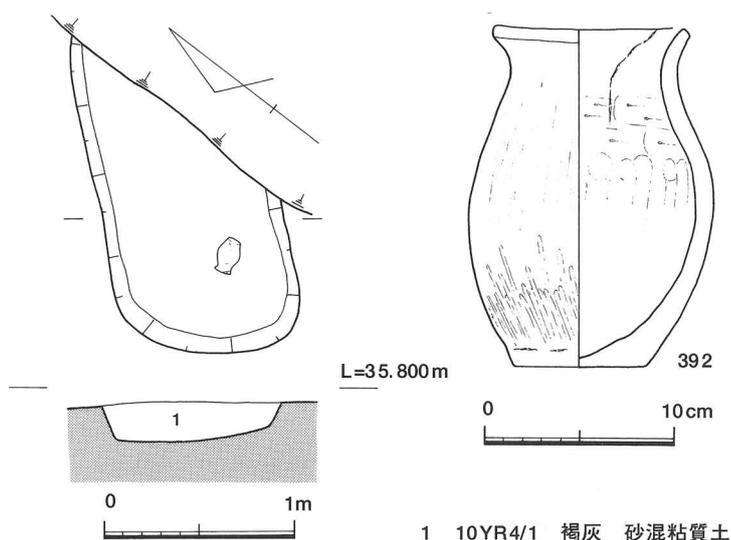
第39図 SK42063 出土遺物実測図⑤

335～337は制作手法が製塩土器に類似するものであるが、丁寧なつくりで形態も異なるものである。335は半球形の体部に脚部がつくものである。体部外面はタテヘラケズリ、内面はタテハケで、脚部は外面指頭圧、内面ヨコヘラケズリである。336は製塩土器を上下に押しつぶしたような形態を呈し、口縁部は外反するものである。体部外面タテヘラケズリは丁寧で、内面は指頭圧である。口縁部もヨコナデにより丁寧に仕上げられている。337は335とほぼ同じ形態であるが、内外面とも指頭圧が見られる。338・339は脚部である。340～365は底部である。内面はタテヘラケズリのものが多い、外面はタテハケもしくはタテヘラミガキのものが多い。365は底部の周囲が弾け飛んだように剥離している。366～391は最下層出土遺物である。366～375は甕である。366は球形の体部を持つものである。370～372は口縁部までタテハケを施すものである。373は口縁部外面に不整形な粘土を2個貼り付けている。外面タテハケ、内面ヨコヘラケズリである。374は頸部状に体部上半でわずかに外方へ屈曲するもので、外面タテハケ、内面タテヘラケズリが見られる。376・377は高杯である。外反する口縁部を持つもので、377の外面には沈線1条を巡らせている。378は高杯の脚部で外面タテハケである。379は鉢または製塩土器の口縁部で、外面のタテヘラケズリは口縁部まで達しない。380～388は製塩土器で、外面は体部がタテヘラケズリで、脚部が指頭圧、内面は指頭圧やナデである。389～391は甕の底部である。土器以外には石器と鉄器が下層から出土した。S7は砥石である。S8は敲石である。S7・S8とも被熱を受けている。S9は砥石を転用した石庖丁である。K1は刀子である。

上層から最下層まで層位ごとに取り上げたが、時期差はほとんどないと思われ、弥生後期前葉の遺構と考えられる。特に下層の土器群は一括廃棄された可能性が高く、基準資料になりうるものである。

SK42068 (第40図)

SK42029に切られているが、長辺1.8m以上、短辺96cm、深さ30cmの長方形の土坑と考えられる。埋土は褐灰色砂混粘質土の単層で、断面形状は逆台形である。土坑の南寄りで弥生土器の壺の完形品が横に倒れた状態で出土した。形状は松菊里型の朝鮮系無文土器に近く、外面はナデのち下半のみタテヘラミガキ、内面はナデである。弥生後期の土器とは考え難く供伴する遺物も無いが、調査地の北東部分に弥生中期前半の集落が広がっていることから、この時期のものと考えられる。

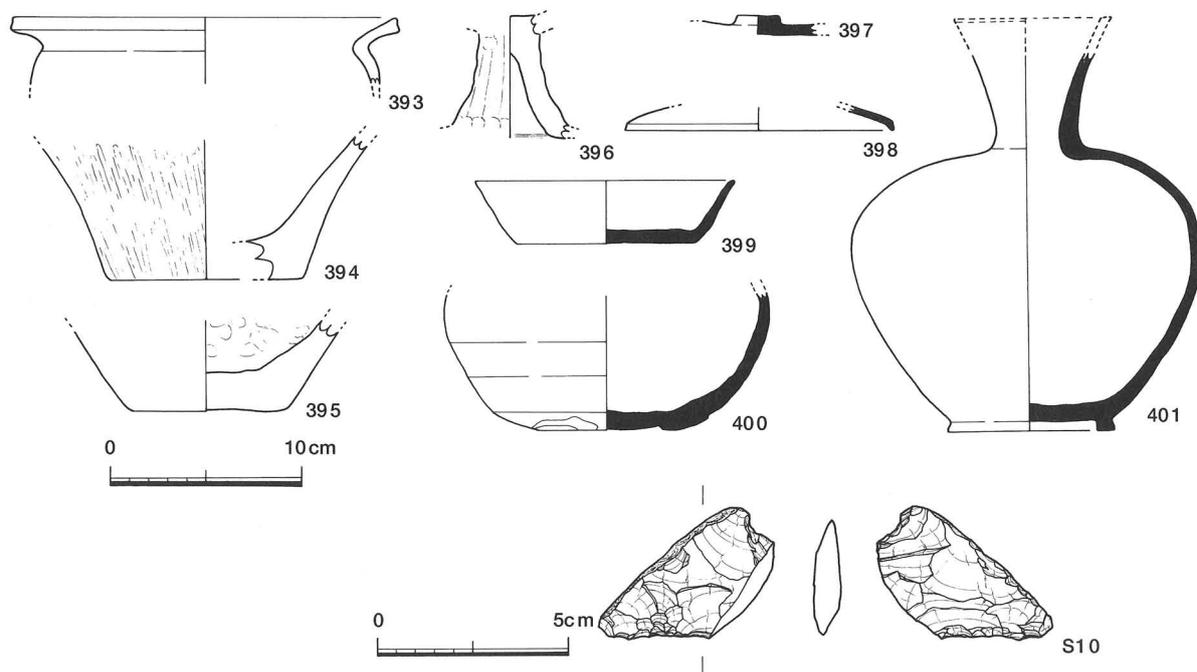


第40図 SK42068 平・断面図及び遺物実測図

(3)古代の遺構

SO42001 (第41図)

調査区の北西隅で検出した不整形な落ち込みである。溝状に東側から西に向かって流れ、調査区北西端で大きな落ち込みとなっている。埋土は単層である。41図に出土遺物を掲載した。393～396は弥生土器である。393は甕の口縁部である。394・395は甕の底部である。396は土師器の高杯で、外面は板ナデである。397～401は須恵器である。397・398は蓋である。399は坏である。400は平瓶である。401は長頸壺である。S10は削器である。弥生時代の遺物も含むが、8世紀の遺構と考えられる。なお、当該調査区では古代の遺構はSO42001以外には見られない。

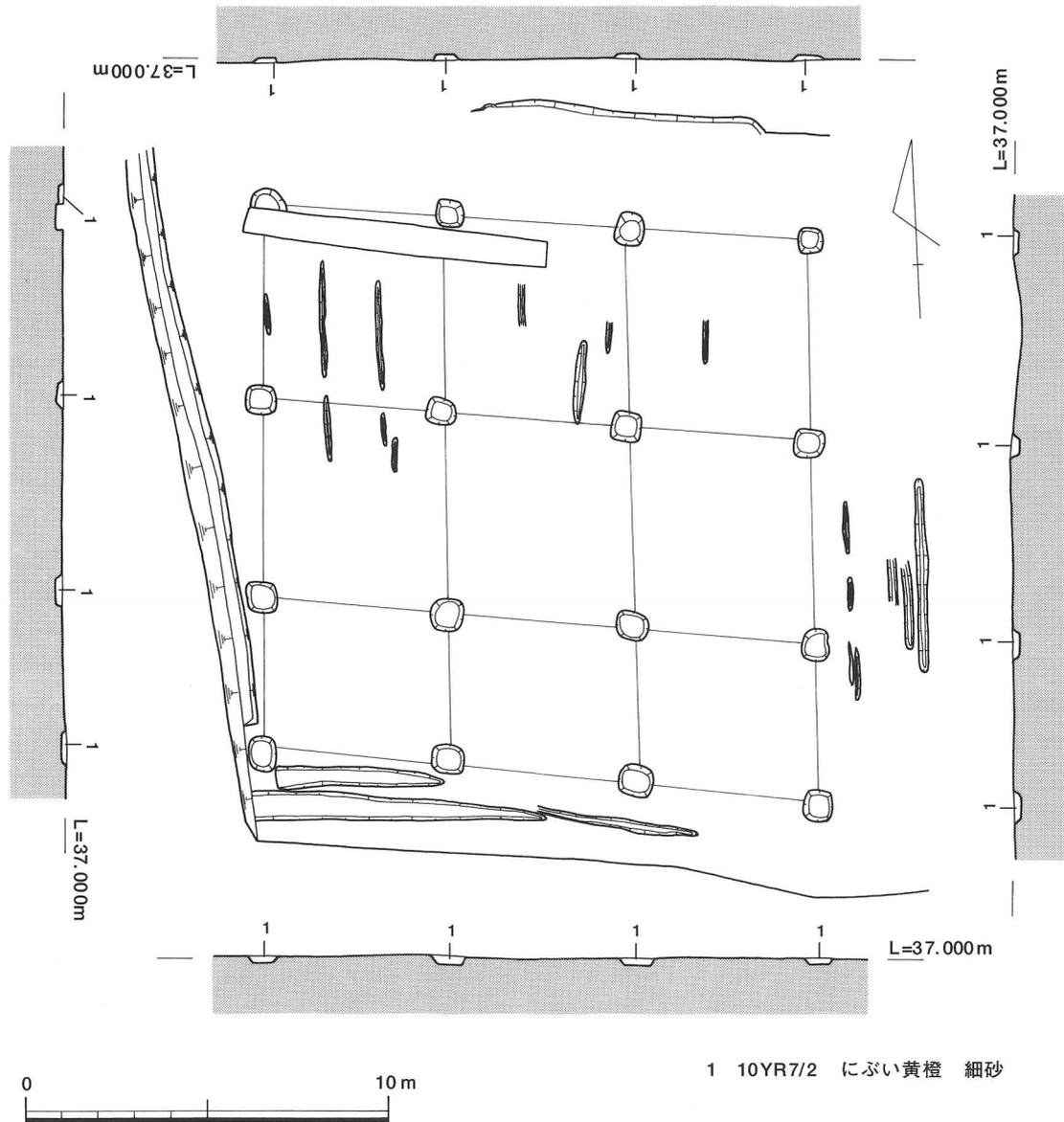


第41図 SO42001 出土遺物実測図

(4)近世以降の遺構

SB41001 (第42図)

第1遺構面の南半で検出した遺構である。南北3間(15.5m)、東西3間(15.5m)で、総柱状にピットが並ぶ。ピットはすべて方形で、1辺が約1m、深さ10~20cmを測る。ピットの埋土はにぶい黄橙色の単層で、柱根は確認できなかった。掘立柱建物の可能性も考えられるが、その場合床面積240㎡となり、かなり大型の建物が想定される。また、ピットの間隔がすべて5.2mであることから早急に掘立柱建物とは言い難い。SB41001の南と北側には東西方向の溝が掘削されており、その間は南北方向の鋤溝が見られることから、これらのピットも耕作に伴う何らかの遺構とも考えられる。遺物は出土していないが、基本層序から考えて近世以降の遺構と考えられる。



第42図 SB41001 平・断面図

第5節 V区の調査

(1)概要と基本層序

調査区の北西部に位置する。調査前の状況は東西に細長い3段の畑となっていた。調査区東壁において土層断面図を作成した。1～7層は近現代の耕作土層である。8層は遺構埋土である。9～11層は近世の耕作土層である。12層の黒褐色砂混粘質土層は弥生時代～中世の遺物を含む包含層である。13層の淡黄色粘質シルト層は遺物を含まず、地山と考えられる。遺構面は9層上面(第1遺構面)、12層上面(第2遺構面)、13層上面(第3遺構面)の3面が認められた。第1・第2遺構面は概ね近世の遺構面で、鋤溝等が検出されており、ほぼ現在の地形と同じで、3段の田畑であった。第3遺構面は弥生中期～中世の遺構面である。第3遺構面では北東から南西に向けて緩やかな斜面となっていた。主な検出遺構は弥生中期の竪穴住居2棟、奈良時代の溝と掘立柱建物3棟等である。

12層の黒褐色砂混粘質土層出土遺物を第43図に掲載した。402は弥生中期の甕で、外面タテハケ、内面ヨコハラミガキである。403は弥生後期の甕で、外面ミガキ状の板ナデ、内面指頭ナデである。404は弥生土器の底部である。405は土師器の鍋で、外面指頭圧、内面ヨコハケである。406は須恵器の坏である。407は土師器の甕で、外面タテハケのち頸部にヨコハケを施している。408～410は土師器の坏である。411～420は土師器の皿である。421は須恵器の碗である。422は和泉型の瓦器碗である。423は土師器の碗である。424は同安窯系の青磁皿で、底部は無釉である。425～430は龍泉窯系青磁碗で、外面に鎬蓮弁が見られる。431は同安窯系青磁碗で外面に櫛目文が見られる。

V区では奥の坊権現前遺跡で主体となる弥生後期の確実な遺構は見られず、弥生中期の遺構が見られることから、弥生後期の集落域の北縁部にあたると考えられる。なお、弥生中期の集落域は北東に隣接する奥の坊遺跡が中心と考えられ、今回の調査で検出の弥生中期の遺構は奥の坊遺跡の集落域の南西端と考えられる。

(2)弥生時代の遺構

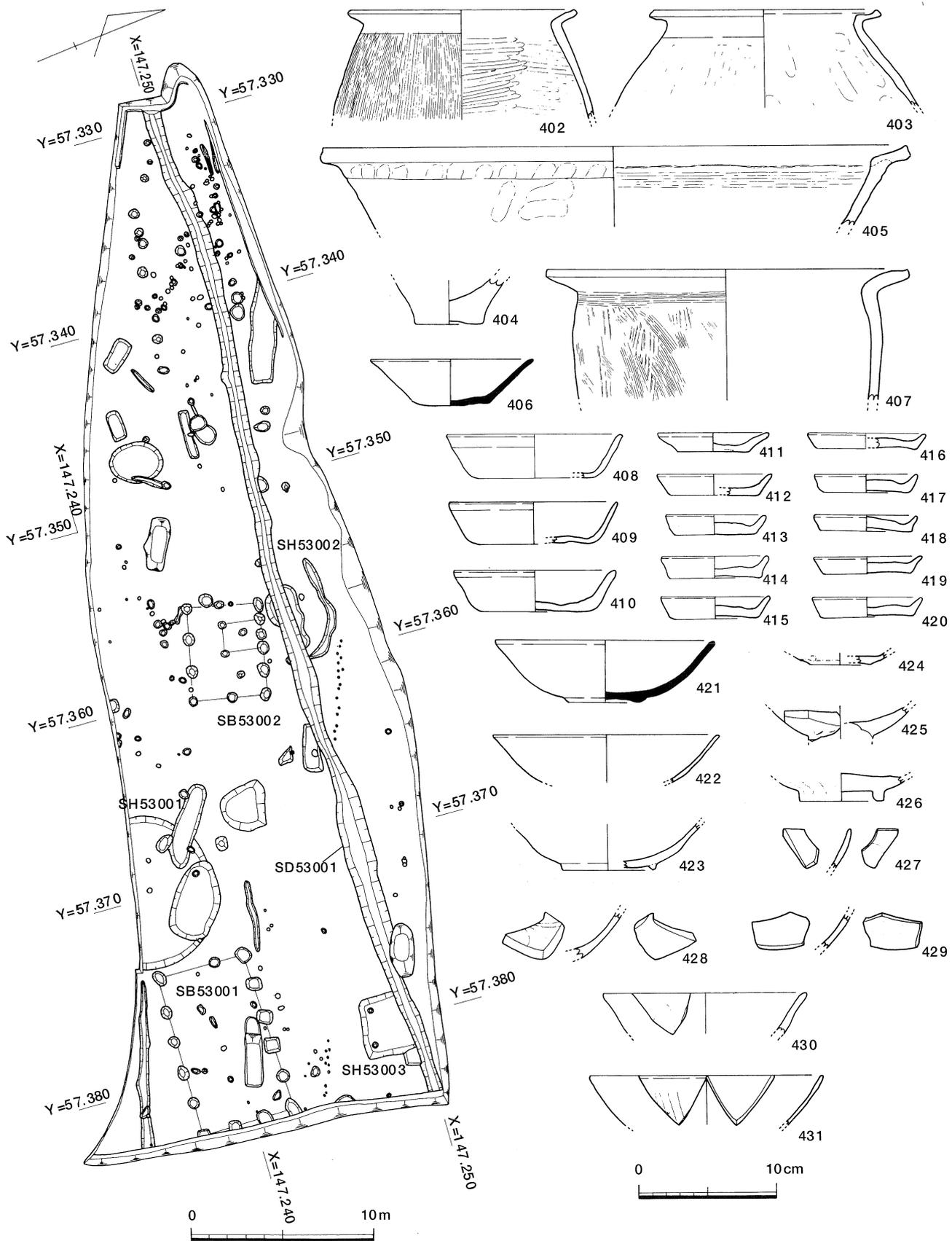
SH53001(第46～48図)

調査区の南東で検出した竪穴住居である。南半については現有水路及び道路部分にあたり、これらを保護しなければならず、調査は実施できなかったが、直径8.8m、深さ56cmの円形の竪穴住居と考えられる。埋土は15層に分層できる。1・2層は上層で、黄灰または褐灰色の粘質シルト層である。3～6層は中層で、黒褐色または褐灰色の砂混粘質土層である。7～14層は下層で、炭や焼土を多量に含む層が続いている。15層は竪穴住居の壁と考えられる。遺構の西から北壁にかけて粘土の焼土層が壁面に貼り付くようにして存在した。遺構全体に炭・焼土が見られ、床面直上においては、柱の炭化材や屋根の炭化材が見られた。また、床面では7基のピットを検出し、その内の6基が円形に巡ることから竪穴住居の柱穴と考えられる。いずれの柱穴も直径25～30cmで、深さ40cm程度である。

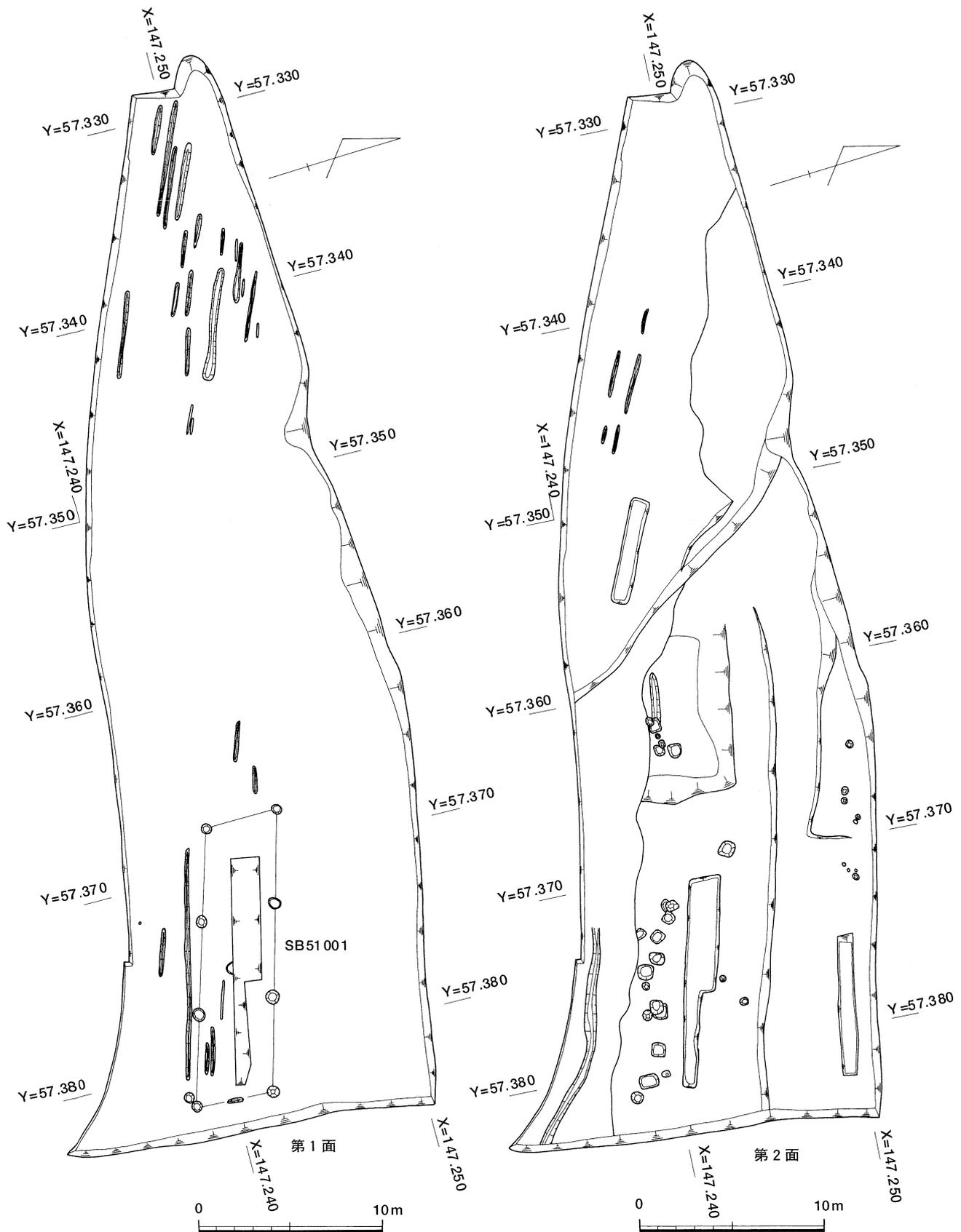
出土遺物のほとんどが床面直上で検出された。第46～48図に掲載した。432は頸部外面に櫛描直線文を有する甕である。433も甕で、外面タテハケ、内面ヨコハラミガキで、外面体部最大径付近にハケ原体による刺突文が見られる。434は広口壺で、口縁端部外面に斜格子文が見られる。435も広口壺で、頸部に2個1対の円孔が穿孔されている。436は甕の底部で、底面に焼成前の穿孔が見られる。437も甕の底部で、上底になっている。438～442は外面にタテハラミガキが見られる甕の底部である。443は甕の底部、444は壺の底部である。445はハケ原体の刺突文部分が見られ、甕の体部片を再利用した紡錘車である。S11～S28は石器である。石器すべて竪穴住居の東部の柱穴付近から壁面の間で出土した。S11は磨石で、全面に擦痕が見られ、さらに先端部には敲痕が見られる。S12・13は石皿である。いずれも片面が窪んでいる。S11とS13は近くから出土しており、セット関係にあると考えられる。またS11～S13はいずれも被熱により赤変している。S14～S18は石鏃である。S14・S15は凹基式、S16・S18は凸基式である。S19は石槍である。S20～S23・S25は削器である。いずれも剥片を利用し、刃部の調整はほとんどしていない。S24・S26～S28は石庖丁である。いずれもわずかに抉りが見られる。出土遺物から概ね弥生中期前半の遺構と考えられる。

SH53002(第49図)

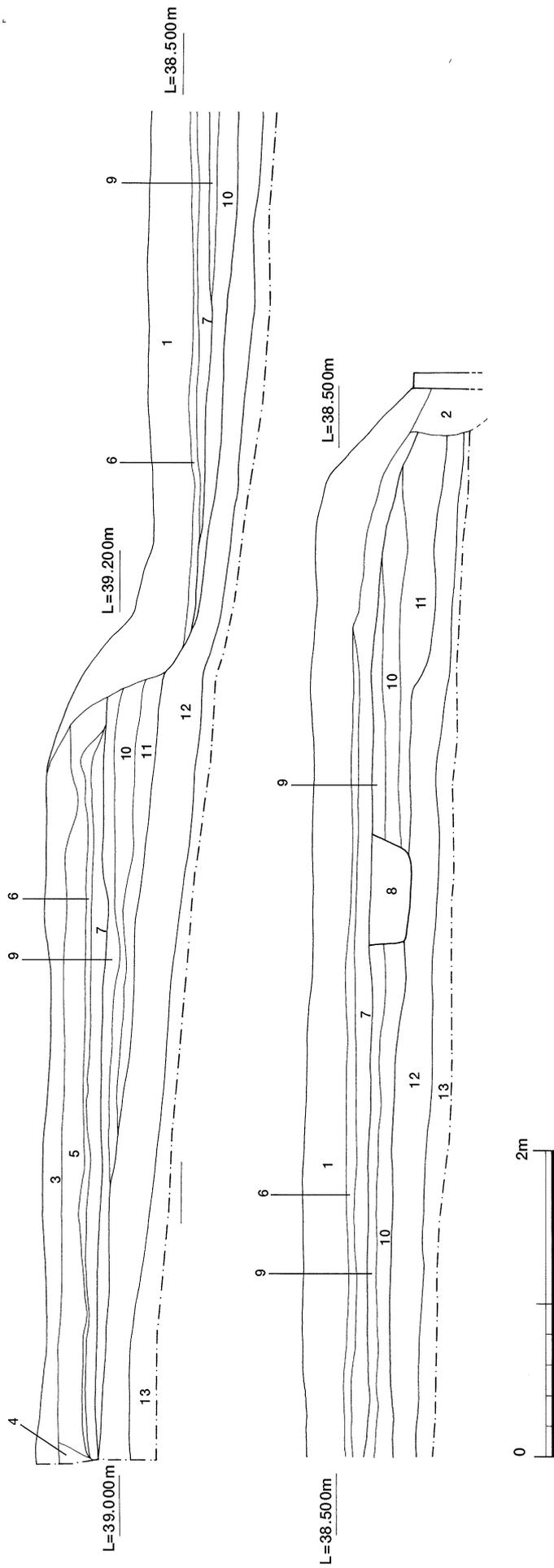
斜面部で検出したため、南半は削平され、北半のみしか検出できなかったが、弧を描く溝とその内側の土坑状の遺構から竪穴住居と考えられる。弧状の溝は最大幅55cm、検出長5.7mで、深さ15cmを測る。土坑は



第43図 V区第3遺構面平面図及び包含層出土遺物実測図

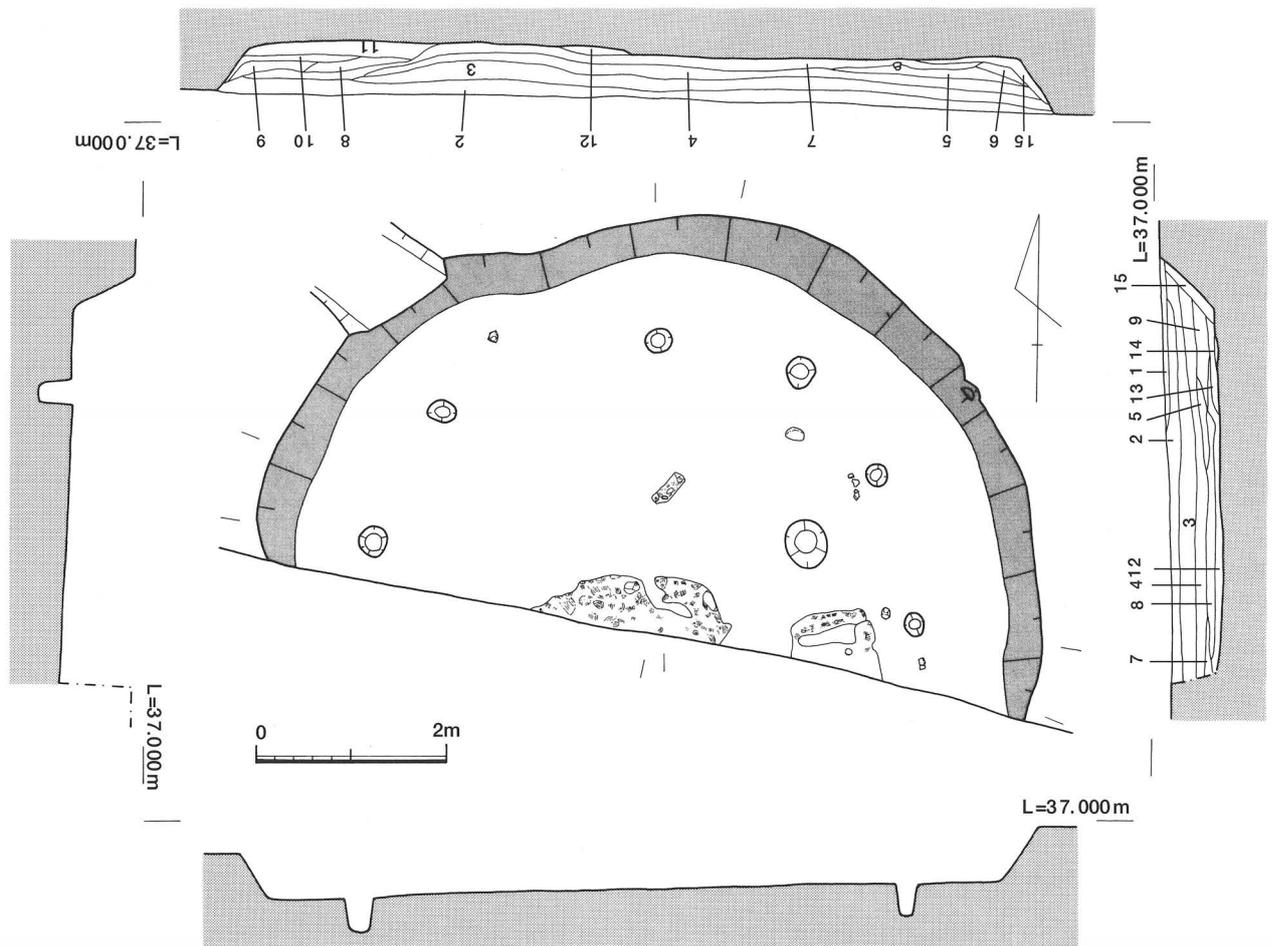


第44图 V区第1・第2遺構面平面図

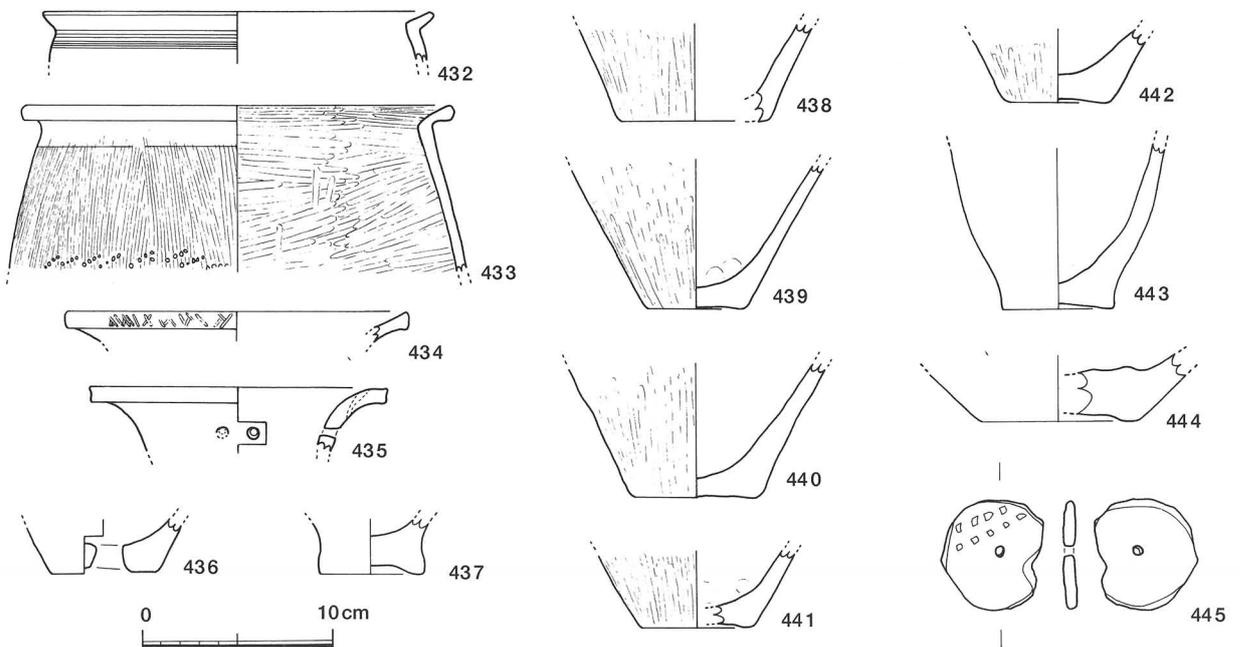


- | | | | | | | |
|---|----------------|----|------|-----|-------|-------|
| 1 | 耕作土 | 8 | 10YR | 7/1 | 灰白 | 砂混粘質土 |
| 2 | 攪乱 | 9 | 10YR | 5/3 | にぶい黄褐 | 粗砂 |
| 3 | 耕作土 | 10 | 10YR | 4/3 | にぶい黄褐 | 砂混粘質土 |
| 4 | 攪乱 | 11 | 10YR | 5/4 | にぶい黄褐 | 砂混粘質土 |
| 5 | 7.5GY 6/1 緑灰 | 12 | 10YR | 3/1 | 黒褐 | 砂混粘質土 |
| 6 | 10YR 7/3 にぶい黄橙 | 13 | 2.5Y | 8/3 | 淡黄 | 粘質シルト |
| 7 | 10YR 4/2 灰黄褐 | | | | | 砂混粘質土 |

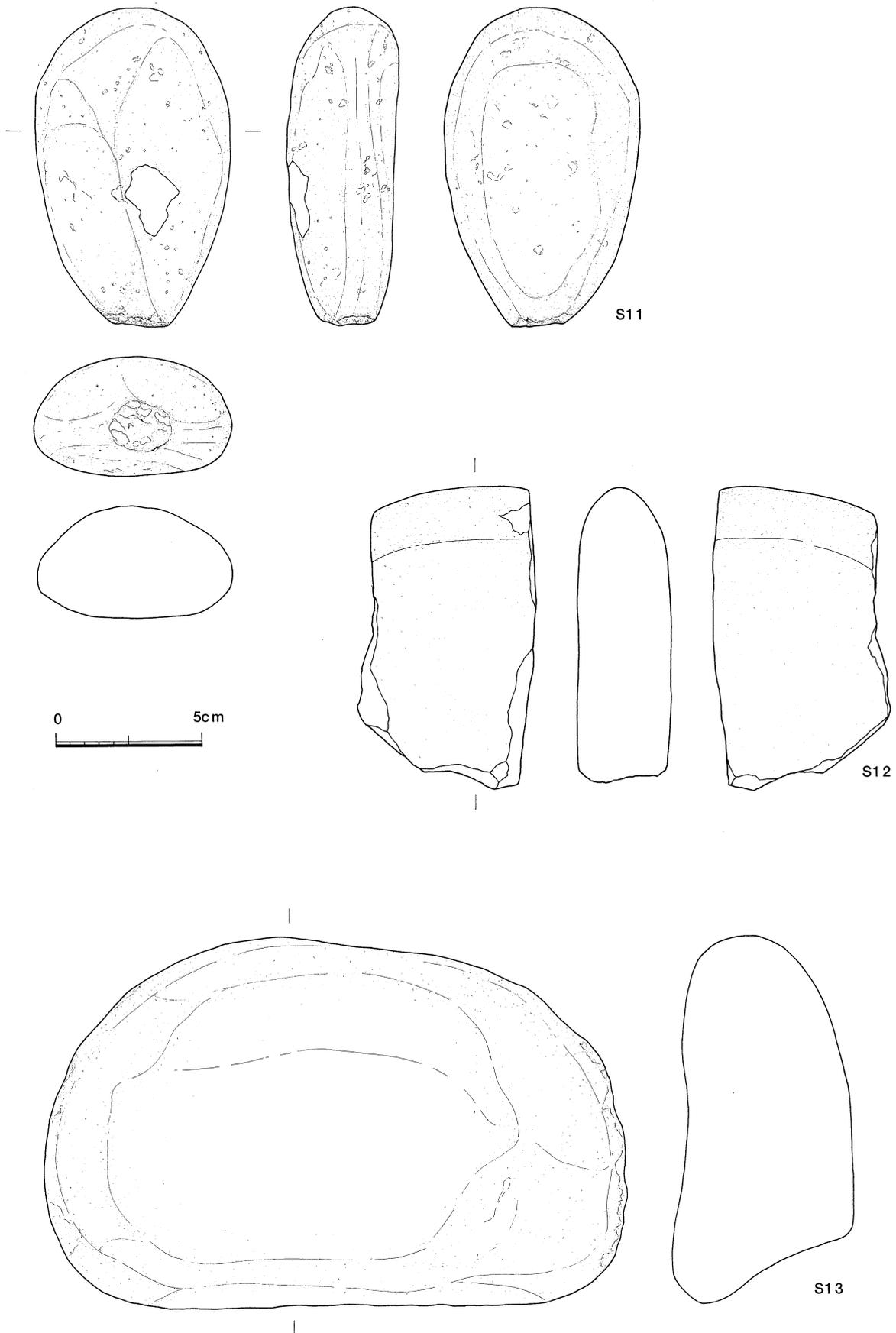
第45図 V区東壁土層断面図



- | | | |
|-----------------------------|------------------------------------|-------------------------------|
| 1 2.5Y 6/1 黄色 粘質シルト | 6 10YR 4/2 灰黄褐 粘質シルト(炭含む) | 11 2.5Y 5/3 黄褐 砂混粘質土 |
| 2 10YR 6/1 褐灰 粘質シルト | 7 2.5Y 2/1 黒 粘質シルト(炭多量に含む) | 12 7.5YR 7/6 橙 粘質シルト(焼土多量に含む) |
| 3 10YR 3/1 黒褐 砂混粘質土(炭含む) | 8 7.5YR 3/2 黒褐 砂混粘質土(炭含む) | 13 2.5Y 3/1 黒褐 砂混粘質土(炭多量に含む) |
| 4 10YR 4/1 褐灰 砂混粘質土(炭多量に含む) | 9 2.5Y 5/2 暗灰黄 細砂~粗砂 | 14 7.5YR 7/4 にぶい橙 粗砂(焼土含む) |
| 5 10YR 5/1 褐灰 砂混粘質土 | 10 7.5YR 6/3 にぶい褐 粘質シルト(炭・焼土多量に含む) | 15 10YR 6/6 赤橙 焼土 |

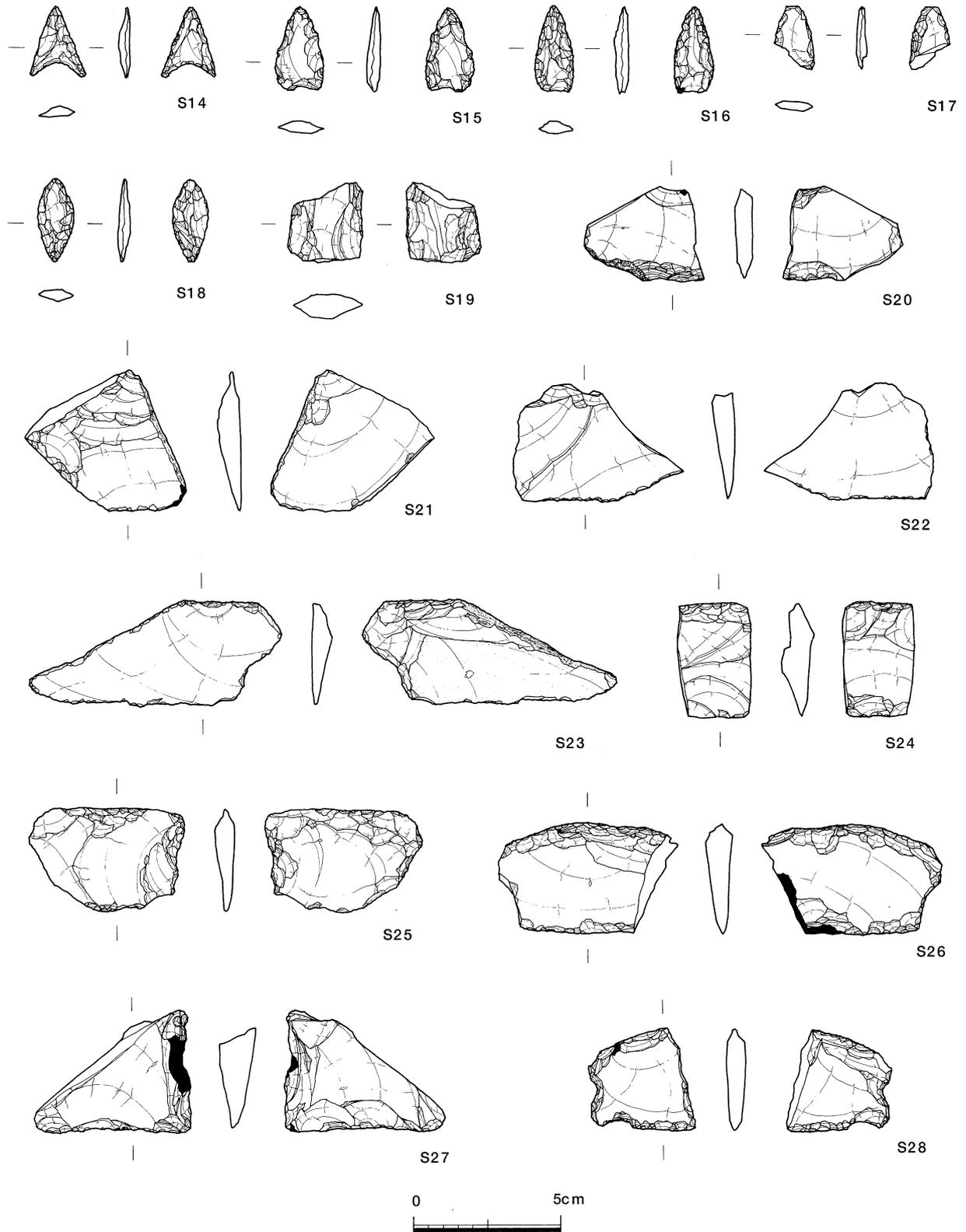


第46図 SH53001 平・断面図及び出土土器実測図



第47图 SH53001 出土石器实测图①

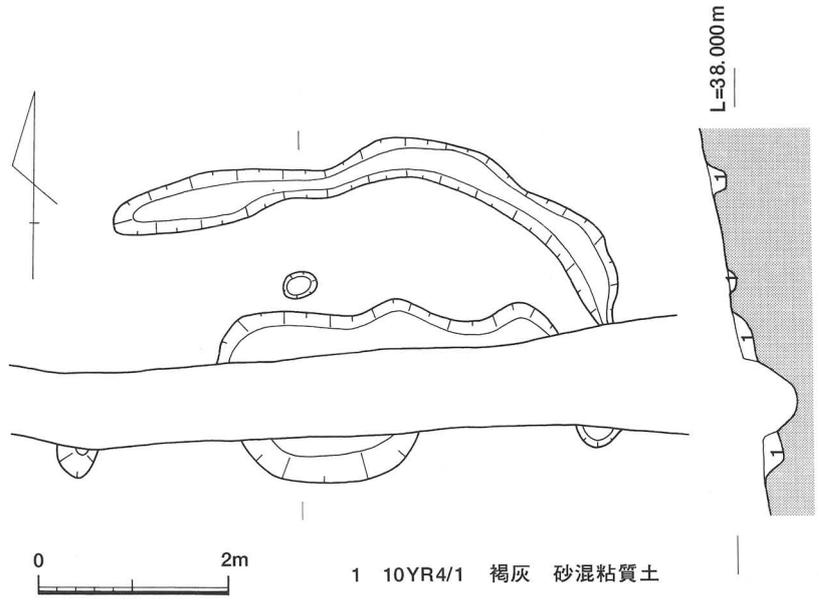
奈良時代の溝 (SD53001) に切られているが、長さ3.75m、幅1.85mを測る。土坑の北・西・東にはそれぞれ直径40~50cm、深さ10cmのピットが見られる。東西のピットについては溝の延長とも考えられるが、北側のピットをあわせ、支柱穴の可能性も考えられる。各遺構の埋土はいずれも同じで、褐灰色の砂混粘質土層である。竪穴住居とした場合には、直径6m以上の円形または隅丸方形を呈すると考えられる。出土遺物は1点もなく、時期は不明である。



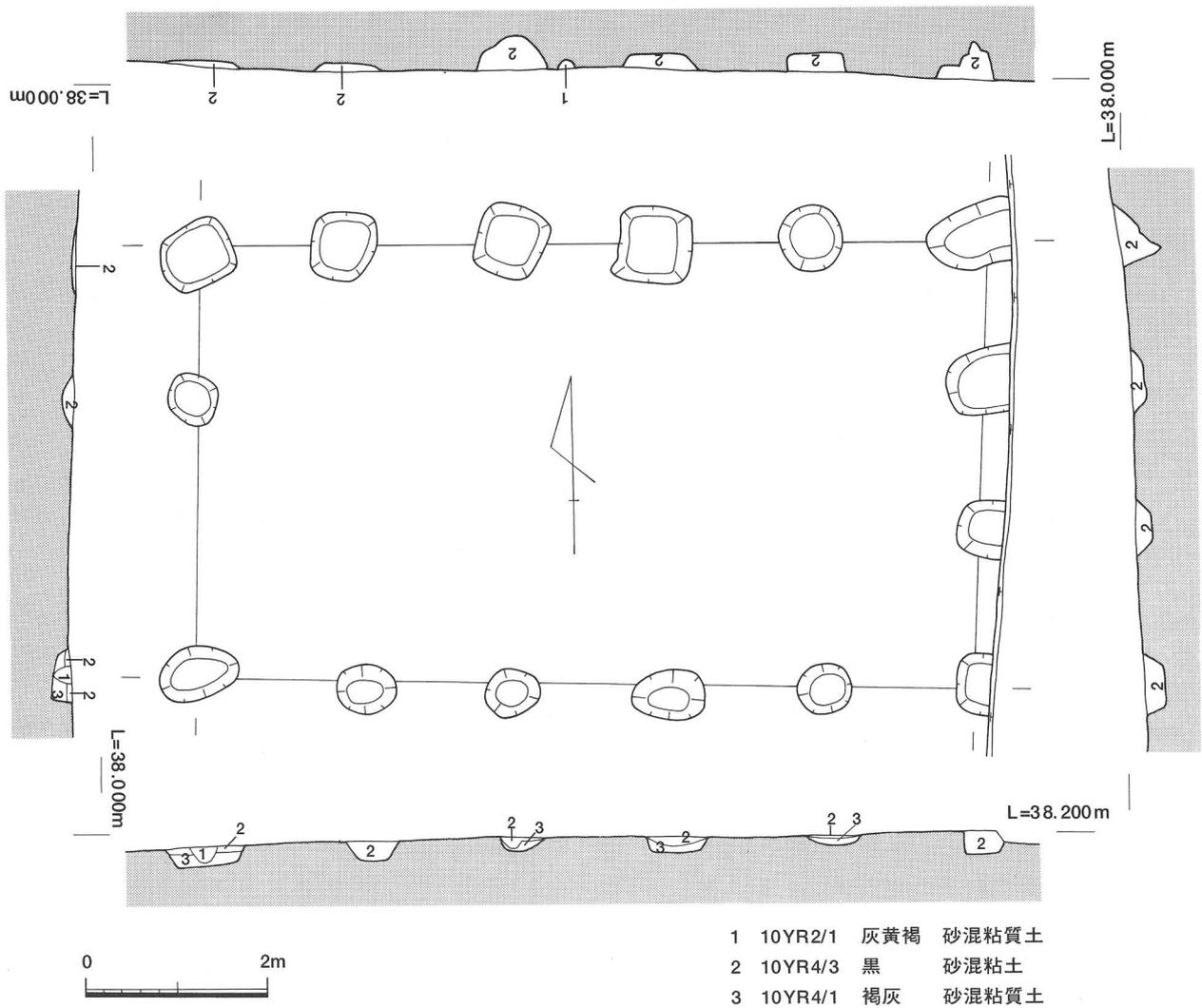
第48図 SH53001 出土石器実測図②

(3) 古代の遺構
SB53001 (第50図)

調査区の南東端で検出した南北3間(5m)×東西5間(8.8m)、床面積44m²の掘立柱建物である。建物の主軸方位はN-88°-Wである。柱間は南北1.67m、東西1.76mで、柱穴は楕円形のものもあるが、隅丸方形を呈するものが多く、最小のもので1辺約55cm、最大のもので1辺90cmを測る。削平が著しく、柱根を確認できたのは南西隅の柱穴のみで、柱の直径は25cm程度と考えられる。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、SD53001とほぼ同方位であることから7~8世紀頃の遺構と考えられる。



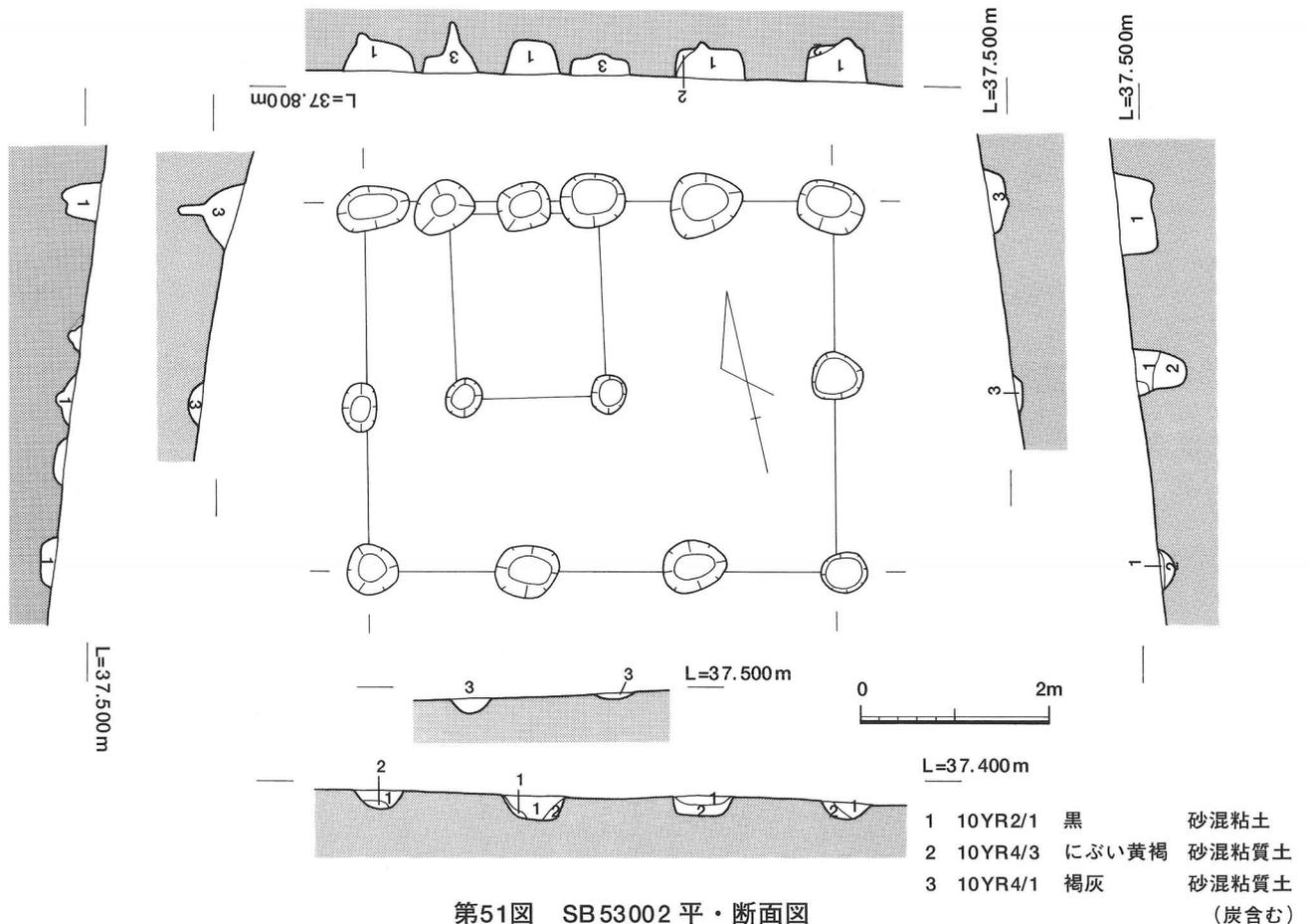
第49図 SH53002 平・断面図



第50図 SB53001 平・断面図

SB53002 (第51図)

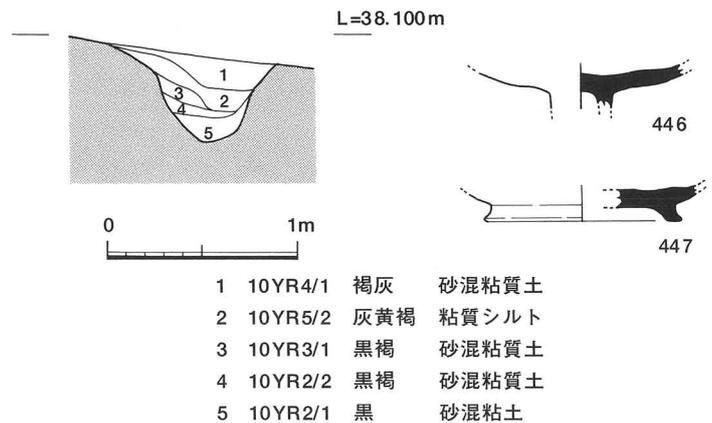
調査区の中央で検出した南北2間(4m)×東西3間(5m)、床面積20㎡の掘立柱建物である。建物の主軸方位はN-79°-Wである。柱間は南北2m、東西1.67mで、柱穴は楕円形から隅丸方形を呈し、最小のもので長径約50cm、最大のもので長径80cmを測る。また、この建物に付随すると考えられる柱穴が4基検出されている。建物北西の柱穴より、半間と1間半東側に柱穴が見られ、さらにその2基の柱穴の南1間部分に同様に2基の柱穴が見られた。柱間や方位等がほぼ同じことから、SB53002に付随する施設と考えられる。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、SB53001とほぼ同じ柱間であることから7~8世紀頃の遺構と考えられる。



SD53001 (第52図)

ほぼ東西方向に流れる溝で、最大幅1.5m、検出長57mを測る溝である。断面形状はV字に近いU字で、埋土は5層に分層できる。第1層は褐灰色砂混粘質土層、第2層は灰黄褐色粘質シルト層で、この2層が上層である。第3・4層は黒褐色砂混粘質土層で、中層である。第5層は黒色の砂混粘土層で下層である。遺物は少なく、須恵器の小片がわずかに出土しただけである。

446は上層から出土した須恵器の高杯である。447は中層から出土した須恵器の杯である。7世紀後半の遺構と考えられる。



SH53003 (第53図)

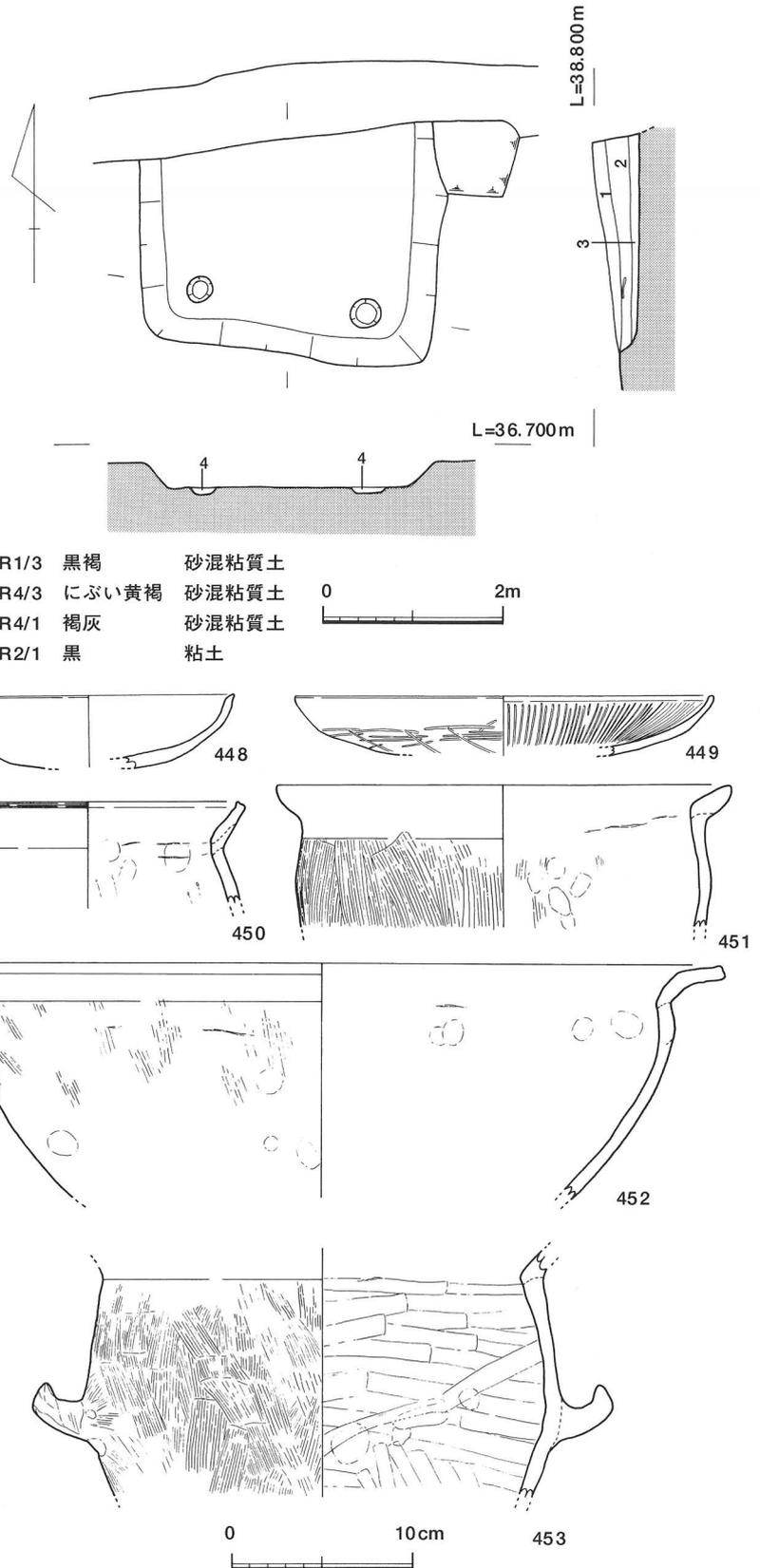
調査区北東部で検出した。北側はSD53001に切られており不明であるが、東西3.45m、南北2.8m以上、深さ55cmを測る方形の竪穴住居である。埋土は3層に分層でき、上層は黒褐色の砂混粘質土層、中層はにぶい黄褐色砂混粘質土層、下層は褐灰色砂混粘質土層である。床面において柱穴を2基検出しており、南側の主柱穴と考えられる。柱穴は直径30cm、深さ10cmで、埋土は黒色の粘土層である。

出土遺物は主に中層部分から出土した。448は土師器の坏である。449は土師器の皿で、内面に暗文が見られる。450・451は土師器の甕である。452は土師器の鍋である。外面タテハケ及び指頭圧、内面指頭圧である。453は土師器の甕である。外面タテハケ、内面板ナデである。概ね7世紀後半の遺構と考えられる。

(4)近世の遺構

SB51001 (第44図)

調査区の南東端で検出したピット群で、南北1間(3.9m)×東西3間(15.5m)を測る。ピットは円形を呈し、直径50~90cm、深さ10~20cmを測り、埋土はにぶい黄橙色の単層で、柱根は確認できなかった。平面プランはやや平行四辺形となっており、東西のピット間も5.17mと間隔が離れていることから、建物の可能性は低いと考えられる。SB41001とピット間の間隔や土色が同じことや、周辺の鋤溝と同方位をとることから、耕作に関連する遺構の可能性が考えられる。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。



第53図 SH53003 平・断面図及び出土遺物実測図

第6節 VI区の調査

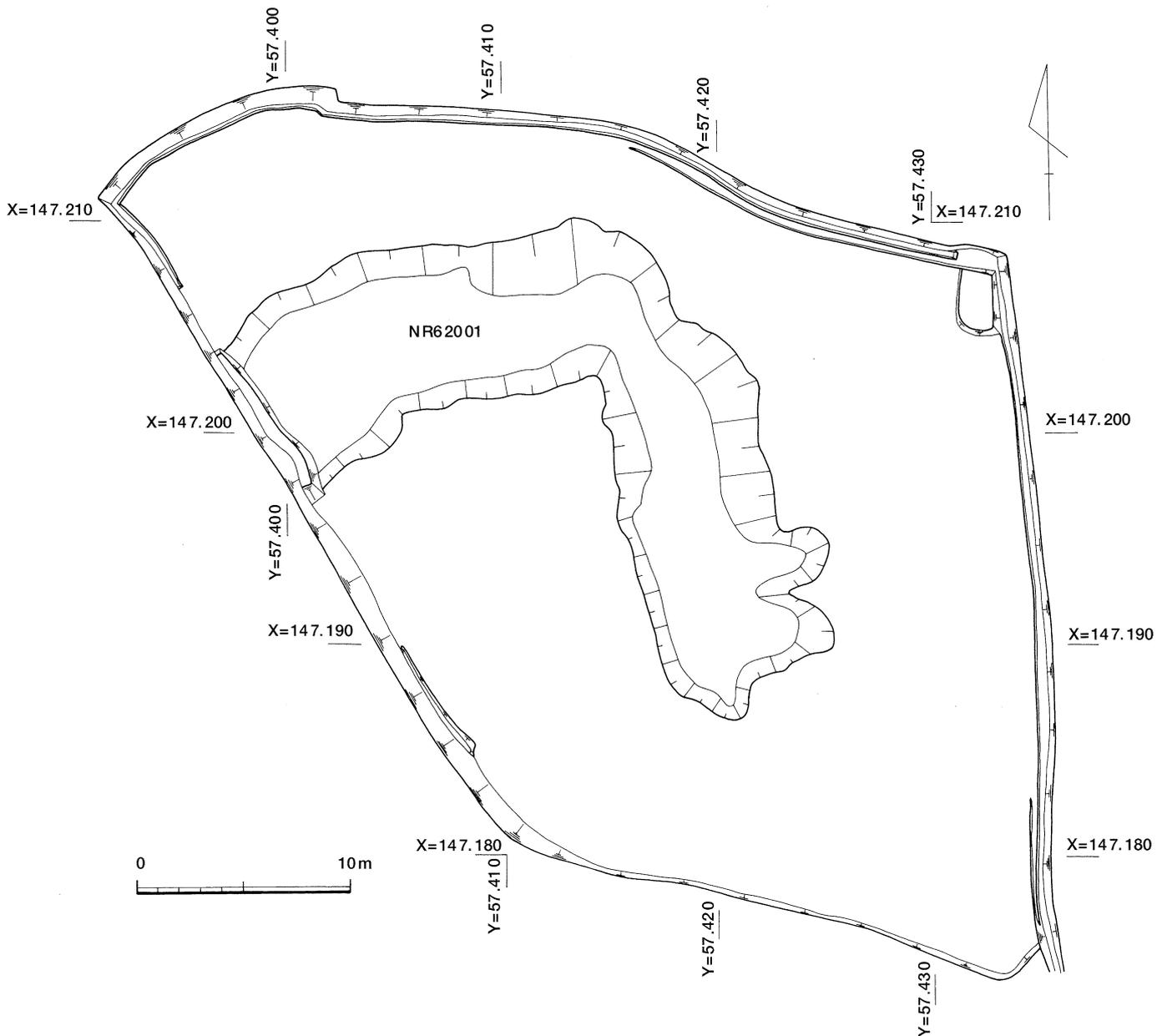
(1) 概要と基本層序

調査区の東部に位置する。壁面崩落のため、断面図は作成できなかったが、基本層序は4層に分層でき、第1層は約20cmの耕作土層、第2層は約5cmの床土層、第3層は約10cmの褐灰色砂混粘質土層、第4層はにぶい黄褐色の粘質シルト層で地山ある。遺構面は、第3層上面（第1遺構面）と第4層上面（第2遺構面）の2面確認した。第1遺構面は近世以降の遺構面で、数状の溝等を検出した。第2遺構面はNR31001に続く旧河道のみを検出した。

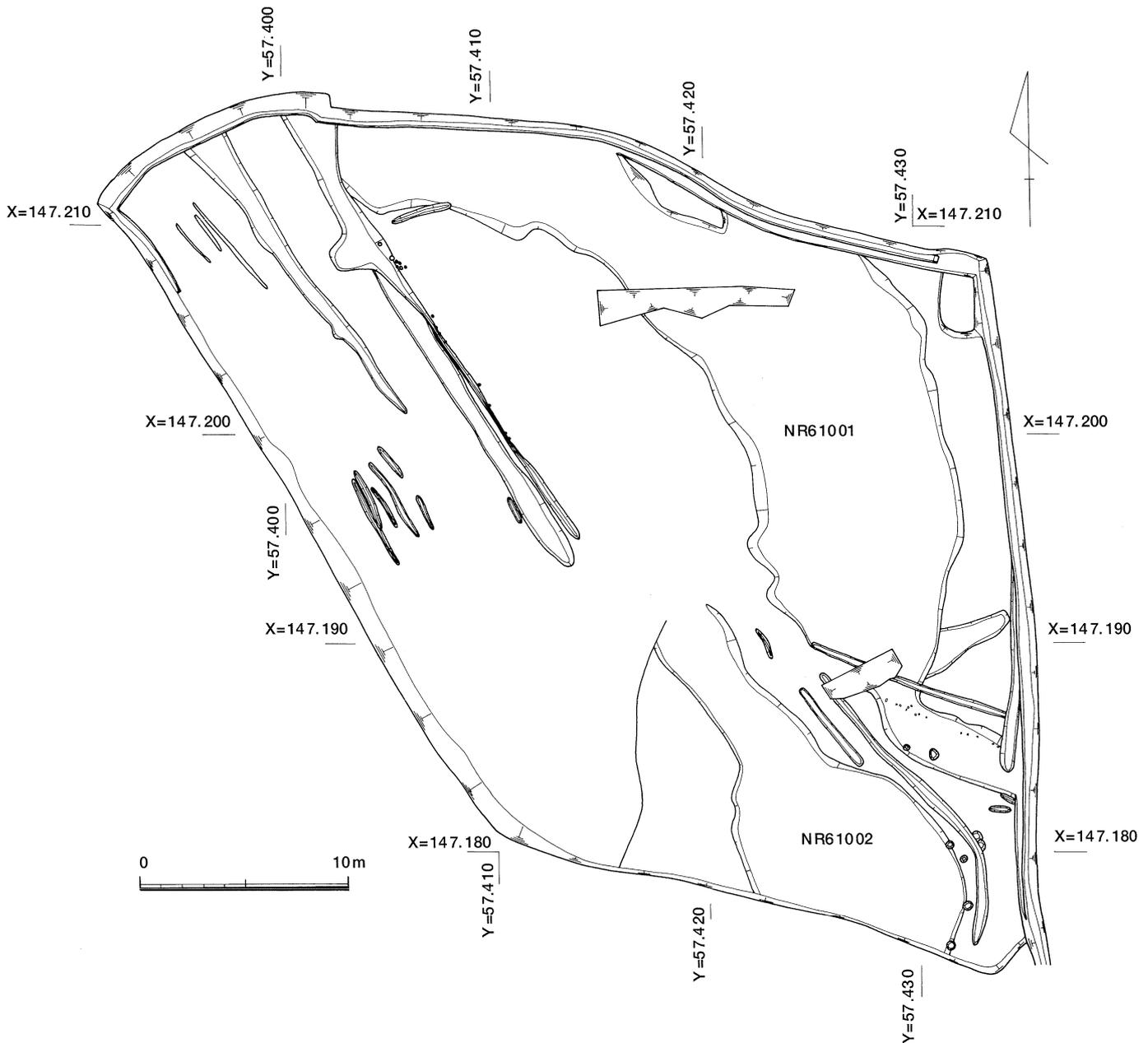
(2) 近世以前の遺構

NR62001（第54・56図）

幅10m、深さ約1mの旧河道である。調査区中央から始まり、約20m北流した後、流路を南西に変える。流路の方向からNR31001の上流部分と考えられる。壁面崩落のため、断面図は作成できなかったが、大別して上下2層に分層できる。上層は青灰色砂混粘質土層で、下層は暗青灰色砂混粘質土層である。出土遺物は第



第54図 VI区第2遺構面平面図



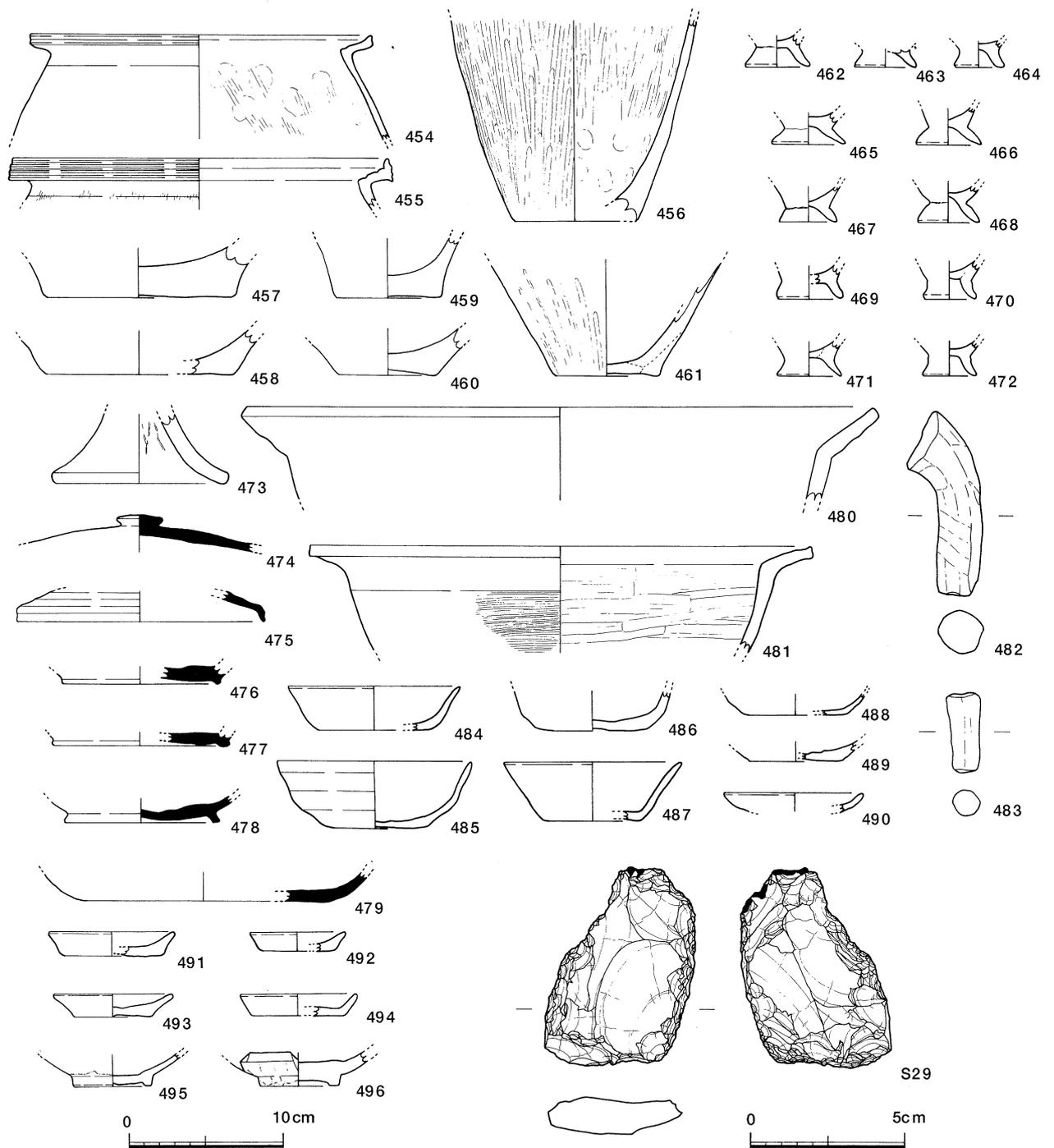
第55図 VI区第1遺構面平面図

56図に掲載した。454～473は弥生土器である。454は弥生中期の甕で、口縁端部に凹線1条が見られる。外面ナデ、内面指頭圧後タテハケである。455は弥生後期の甕で拡張した口縁端部に凹線3条が見られる。456～461は底部である。462～472は製塩土器である。すべて角閃石を含むものである。473は高杯の脚部である。474～479は須恵器である。474・475は坏蓋である。476～478は坏である。479は平瓶である。480～494は土師器である。480・481は鍋である。481の外面はヨコハケ、内面は板ナデである。482・483鍋の脚である。484～489は坏である。490～494は皿である。495は白磁の碗である。496は龍泉窯系青磁碗で、鎬蓮弁が見られる。S29は削器である。遺物は上・下層とも弥生中期から中世までのものが混在していることから、出土遺物から概ね中世までに埋没したと考えられる。

(3) 近世以降の遺構

NR61001 (第57図)

調査区の南東部から北部にかけて見られる浅い落ち込みである。幅は南部の狭い部分で2.4m、北部で10mを測り、深さ約40cmを測る。埋土は上下2層に分層でき、上層は暗青灰色砂混粘土層、下層はオリーブ黒色砂混粘土層である。出土遺物は主に下層部分から出土した。497・498は備前焼の播鉢である。499～505は土

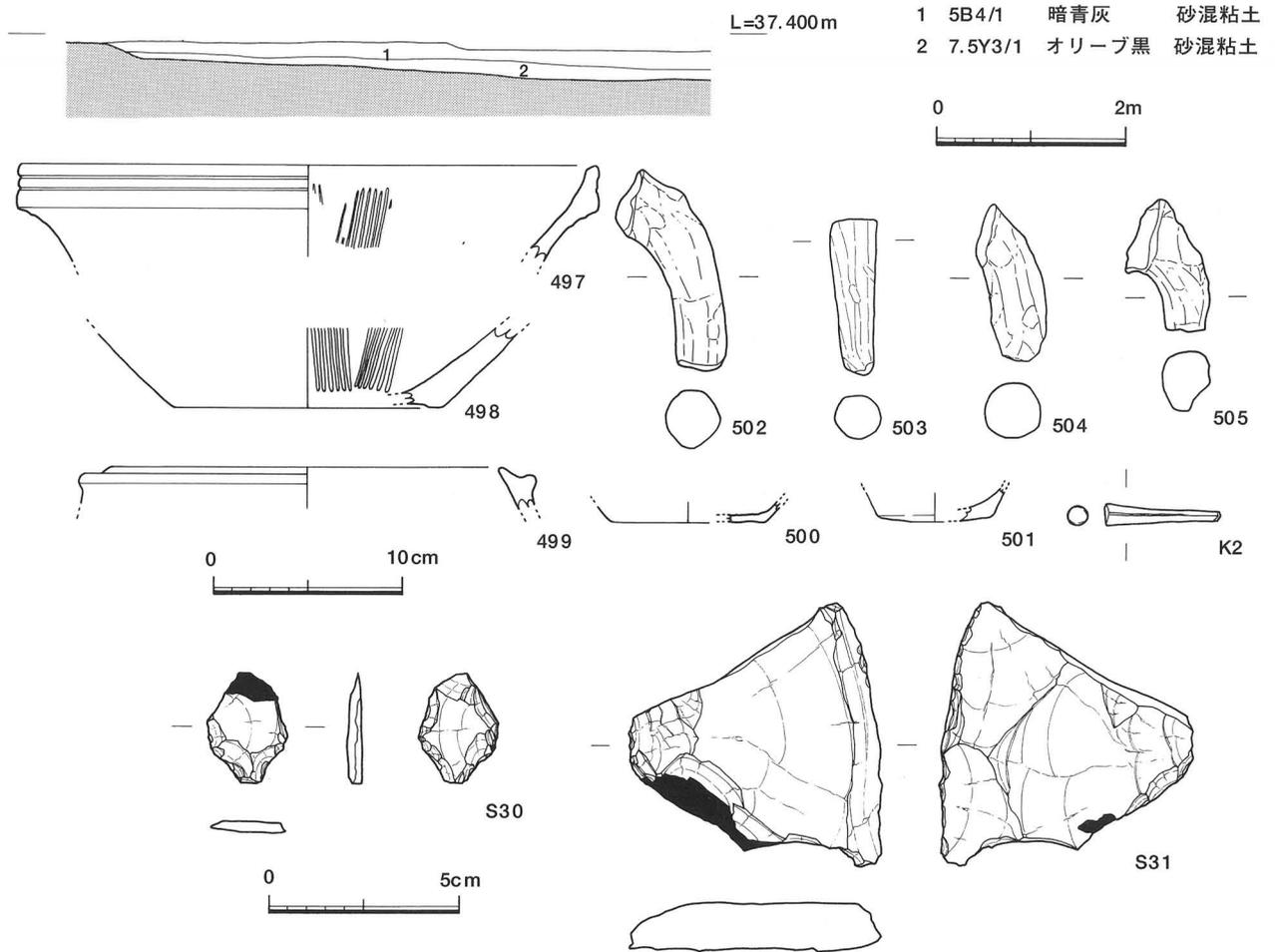


第56図 NR62001 出土遺物実測図

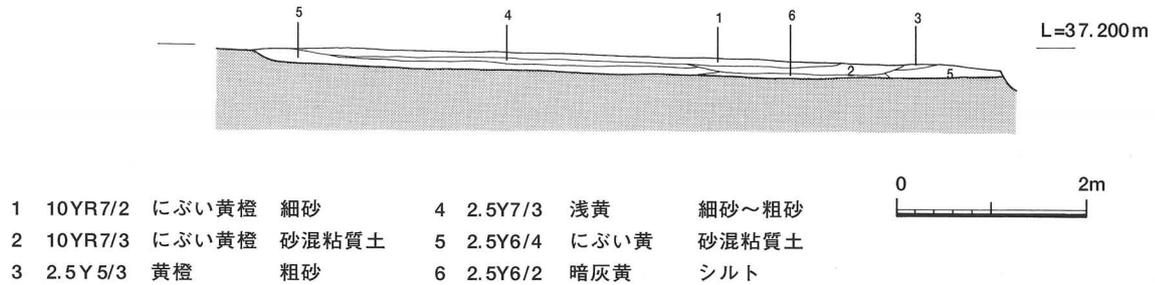
師器である。499は羽釜である。500・501は皿である。502～505は鍋の脚である。K1は煙管の吸口である。S30は有茎式の石鋤で、先端部は欠損している。S31は石鋤で刃部と基部は欠損している。中世から近世にかけての遺物が見られることから、同時期の遺構と考えられる。

NR61002 (第58図)

調査区の南東部から中央部にかけて見られる浅い落ち込みである。幅は北部の狭い部分で2.7m, 南部で10mを測り、深さ約30cmを測る。埋土は上下6層に分層できる。出土遺物はほとんど見られず、時期は不明であるが、概ね近世の遺構と考えられる。



第57図 NR61001 断面図及び出土遺物実測図



第58図 NR61002 断面図

第4章 まとめ

第1節 遺構の変遷について

今回の調査では概ね弥生中期前半、弥生後期前半、古代、中世、近世の5時期の遺物が出土しており、そのうち中世を除く4時期の遺構を検出した。なお、Ⅱ・Ⅲ区及びⅥ区については全期間を通じて旧河道であることから、ここではⅠ・Ⅳ・Ⅴ区の状況について以下に主要遺構の概要と変遷を示す。

弥生中期前半

竪穴住居2棟 (SH53001・53002) と土坑1基 (SK42068) が見られる。遺跡北東部に弥生中期前半の集落遺跡である奥の坊遺跡が存在することから、この集落域の南西端と考えられる。上流部に弥生中期前半の集落が広がっているため、旧河道中に弥生中期の遺物が多い。

弥生後期前半

竪穴住居4棟 (SH11001・42001～42003)、掘立柱建物2棟 (SB42001・42002) をはじめ土坑多数等を検出した。当該期が奥の坊権現前遺跡の最盛期と考えられる。調査地の西半に当該期の遺構が集中することから、集落域はさらに西へ広がることが想定される。現状の地形から考えると、北側を丘陵、南側を旧河道に挟まれた東西約90m、南北約80mの平坦面が見られ、調査地は概ねその東半にあたることから、この平坦面部分に集落域を想定できる。当該期の遺構の配置状況には注目すべき点がある。まず、4棟検出した竪穴住居の配置は、弧状に配置されている。今回の調査地が集落の東半で、ほぼ同様の集落構造が対照的に見られると仮定すれば、竪穴住居が円形に巡ることが予想される。その集落の中心部にはSB42001が認められる。SB42001は当該期の香川県の掘立柱建物には珍しく棟持柱を有するものである。集落の中心部に位置する点、および棟持柱を有する点から集落内において特殊な建物が想定される。なお、この掘立柱建物を中心にL字の溝 (SD42002) が見られる。東と北については削平が著しく、検出できていないが、掘立柱建物を取り囲むように方形に区画する溝の可能性を指摘できる。一方、SD42002埋没後に多数の土坑が掘削されており、そのほとんどから遺物は出土していない。さらに、区画の溝内にはSK42063が掘削されており、多量の土器が出土している。これらは後述するが、粘土採取土坑と焼成土坑の可能性が指摘できる。

古代

Ⅰ区とⅤ区で主に検出した。Ⅰ区については調査面積が狭く、遺構の性格については不明な点が多いため、Ⅴ区の検出遺構について詳しく述べる。Ⅴ区では方形の竪穴住居1棟 (SH53003)、掘立柱建物2棟 (SB53001・53002)、溝 (SD53001) 等を検出した。このうち切り合い関係からSH53003が7世紀後半で最も古い遺構と考えられ、その後SD53001が掘削されたと考えられる。このSD53001は検出部分の東西端の中心をとるとほぼ東西方向の溝であるが、検出部分の中心部はN-5°-E方向を指向している。周辺地形からも、調査地の南西約1.5km地点で調査した小山・南谷遺跡や新田本村遺跡で検出されたN-5°-E方向の条里溝であることが分かる。なお、2棟の掘立柱建物については概ねSD53001に平行することから、同時期の遺構と考えられる。

中世

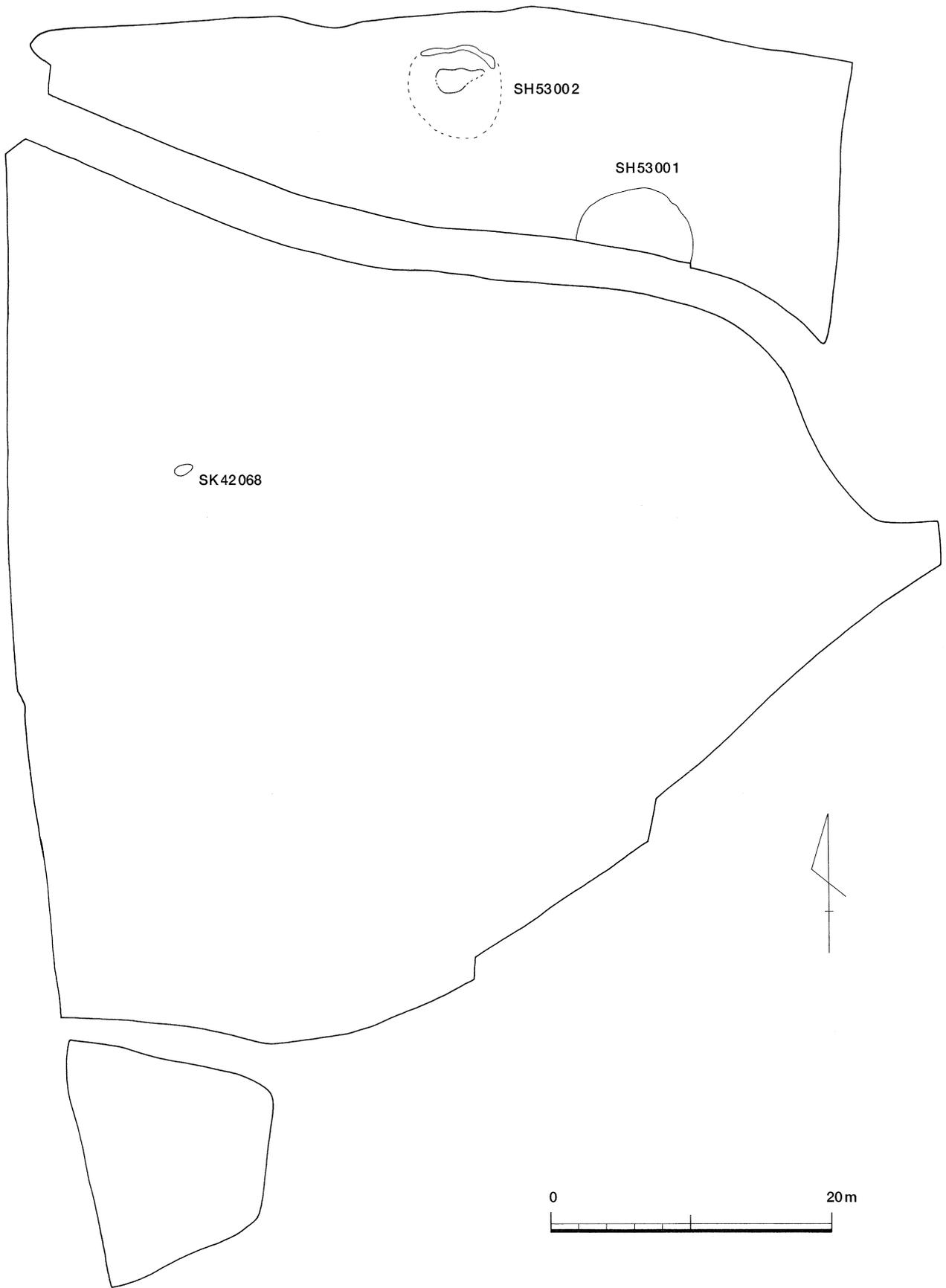
包含層中や旧河道中に遺物は多数認められるが、当該期の確実な遺構は不明である。

近世以降

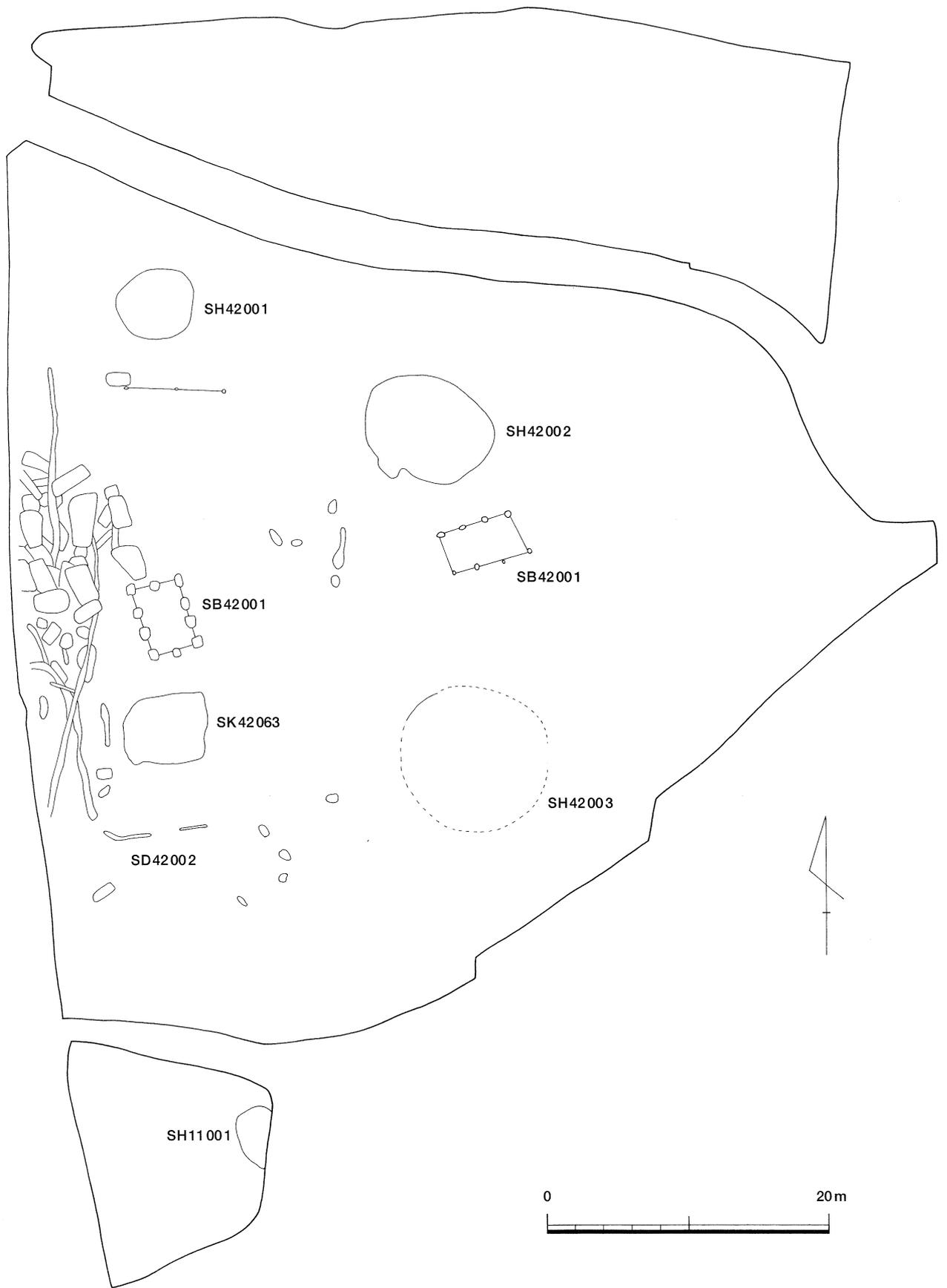
ほぼ全域が耕作地となっていたようで、全域に鋤溝が認められる。その中で、Ⅳ区南半とⅤ区においてピットが規則的に並ぶSB41001とSB51001を検出した。掘立柱建物にしてはやや平面形態が平行四辺形になっていることからこれらも耕作に伴うものと考えられる。

参考文献

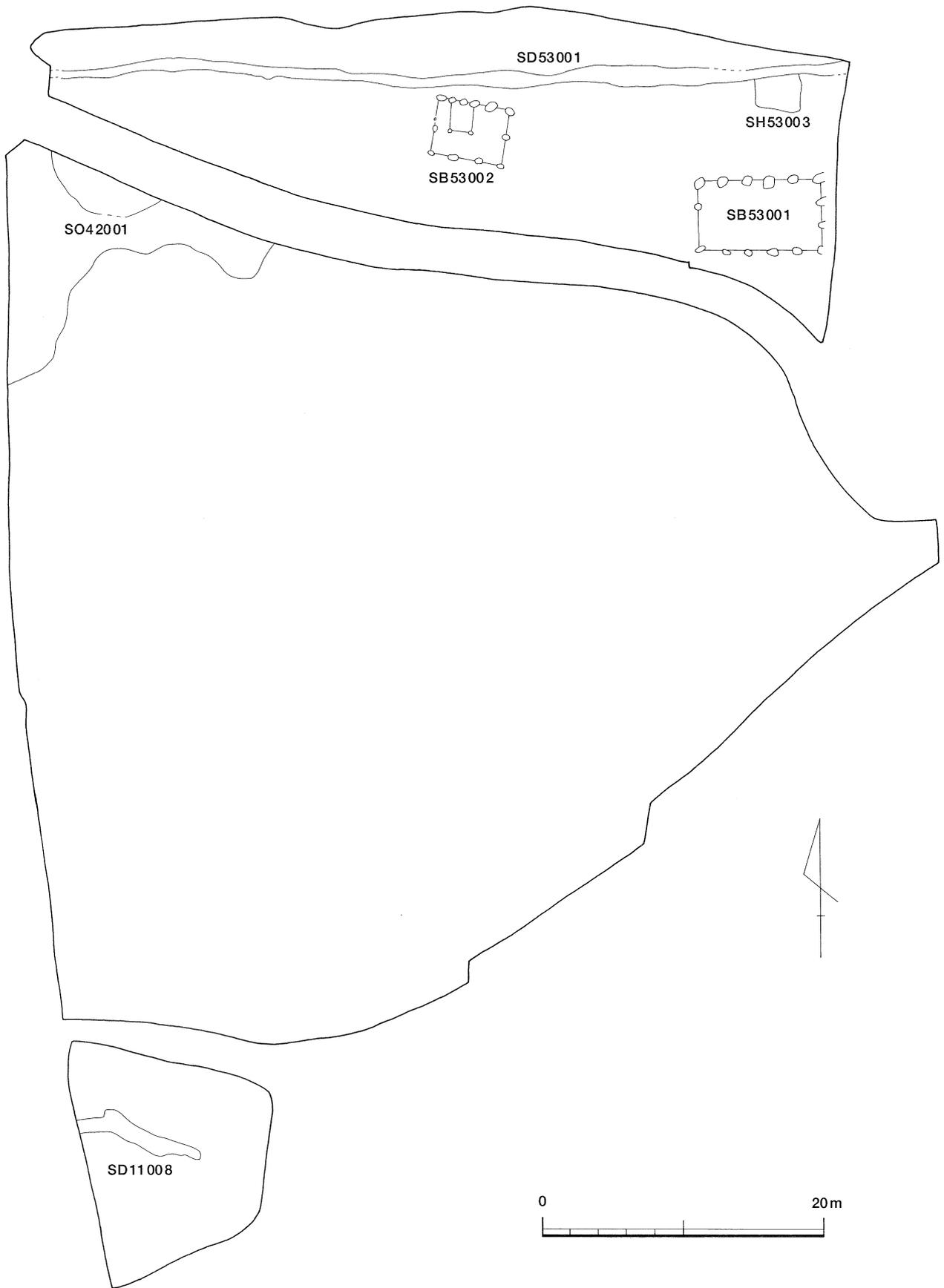
『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小山・南谷遺跡Ⅰ』香川県教育委員会 1997
『新田本村遺跡』『香川県文化財調査年報 平成8年度』香川県教育委員会 1997



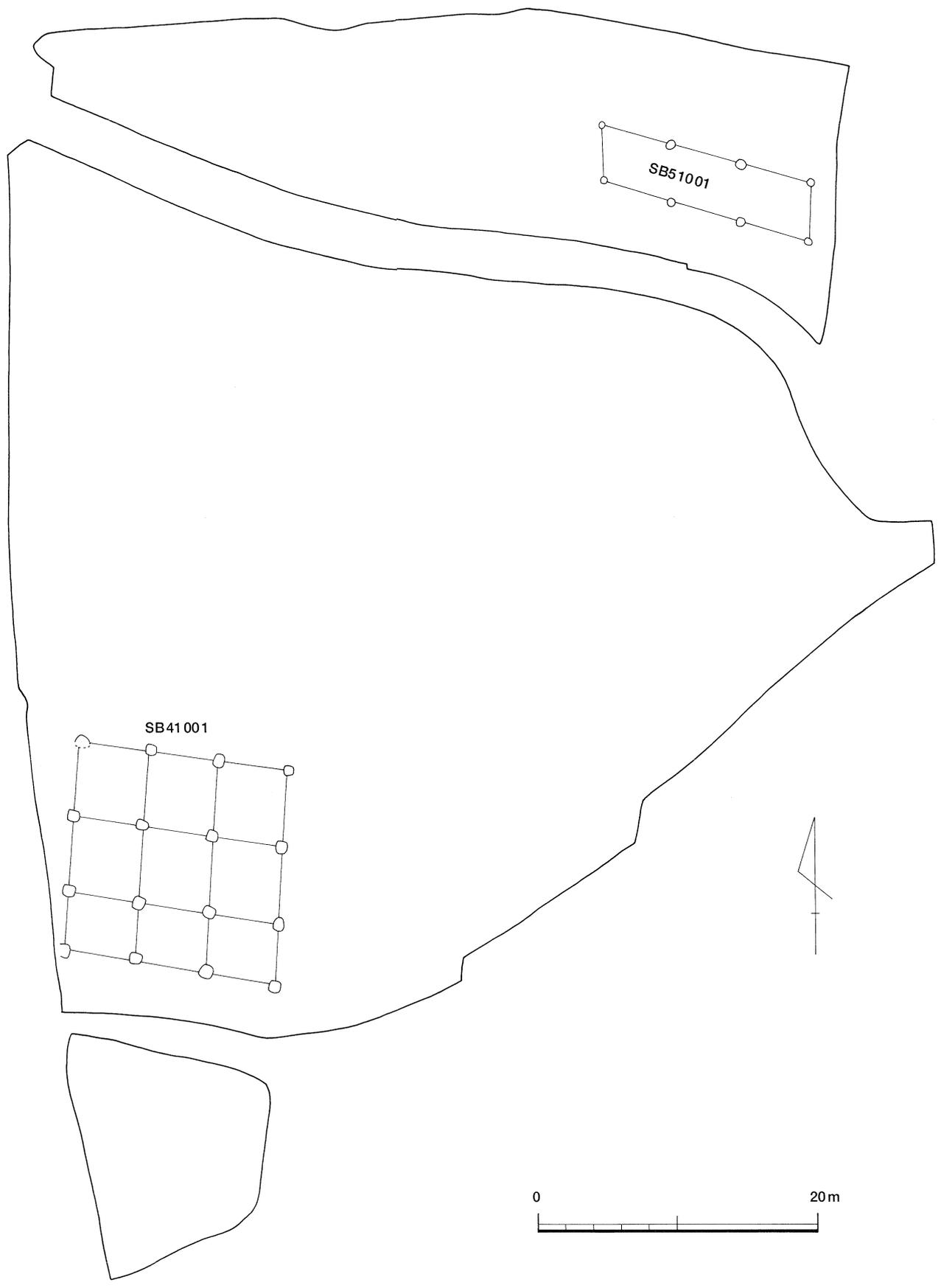
第59図 弥生中期の主要遺構



第60図 弥生後期の主要遺構



第61図 古代の主要遺構



第62図 近世の主要遺構

第2節 SK42063の性格について

今回の調査で検出したSK42063は集落の中心に近い部分で検出されており、長辺6.12m、短辺5m、深さ80cmを測る大型の遺構である。内部より製塩土器をはじめとする多量の弥生土器とともに炭・焼土が検出された特異な遺構である。奥の坊権現前遺跡においては出土遺物量・規模において突出することから、この遺構についての性格を考えてみたい。

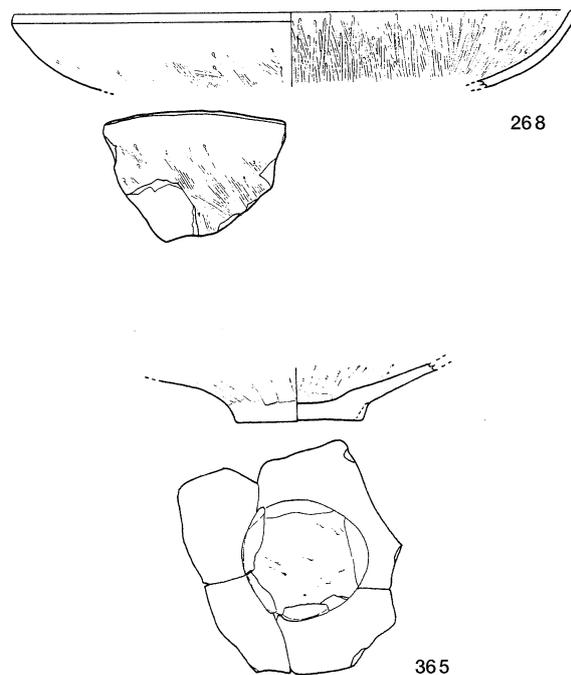
まず、この遺構の最大の特徴としては、遺構内に炭・焼土が多量で、壁面の大部分と床面の一部が焼けていることである。このことから、炭・焼土の廃棄遺構ではなく、遺構内において火が使用されたことが明らかである。遺構内で火を使用する遺構として考えられるものは、製鉄遺構、製塩遺構、土器焼成遺構、そして意図的でないものとして焼失した竪穴住居等があげられる。このうち、鉄金宰等の製鉄関連の遺物がないことから製鉄遺構はありえない。また製塩土器は多量に出土しているが、海浜部でないことから製塩遺構とは考え難い。このため、土器焼成遺構または竪穴住居の可能性が考えられる。

次に、遺構の規模・形態であるが、これまで知られている土器焼成遺構に比べると、規模はかなり大きい方である。一方、竪穴住居としては標準的な規模と考えられる。しかしながら、床面において唯一検出したT字状の土坑は、南端と西端部分に深さ10cmほどピット状に窪む部分が見られるが、竪穴住居の支柱穴とは考え難い。また、壁溝やベッド状遺構も見られない。なお、床面の土坑については土器焼成遺構としても不自然なものであり、検討の余地を残す。

また、遺構の層序および遺物の出土状況から考えてみたい。埋土の最下層は厚さ約5cmの黒色の粘質シルト層で、きめの細かい灰が堆積したような層序である。下層は最も炭・焼土を含んでいることから、この層位において火が使用されたことがうかがえる。遺物は上層から最下層まで出土しているが、最下層の上面(下層出土遺物として取り上げ)において最も多く出土し、第37図283の鉢や第38図337の製塩土器等のように口縁部を下に向けた状態で出土するものが多く、原位置を保つものと考えられる。焼失した竪穴住居であれば、床面直上に原位置を保った遺物があり、その上面において炭・焼土が認められると考えられる。このため、人為的に灰を敷き、その上面に土器を並べていたと推測され、土器焼成遺構の可能性が高いと考えられる。

次に出土遺物から考えてみたい。多量の出土遺物にもかかわらず、甕や製塩土器に煤附着等の使用痕跡は一切認められないばかりか、2次焼成を受けた土器も見られない。また、第38図337の製塩土器以外は土器として使用できないほど破損しているものばかりで、その多くは細片である。さらに、第63図のように焼成時に弾け飛んだような破裂痕のある土器が2点出土している。これらことからSK42063は土器焼成遺構と考えられる。

さらに、SK42063以外出土弥生土器では図示した122点のうち14点にその胎土中に角閃石が含まれている。角閃石を含む胎土の土器は下川津B類土器と呼ばれ、高松平野中央部で製作された土器と考えられている。このため、SK42063以外においては11.5%の比率で高松平野中央部の胎土と考えられるのに対し、SK42063から出土した土器のほとんどは角閃石を含まないものであり、在地の胎土のものと考えられる。また、SK42063の北西に不規則に密集して存在する土坑群は、深さ20cm程度で、遺構内からはほとんど遺物が出土していない。このことから、これらの土坑群が粘土採取土坑であった可能性が指摘できる。



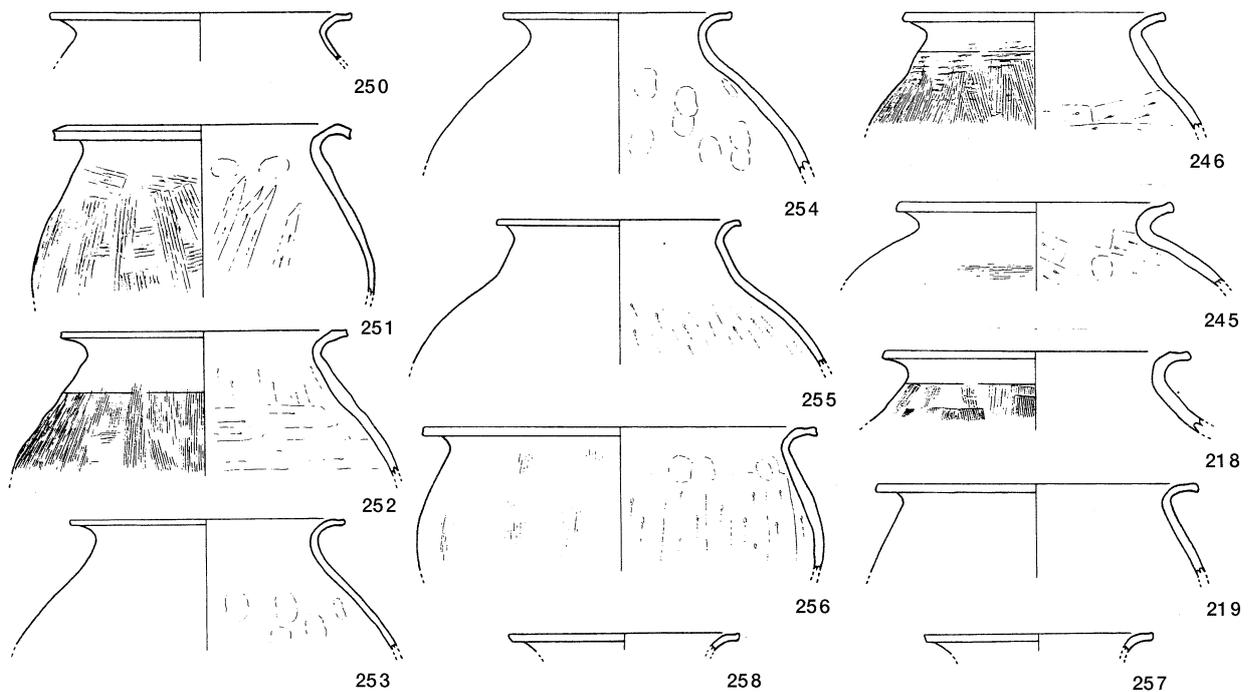
第63図 SK42063 出土破裂痕土器 (S=1/4)

第3節 奥の坊権現前遺跡出土弥生後期土器の特徴について

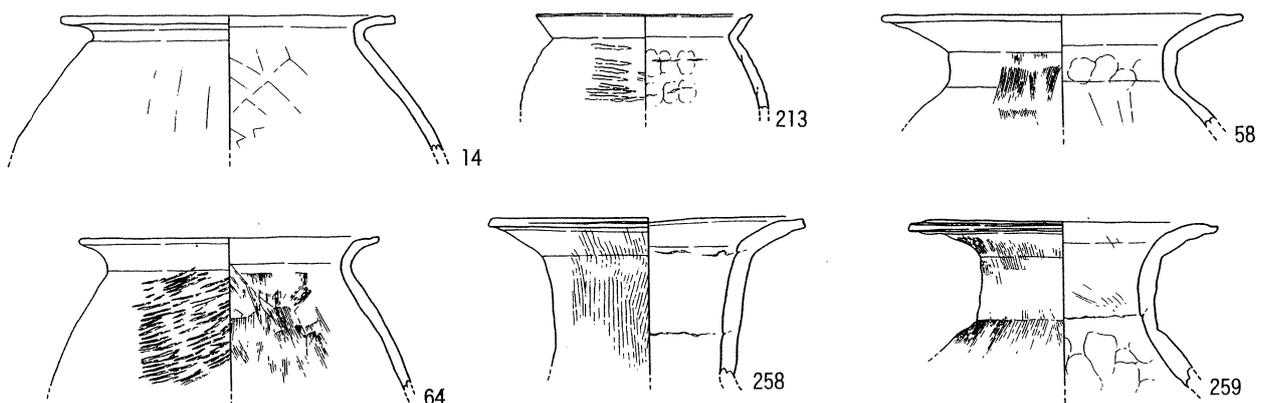
高松平野中央部の弥生後期の土器は下川津B類土器に代表されるように角閃石を含むものが一般的である。しかしながら、奥の坊権現前遺跡出土遺物は角閃石をほとんど含まない点で、高松平野中央部の土器と異なるものである。胎土中の砂粒も粗く、多量に含んでおり、一見して平野部の土器とは異なる。SK42063は第2節で述べたとおり、土器焼成遺構と考えられるもので、高松平野東部の丘陵部の土器様相を示すものとして評価できる。

胎土以外の特徴としては、甕や壺の口縁部の上面に窪みが見られるものがある。これは口縁部のヨコナデ時に口縁端部の上面を強くなでる（以下、口縁端部上面ナデ技法と呼ぶ。）ことで窪んだり、屈曲しているものである。SK42063出土遺物のうち口縁部に凹線を施さない甕・壺は41個体出土しており、そのうち第64図の11個体（約27%）に口縁端部上面ナデ技法が認められる。一方、口縁部のナデ技法は高松平野中央部で製作される下川津B類土器にも見られる。しかしながら下川津B類土器は口縁端部のみならず、口縁部上面全体を強いナデにより凹凸をつくるもので、端部のみをなでるものとは異なる。このため口縁端部上面ナデ技法が奥の坊権現前遺跡の土器の特徴として認識できる。

また、口縁端部上面ナデ技法を施す土器は、やや時期が下るが、第65図に掲載したように原中村遺跡においても見られる。このことから口縁端部上面ナデ技法は高松平野東部の丘陵地域の土器製作技法と考えられる。



第64図 口縁端部上面ナデ技法を施す土器 (S=1/4)



第65図 原中村遺跡出土土器 (S=1/4)

第4節 山田郡北部の地形と地割について

奥の坊権現前遺跡の所在する高松町は古代において山田郡の北部に位置する。この地域の条里地割については山田郡に一般的に見られる条里地割（N-11°-E）と異方位条里地割（N-5°-E）の2方向の条里地割が表層地割として見られる。奥の坊権現前遺跡の西約1.5kmで調査された小山・南谷遺跡において（N-5°-E）が検出され、藤好史郎氏により北部条里地割として報告されている。この北部条里地割の施行域は現存する表層地割から概ね東西・南北とも6~7町四方で、時期的には、南部条里地割（=N-11°-E）よりも相対的に古く、8世紀代に溯り得る可能性を指摘している。

今回検出された溝SD53001は検出部分の東西端の中心をとるとほぼ東西方向の溝であるが、検出部分の中心部はN-5°-E方向を指向している。周辺部の表層地割からも北部条里地割に合致すると考えられる。また、SD53001はその出土遺物から7世紀後半の時期が考えられ、小山・南谷遺跡検出の条里溝よりもさらに古い時期のものである。このため、北部条里地割施行前の地割とも考えられる。奥の坊権現前遺跡は丘陵部に位置し、地形は北東が高く南西が低いことから、条里地割に斜行する形で地割を行うような地形的制約を受けてもおかしくない。にもかかわらず、地割を東西方向にとることは条里地割施行のような大規模な規制としか考え難いことから北部条里地割の延伸であると考えられる。以上から、北部条里地割は遅くとも7世紀後半に施行され、平野部の最も奥まった地域まで施行されていることが指摘できる。なお、平野部の最奥部のこの地域まで条里が施行され、集落を検出したことは、鳥坂峠を越え三木郡の海浜部へ抜ける道（ほぼ県道高松志度線と同じルート）が存在した可能性が考えられる。

この北部条里地割の形成過程には旧地形が大きく関わっていると考えられる。このため、旧地形を復元してみたい。江戸時代以前の地形が推定可能な史料として香西成資が享保4（1719）年に成立させた『南海通記』がある。その中に天正10（1582）年頃の地形として「…春日ノ里ニ至ル、此所ハ屋島山、石清尾山両受ノ間、入海ニテ山田郡小山ノ下マデ潮サシ来ル、遠干渴ナ春日里ト木太郷ノ間、海ノ中道アツテ通用ス。…」と記載している。小山とは、現在の高松市新田町小山にあたと考えられる。また、小山の北西には堀江や南堀江といった字名も残り、概ねこの付近まで海岸線あるいは河口が湾状に入り込んでいたと想定できる。なお、この地域は現在の町名で高松町と新田町に分かれる。新田町は高松町の南側から西側を取り囲むように所在しており、町名はその名が示す通り近世の新田開発によるものである。このため、高松町と新田町の西側の境が概ね海岸線と推定できる。なお、高松町と新田町の南側の境はほぼ旧河道流路と重なっている。一方、屋島との間にも海が広がっていたことは、『平家物語』等からうかがえる。北側海岸線については、概ね志度街道付近までは陸地と考えたいが、条里地割は喜岡城周辺までしか認められず、やや南に後退する可能性もある。なお、対岸の屋島では屋島神社参道付近で7世紀の土器が出土しており、この付近までは陸であり、海峡幅は狭い部分で200m程度と推定される。また、東側に広がる立石山塊であるが、小山付近では丘陵部が西へ大きく張り出しており、大きく入り込んだ海岸線によって南側と隔絶している。以上から中世までは高松平野の中で、この地域が海岸と丘陵に囲まれた独立した小地域であったことがうかがえる。

このうち表層条里から推定すると、北部条里地割は新田街道（県道屋島塩江線）を除けば概ね小山付近の西へ張り出した丘陵以北に限られ、北は古高松小学校付近までである。西は海岸線から今回の調査地付近まで見られる。南北約1km、東西約1.8kmの範囲となり、藤好氏の推定よりもやや東西方向に広い範囲となる。なお、この北部条里地割施行範囲内にも表層条里では南部条里地割が認められ、北部地割を取り込みながら南部地割が北へ延伸していったことがうかがえる。小山・南谷遺跡で検出された北部条里地割の溝は12世紀後半に埋没しており、南部条里地割の延伸がこの時期以降であった可能性が考えられる。さらに、建武2（1335）年に築城された喜岡城周辺は南部条里地割を基準としていることから、少なくとも14世紀前半には既に南部地割が延伸されていたことがうかがえる。また、旧地形で海中であった新田町の北西部については17世紀の西嶋八兵衛や松平頼重による干拓により新田開発がなされており、その際には南部条里地割が延伸されている。

参考文献

藤好史郎「高松市新田町小山・南谷遺跡の発掘調査」『条里制研究12』1996

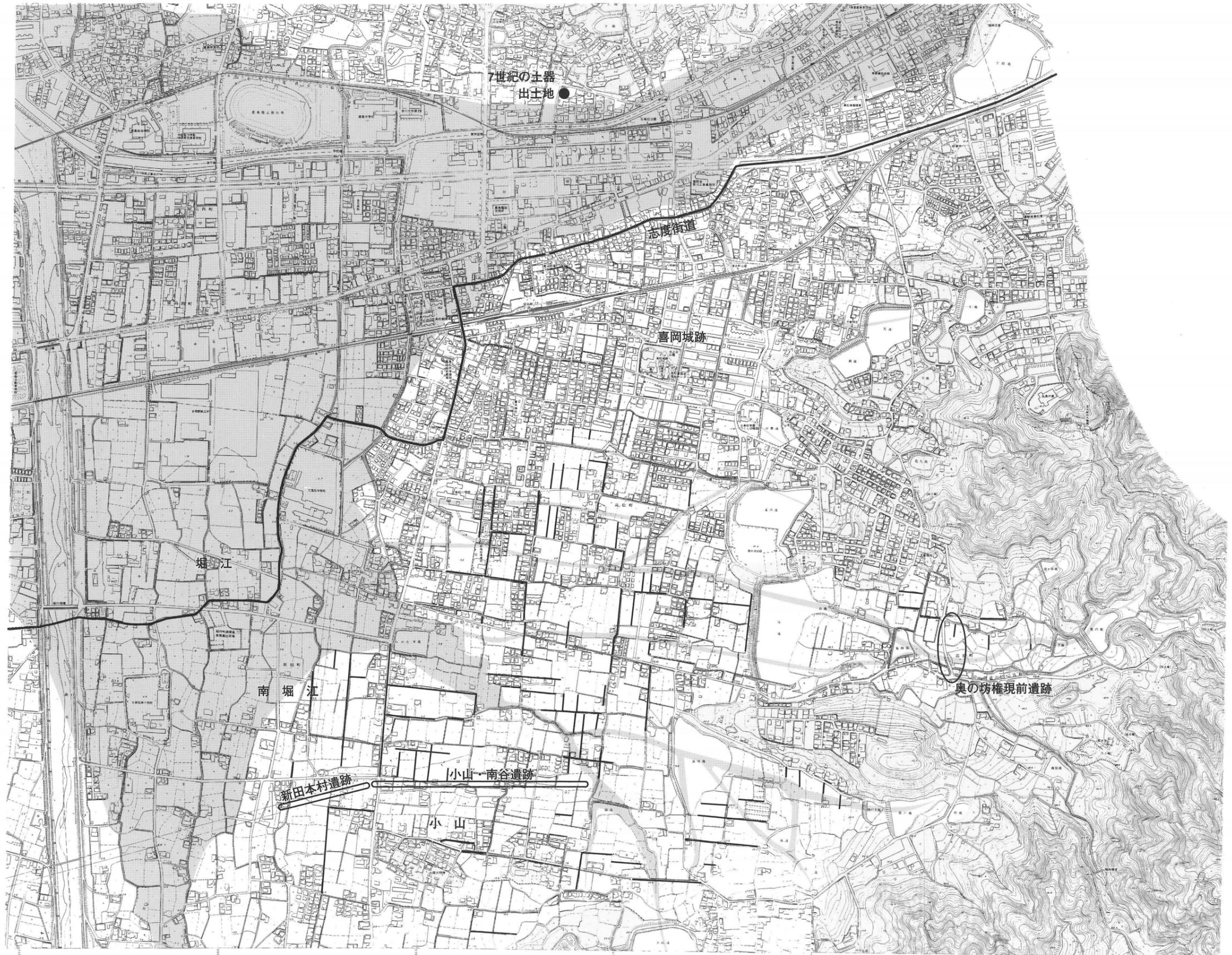
藤好史郎「屋島城と城山城 -古代山城研究の視点-」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要V』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1997

『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小山・南谷遺跡』香川県教育委員会 2000

金田章裕「高松平野における条里地割の形成」『讃岐弘福寺領の調査II』高松市教育委員会 1999



第66図 高松平野の条里プラン



第67図 山田郡北部地形復元案 (S=1/5000)

土器観察表(胎土の石・長・角・雲はそれぞれ石英・長石・角閃石・雲母を表す)

No.	器種	法量(cm)			外 面	内 面	色 調	胎 土	焼成
		口径	底径	器高					
1	土師器 甕	27.6		4.3	ナデ	ヨコハケ	5YR5/6 明赤褐	やや粗 石・長	良
2	土師器 甕	32.0		5.7	粗いタテハケ	ナデ 接合痕	5YR5/6 橙	やや密 石・長	良好
3	土師器 坏		5.0	1.1	マメツ	マメツ	10YR7/6 明黄褐	やや密 石・長	良
4	磁器 碗				青磁釉	青磁釉 輪花文	10YR6/2 オリーブ灰	密 龍泉窯系	良好
5	弥生土器 鉢	12.0		4.4	マメツ	マメツ	5Y4/2 灰オリーブ	やや粗 石・長	不良
6	弥生土器 甕	15.8		4.2	マメツ	マメツ	7.5YR6/6 橙	やや粗 石・長	良好
7	弥生土器 高杯			5.4	マメツ 円孔2個1対3方	マメツ	5YR6/8 橙	やや粗 石・長	良
8	弥生土器 製塩土器		4.0	2.3	指頭圧	ナデ	2.5YR6/4 にぶい橙	密 石・長	良
9	土師器 甕	10.0		3.6	マメツ	マメツ	5YR5/6 明赤褐	やや粗 石・長・角	良
10	須恵器 蓋	12.0		1.4	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y8/1 灰白	やや密 石	良
11	土師器 甕	28.0		2.8			7.5YR7/6 橙	やや密 石・長	良
12	土師器 皿	22.0		2.1	ナデ	ナデ	2.5YR5/6 明赤褐	密 石・長	良
13	土師器 坏	19.6		5.0	マメツ	マメツ	5YR7/8 橙	密 石・長	良
14	土師器 坏	15.0		2.1	マメツ	マメツ	2.5Y8/2 灰白	やや密 石・長	良
15	土師器 坏		10.0	1.2	マメツ	マメツ	10YR6/3 にぶい黄橙	粗 石・長	不良
16	須恵器 坏	16.0	11.4	4.0			2.5Y8/1 灰白	密 石・長	良
17	弥生土器 壺	9.0		4.0	マメツ	マメツ	7.5YR6/8 橙	やや密 石・長	良好
18	弥生土器 甕		4.0	3.3	マメツ	マメツ	2.5Y7/2 灰黄	やや密 石・長	良好
19	弥生土器 製塩土器		4.0	1.9	指頭圧	マメツ	2.5YR6/6 橙	やや密 石・長	良
20	弥生土器 製塩土器		3.2	1.7	指頭圧	マメツ	2.5Y7/3 浅黄	やや密 石・長	良
21	弥生土器 製塩土器		4.0	2.3	マメツ	マメツ	5YR6/4 にぶい橙	やや密 石・長	良好
22	弥生土器 製塩土器		3.4	1.9	マメツ	マメツ	2.5YR6/6 橙	やや密 石・長	良好
23	弥生土器 製塩土器		3.2	3.7	タテヘラケズリ, 指頭圧	マメツ	10YR6/3 にぶい黄橙	やや粗 石・長	良
24	弥生土器 製塩土器		3.4	5.6	タテヘラケズリ, 指頭圧	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	やや密 石・長	良好
25	土師器 甕	26.0		4.3	タテハケ	ヨコハケ, ナデ	10YR5/3 にぶい黄橙	やや密 石・長・角	良好
26	弥生土器 甕		4.4	2.6	ナデ 線刻	指頭圧	7.5YR6/8 橙	やや粗 石・長・雲	良
27	土師器 坏	21.6		5.4	ナデ	ナデ	2.5YR6/6 橙	密 石・長	良
28	磁器 碗			2.5	青磁釉 鑄蓮弁	青磁釉	10YR6/2 オリーブ灰	密 龍泉窯系	良好
29	弥生土器 甕	26.8		4.7	マメツ	マメツ	10YR7/3 にぶい黄橙	やや密 石・長	良
30	弥生土器 直口壺	22.0		7.4	ナデ 押圧突帯1条	ヨコハケ, ナデ	5Y8/2 灰白	やや密 石・長	良
31	弥生土器 高杯		23.0	2.2	マメツ	ヨコヘラケズリ	10YR6/6 明黄褐	やや密 石・長・角	良
32	弥生土器 製塩土器		3.4	2.4	マメツ	板ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	やや密 石・長	良好
33	弥生土器 製塩土器		4.6	2.2	マメツ	マメツ	10YR6/4 にぶい赤橙	やや密 石・長	良
34	弥生土器 壺		11.0	5.8	マメツ	指頭圧	2.5YR5/6 明赤褐	粗 石・長	良
35	弥生土器 甕		5.0	4.0	タテヘラミガキ	タテヘラケズリ後ナデ	2.5Y7/3 灰黄	密 石・長	良好
36	弥生土器 壺		8.0	2.8	マメツ	マメツ	5Y8/2 灰白	やや密 石・長	良
37	弥生土器 甕		9.6	4.6	マメツ	マメツ	5Y8/2 灰白	やや密 石・長	良好
38	須恵器 坏		6.0	2.4	回転ヘラケズリ, 回転ナデ	回転ナデ	N7/0 灰白	密 長	良好

39	土師器 甕	34.0		2.7	マメツ	ヨコハケ	10YR7/2 にぶい黄橙	やや粗 石・長	良
40	土師器 皿	8.2		1.3	ナデ	ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密 石・長	良
41	土師器 皿	6.2	5.0	0.7	ナデ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	密 石・長	良好
42	土師器 皿	7.8	6.8	0.9	マメツ	マメツ	10YR8/2 灰白	やや粗 石・長	良好
43	土師器 皿	8.0	6.2	1.1	マメツ	マメツ	10YR8/2 浅黄橙	やや密 石・長	良
44	土師器 皿		6.4	1.2	マメツ	マメツ	2.5Y5/1 黄灰	やや密 石・長	良好
45	土師器 皿	7.0	3.0	1.7	ナデ	ナデ	2.5Y8/3 淡黄	密 石・長	良
46	土師器 皿		7.0	1.4	マメツ	マメツ	10YR8/4 浅黄橙	やや密 石・長	良
47	土師器 皿		3.6	0.8	マメツ	マメツ	2.5Y8/2 灰白	密 石・長	良
48	土師器 皿		6.0	2.3	マメツ	マメツ	10R6/6 赤橙	やや密 石・長	良
49	土師器 皿		6.0	1.6	マメツ	マメツ	10YR6/2 灰黄褐	やや密 石・長	良
50	須恵器 鉢	26.0		3.7	回転ナデ	回転ナデ	10Y5/1 灰	密 石・長	良好
51	須恵器 鉢	28.6		4.9	回転ナデ	回転ナデ	N7/0 灰白	密 石・長	良好
52	土師器 鉢	31.4		7.9	マメツ 片口壺	マメツ	2.5Y8/3 淡黄	やや密 石・長	良
53	土師器 羽釜	25.2		7.1	マメツ	ヨコハケ	N8/0 灰白	密 石・長	良好
54	土師器 羽釜	25.0		4.8	マメツ 接合痕	マメツ	10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗 石・長	良好
55	土師器 羽釜	36.0		3.3	指頭圧	マメツ	10YR8/4 浅黄橙	やや密 石・長	良
56	土師器 鍋			8.7	ナデ		7.5YR4/4 褐	やや密 石・長	良好
57	土師器 鍋			8.6	ナデ		2.5Y7/4 浅黄	やや密 石・長	良好
58	土師器 鍋			10.0	ナデ		10YR7/2 にぶい黄橙	やや密 石・長	良好
59	土師器 鍋			6.4	ナデ		10YR7/8 黄橙	やや密 石・長	良好
60	土師器 鍋			7.9	ナデ		10YR8/3 浅黄橙	やや密 石・長	良好
61	土師器 鍋			5.9	ナデ		5YR6/6 橙	やや密 石・長	良好
62	土師器 鍋			5.6	ナデ		7.5YR6/8 橙	やや密 石・長	良好
63	土師器 鍋			9.8	ナデ		7.5YR4/4 褐	やや密 石・長	良好
64	土師器 鍋			9.2	ナデ		2.5Y8/3 淡黄	やや密 石・長	良好
65	土師器 鍋			8.1	ナデ		2.5Y7/3 浅黄	やや密 石・長	良好
66	土師器 鍋			6.1	ナデ		2.5Y7/6 明黄褐	やや密 石・長	良好
67	土師器 鍋			8.3	ナデ		2.5Y7/3 浅黄	やや密 石・長	良好
68	土師器 鍋			6.9	ナデ		2.5YR6/6 橙	やや密 石・長	良好
69	弥生土器 甕		6.2	2.5	マメツ	マメツ	2.5Y6/2 灰黄	やや密 石・長	良
70	弥生土器 壺		9.6	2.2	マメツ	指頭圧	5Y8/3 淡黄	やや粗 石・長	良
71	須恵器 壺		6.0	1.4	糸切り, 回転ナデ	回転ナデ	7.5Y6/1 灰	密 石・長	良好
72	須恵器 壺		11.8	3.0	回転ナデ	回転ナデ	N8/0 灰白	密 石・長	良好
73	土師器 甕	22.0		4.8	マメツ	マメツ	7.5YR6/6 橙	やや粗 石・長	良
74	土師器 甕	28.0		4.1	マメツ	マメツ	7.5Y6/4 にぶい橙	やや粗 石・長	良
75	土師器 坏	12.2		3.3	マメツ	マメツ	2.5Y8/3 淡黄	やや密 石・長	良
76	土師器 羽釜	26.0		4.2	ナデ	ナデ 接合痕	10YR7/3 にぶい黄橙	やや密 石・長	良
77	土師器 皿	7.2	5.0	0.9	ナデ	ナデ	10YR8/4 浅黄橙	密 石・長	良
78	土師器 皿		6.4	1.9	ナデ	ナデ	2.5Y8/2 灰白	やや密 石・長	良好

79	瓦 平瓦				凸面ナデ	凹面布目	10Y7/1 灰白	やや密 石・長・雲	良
80	磁器 碗		2.9		青磁釉	青磁釉	5Y6/3 オリーブ黄	密 龍泉窯系	良好
81	磁器 碗		3.1		青磁釉 鑄蓮弁	青磁釉	10BG7/1 明青灰	密 龍泉窯系	良好
82	磁器 碗		3.4		青磁釉 鑄蓮弁	青磁釉	5G6/1 緑灰	密 龍泉窯系	良好
83	磁器 碗		4.0		青磁釉	青磁釉	7.5Y4/2 灰オリーブ	密 龍泉窯系	良好
84	磁器 皿		0.7		青磁釉, 高台無釉	青磁釉	7.5Y7/1 灰白	密 同安窯系	良好
85	磁器 碗		5.0	1.9	青磁釉, 高台無釉	青磁釉	7.5GY7/1 明緑灰	密 龍泉窯系	良好
86	石鍋	19.8		3.5	沈線2条	沈線1条	N7/0 灰白		
87	土師器 鍋			5.3	ナデ		10YR5/2 灰黄褐	やや密 石・長	良好
88	土師器 鍋			6.2	ナデ		10YR6/2 灰黄褐	やや密 石・長	良好
89	土師器 鍋			7.7	ナデ		2.5Y8/2 灰白	やや密 石・長	良好
90	土師器 鍋			7.4	ナデ		10YR7/2 にぶい黄橙	やや密 石・長	良好
91	土師器 鍋			6.5	ナデ		10YR7/1 灰白	やや密 石・長	良好
92	土師器 竈			15.5	ナデ, ハケ 煤付着	ナデ	5Y7/2 灰白	やや粗 石・長	良
93	弥生土器 広口壺	19.2		1.3	ナデ 刻目	ナデ 突帯1条	2.5Y8/1 灰白	やや粗 石・長	良
94	弥生土器 甕	33.6		2.4	マメツ	マメツ	2.5YR8/3 淡黄	密 石・長	良好
95	弥生土器 甕	17.0		3.5	ナデ 凹線1条	指頭ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	やや密 石・長	良
96	弥生土器 甕	13.4		4.9	タテハケ	ヨコヘラケズリ後タテヘラケズリ	2.5Y6/2 灰黄	やや粗 石・長	良好
97	弥生土器 甕	14.0		2.8	ナデ	ナデ 接合痕	10YR7/3 にぶい黄橙	やや密 石・長	良好
98	弥生土器 甕	12.0		2.7	マメツ	マメツ	5YR8/3 淡橙	やや密 石・長	良
99	弥生土器 甕	12.6		4.5	マメツ	タテヘラケズリ	10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗 石・長	良
100	弥生土器 甕	21.0		6.8	タテハケ	板ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗 石・長	良
101	弥生土器 製塩土器		3.8	2.2	マメツ	マメツ	5YR7/3 にぶい橙	密 石・長	良
102	弥生土器 製塩土器		4.0	2.4	マメツ	マメツ	2.5Y8/2 灰白	やや密 石・長	良
103	弥生土器 製塩土器		4.0	2.5	指頭圧	マメツ	2.5YR7/3 淡赤橙	やや密 石・長	良
104	弥生土器 製塩土器		3.0	2.6	マメツ	マメツ	10YR6/4 にぶい赤橙	やや密 石・長	良
105	弥生土器 鉢	24.0		4.4	ナデ 凹線1条	ナデ	2.5Y7/2 灰黄	やや密 石・長	良好
106	弥生土器 鉢	25.0		8.6	タテハケ	指頭圧	10YR8/2 灰白	やや密 石・長	良
107	弥生土器 甕		5.4	3.0	マメツ	マメツ	2.5Y6/2 灰黄	粗 石・長	不良
108	弥生土器 甕		6.0	3.4	タテヘラミガキ	ナデ	2.5Y7/2 灰黄	密 石・長	良好
109	弥生土器 甕		4.8	3.5	マメツ	マメツ	2.5Y7/2 灰黄	やや粗 石・長	良
110	弥生土器 甕		4.6	2.1	マメツ	マメツ	2.5Y7/2 灰黄	やや密 石・長	良
111	弥生土器 甕		7.2	4.5	マメツ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗 石・長	良
112	弥生土器 甕		4.6	3.3	ナデ	指頭圧後板ナデ	7.5YR7/2 明褐灰	やや密 石・長	良好
113	須恵器 蓋	8.4		2.4	回転ナデ	回転ナデ	N8/0 灰白	密 石・長	良好
114	須恵器 坏	9.2	4.3	3.5	回転ナデ	回転ナデ	N6/0 灰	やや密 石・長	良好
115	須恵器 坏	11.4	8.0	4.3	回転ナデ	回転ナデ	N7/0 灰白	密 石・長	良好
116	須恵器 坏	11.8		3.0	回転ナデ	回転ナデ	7.5Y7/1 灰白	密 石・長	良好
117	須恵器 坏	12.0		3.3	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y8/1 灰白	密 石・長	良好
118	須恵器 坏	14.0		2.4	回転ナデ	回転ナデ	N7/0 灰白	密 石・長	良好

119	須恵器 坏	16.0		2.9	回転ナデ	回転ナデ	5Y7/1 灰白	密 石・長	良好
120	須恵器 坏	17.0	11.8	4.5	回転ナデ	回転ナデ	2.5YR6/3 にぶい橙	密 石・長	良好
121	須恵器 高杯			4.3	回転ナデ	回転ナデ	N7/0 灰白	密 石・長	良好
122	須恵器 高杯	13.0		3.2	回転ナデ	回転ナデ	N7/0 灰白	密 石・長	良好
123	須恵器 高杯	12.0		4.0	回転ナデ	回転ナデ	N8/0 灰白	密 石・長	良好
124	須恵器 高杯	12.8	9.4	9.1	回転ナデ	回転ナデ	N7/0 灰白	密 石・長	良好
125	須恵器 高杯		11.0	4.0	回転ナデ	回転ナデ	5Y5/1 灰	密 石・長	不良
126	須恵器 高杯			4.1	回転ナデ	回転ナデ	N6/0 灰	密 石・長	良好
127	須恵器 高杯			3.7	回転ナデ	回転ナデ	5Y5/1 灰	密 石・長	良好
128	須恵器 高杯		8.2	5.8	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y7/2 灰黄	密 石・長	良
129	須恵器 高杯			7.6	回転ナデ	回転ナデ	N6/0 灰	密 石・長	良好
130	土師器 甕	40.0		5.4	タテハケ	ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐	やや粗 石・長	良
131	土師器 甕	35.0		3.2	マメツ	マメツ	2.5Y7/2 灰黄	やや密 石・長	良
132	土師器 甕	35.0		4.0	ナデ	ヨコハケ	10YR6/2 灰黄褐	やや密 石・長	良
133	土師器 甕	32.0		4.3	タテハケ	ヨコハケ	2.5Y7/3 浅黄	やや密 石・長	良好
134	土師器 甕	27.0		6.0	タテハケ後ヨコハケ	ヨコハケ、指頭圧 煤付着	2.5Y7/3 浅黄	密 石・長	良好
135	土師器 甕	15.0		2.4	マメツ	マメツ	2.5YR7/4 淡赤橙	密 石・長	良
136	土師器 甕	19.6		3.3	マメツ	マメツ	2.5Y8/2 灰白	密 石・長	良好
137	土師器 甕	21.6		3.4	ナデ	ナデ	2.5Y7/2 灰黄	やや粗 石・長	良好
138	土師器 甕	22.0		2.1	マメツ	マメツ	10YR7/4 にぶい黄橙	密 石・長	良好
139	土師器 甕	29.0		5.6	粗いタテハケ	粗いヨコハケ	2.5Y7/3 浅黄	密 石・長	良好
140	土師器 皿		5.0	1.6	マメツ	マメツ	2.5Y7/3 浅黄	密 石・長	良
141	土師器 皿		6.2	1.5	マメツ	マメツ	2.5Y8/3 淡黄	密 石・長	良
142	土師器 皿		8.4	1.7	マメツ	マメツ	10YR7/2 にぶい黄橙	密 石・長	良好
143	須恵器 坏		9.0	1.7	回転ナデ	回転ナデ	7.5Y7/1 灰白	密 石・長	良好
144	弥生土器 甕	19.0		4.9	マメツ	マメツ	10YR8/2 灰白	密 石・長	良好
145	弥生土器 甕	22.6		2.7	ナデ 接合痕	ナデ 接合痕	2.5Y7/3 浅黄	密 石・長	良好
146	弥生土器 甕	19.0		5.3	タテハケ	板ナデ	2.5Y5/2 暗灰黄	密 石・長	良好
147	弥生土器 甕	11.0		11.4	タテヘラミガキ 爪形押圧3個	タテヘラケズリ後指頭ナデ	2.5Y6/3 にぶい黄	密 石・長	良好
148	弥生土器 製塩土器		4.0	2.9	マメツ	マメツ	10YR8/3 浅黄橙	密 石・長	良
149	弥生土器 製塩土器		3.8	1.9	マメツ	マメツ	2.5Y8/2 灰白	密 石・長	良
150	弥生土器 鉢	29.0		4.3	マメツ 凹線2条	ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	やや粗 石・長	良
151	弥生土器 鉢	26.0	7.2	12.8	ヨコヘラケズリ後ヨコヘラミガキ、ナデ 凹線2条	タテヘラミガキ	10YR6/4 にぶい黄橙	やや粗 石・長	良好
152	弥生土器 長頸壺			14.9	タテハケ ハケ原体による刺突文	ヨコヘラケズリ後指頭圧	2.5YR6/3 にぶい黄	やや密 石・長	良
153	弥生土器 高杯	15.2		4.3	マメツ	マメツ	5YR6/6 橙	やや粗 石・長	良
154	弥生土器 壺		6.8	4.3	タテハケ、ナデ	タテヘラケズリ	10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗 石・長	良好
155	弥生土器 甕		4.6	3.7	マメツ	指頭圧	7.5YR4/4 褐	やや密 石・長	良好
156	弥生土器 甕		8.0	5.3	マメツ	指頭ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	やや粗 石・長	良好
157	弥生土器 甕		5.8	3.1	タテヘラミガキ	タテヘラケズリ	10YR7/3 にぶい黄橙	密 石・長	良好
158	弥生土器 甕		5.0	3.8	タテヘラミガキ	マメツ	10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗 石・長	良

159	弥生土器 紡錘車			3.9	マメツ 土器転用, 焼成後の穿孔	マメツ	10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗 石・長	良
160	弥生土器 紡錘車			4.6	ナデ 土器転用, 焼成後の穿孔	ハケ	2.5Y7/2 灰黄	密 石・長	良好
161	須恵器 高杯		9.0	5.2	回転ナデ	回転ナデ	N5/0 灰	密 石・長	良好
162	須恵器 高杯	16.0		3.5	回転ナデ	回転ナデ	10YR8/1 灰白	密 石・長	良
163	土師器 甕	30.8		4.9	タテハケ	板ナデ	2.5Y7/3 浅黄	やや密 石・長	良好
164	土師器 甕	24.0		5.1	タテハケ	板ナデ	2.5Y7/2 灰黄	やや密 石・長	良好
165	土師器 甕	28.0		3.2	マメツ	マメツ	10YR7/2 にぶい黄橙	密 石・長	良
166	土師器 甕	28.0		7.8	タテハケ, 指頭圧	板ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗 石・長	良
167	土師器 甕	28.8		8.0	タテハケ, 指頭圧	板ナデ	5YR8/3 淡橙	粗 石・長	良
168	土師器 甕	31.4		25.6	タテハケ	指頭圧後ヨコハケ	10YR8/2 灰白	やや密 石・長	良好
169	弥生土器 甕	17.0		2.7	粗いタテハケ	マメツ	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 石・長	良
170	弥生土器 甕	17.2		3.0	マメツ	ヨコヘラケズリ	5YR6/4 にぶい橙	密 石・長	良
171	弥生土器 甕	12.4		7.5	タテハケ	指頭圧	10YR6/4 にぶい黄橙	やや粗 石・長	良
172	弥生土器 甕	16.0		7.5	タテハケ	指頭圧	10YR5/3 にぶい黄褐	密 石・長	良好
173	弥生土器 鉢	43.0		4.5	ナデ	ヨコヘラケズリ後ヨコヘラミガキ	7.5YR6/3 にぶい褐	密 石・長	良好
174	弥生土器 鉢	30.0		2.6	マメツ	ナデ	7.5YR5/6 明褐	密 石・長	良
175	弥生土器 甕	26.0		3.9	ナデ	ナデ	10YR5/3 にぶい褐	密 石・長	良好
176	弥生土器 製塩土器		4.4	1.9	指頭圧痕	ナデ 線刻	10YR6/3 にぶい黄橙	密 石・長	良好
177	弥生土器 製塩土器		3.6	3.8	タテヘラケズリ	マメツ	5YR5/6 明赤褐	粗 石・長	良
178	弥生土器 製塩土器		3.8	3.5	タテヘラケズリ	ナデ, 指頭圧	7.5YR6/6 橙	密 石・長	良
179	弥生土器 甕	18.0		3.9	粗いタテハケ	板ナデ 接合痕	5YR6/6 橙	密 石・長・雲	良好
180	須恵器 甕	20.0		4.3	回転ナデ 線刻	回転ナデ	5Y7/1 灰白	密 石・長	良好
181	須恵器 坏		7.8	1.3	回転ナデ	回転ナデ	N4/0 灰	密 石・長	良好
182	須恵器 坏		10.0	1.4	回転ナデ	回転ナデ	N6/0 灰	密 石・長	良好
183	須恵器 坏		11.0	2.7	回転ナデ	回転ナデ	N5/0 灰	密 石・長	良好
184	須恵器 壺		7.1	3.1	回転ナデ	回転ナデ	N6/0 灰	密 石・長	良好
185	須恵器 壺		8.0	4.1	回転ナデ	回転ナデ	N4/0 灰	密 石・長	良好
186	須恵器 高杯		10.0	6.2	回転ナデ 沈線1条	回転ナデ	N7/0 灰白	密 石・長	良好
187	磁器 碗	15.7		4.1	青磁釉	青磁釉 沈線2条	2.5Y6/3 にぶい黄	密 龍泉窯系	良好
188	土師器 坏		7.6	2.1	ナデ ヘラ切り	ナデ	2.5Y8/2 灰白	密 石・長	良
189	土師器 坏		6.4	1.7	ナデ ヘラ切り	ナデ	5Y8/1 灰白	密 石・長	良
190	土師器 坏	10.8	8.0	2.8	ナデ ヘラ切り	ナデ	7.5YR7/6 橙	密 石・長	良
191	土師器 皿	10.6	8.8	2.1	ナデ ヘラ切り	ナデ	10YR7/6 明黄褐	密 石・長	良
192	弥生土器 高杯	19.8		7.0	ナデ 凹線2条	タテヘラミガキ, ヨコヘラケズリ	7.5YR6/6 橙	やや密 石・長	良
193	弥生土器 高杯		20.0	3.7	タテハケ 凹線2条, 円形スカシ4方	ナデ	7.5YR6/6 橙	やや密 石・長	良
194	弥生土器 高杯	16.0		5.3	タテヘラミガキ	タテヘラミガキ	7.5YR5/4 にぶい褐	密 石・長・角	良好
195	弥生土器 高杯	12.0		4.3	タテヘラケズリ 凹線2条	板ナデ	10YR5/4 にぶい黄褐	やや密 石・長	良好
196	弥生土器 高杯	13.0		2.5	タテヘラケズリ 凹線1条	板ナデ	7.5YR6/6 橙	密 石・長	良好
197	弥生土器 製塩土器	11.1		7.0	タテヘラケズリ	ヨコハケ	7.5YR6/6 橙	やや粗 石・長	良好
198	弥生土器 製塩土器	10.0		4.3	タテハケ	ヨコハケ	10YR4/3 にぶい黄褐	密 石・長	良

199	弥生土器 甕		8.0	1.9	ナデ	ナデ	7.5YR7/3 褐	粗 石・長	良
200	弥生土器 甕		3.0	2.2	マメツ	指頭圧	10YR5/4 にぶい黄褐	やや密 石・長	良好
201	弥生土器 甕	15.6		5.5	マメツ	マメツ	10YR4/2 灰黄褐	粗 石・長	不良
202	弥生土器 甕	18.6		5.0	マメツ	マメツ	2.5Y4/1 黄灰	やや粗 石・長	良
203	弥生土器 高杯	24.4		3.1	ナデ	ナデ	5YR6/4 にぶい橙	やや密 石・長	良好
204	弥生土器 高杯			3.8	マメツ 沈線3条	マメツ	7.5YR6/3 にぶい褐	やや粗 石・長	良
205	弥生土器 製塩土器		4.2	2.4	指頭圧	指頭圧	5YR5/6 明赤褐	やや密 石・長	良
206	弥生土器 製塩土器		3.0	2.7	マメツ	マメツ	5YR6/6 橙	やや粗 石・長	良
207	弥生土器 製塩土器		5.4	2.2	ナデ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	やや密 石・長	良好
208	弥生土器 製塩土器			2.4	タテハラケズリ	タテハケ	7.5YR4/1 褐灰	やや密 石・長	良
209	弥生土器 製塩土器			1.3	マメツ	マメツ	5YR6/6 橙	やや粗 石・長	良
210	弥生土器 壺		7.4	1.9	ミガキ	指頭圧	7.5YR4/3 褐	やや密 石・長	良
211	弥生土器 壺		8.8	1.8	ナデ	ヨコハラケズリ	10YR5/4 にぶい黄褐	やや密 石・長・角	良好
212	弥生土器 壺		7.6	2.5	タテハラケズリ後タテハケ	指頭圧	10YR5/3 にぶい黄褐	やや密 石・長	良好
213	弥生土器 壺		7.0	0.9	指頭圧	マメツ	2.5YR4/3 にぶい赤褐	やや密 石・長	良
214	弥生土器 甕		6.0	7.0	ナデ	タテハラケズリ	7.5YR6/6 橙	やや粗 石・長	良好
215	弥生土器 甕	14.0		1.5	ナデ	ナデ	7.5YR4/2 灰褐	やや密 石・長	良
216	弥生土器 甕	14.8		4.9	ナデ	ナデ	2.5Y5/1 黄灰	やや密 石・長	良好
217	弥生土器 甕	17.6		1.5	マメツ	マメツ	7.5YR5/4 にぶい褐	密 石・長	良
218	弥生土器 甕	16.0		4.2	タテハケ	ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	密 石・長	良好
219	弥生土器 甕	16.6		5.0	マメツ	マメツ	7.5YR4/2 灰褐	粗 石・長	良
220	弥生土器 広口壺	11.6		3.8	タタキ 凹線1条	ヨコハラケズリ	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 石・長	良好
221	弥生土器 広口壺	11.6		3.9	タタキ 凹線1条	ヨコハラケズリ	7.5YR6/3 にぶい褐	やや密 石・長	良好
222	弥生土器 広口壺	14.2		4.2	ナデ 凹線2条	ナデ 接合痕	7.5YR6/4 にぶい橙	密 石・長	良好
223	弥生土器 高杯	28.0		3.6	マメツ 接合面に沈線1条	マメツ	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 石・長	良
224	弥生土器 高杯	24.0		3.3	ナデ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	密 石・長	良
225	弥生土器 甕		6.0	2.6	タテハケ	タテハラケズリ	10YR6/2 灰黄褐	やや密 石・長	良好
226	弥生土器 甕		5.8	2.0	ナデ	タテハラケズリ	10YR5/3 にぶい黄褐	密 石・長	良好
227	弥生土器 製塩土器		4.8	4.0	タテハラケズリ, 指頭圧	指頭圧, ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	密 石・長	良好
228	弥生土器 製塩土器		3.6	4.5	タテハラケズリ, 指頭圧	指頭圧, ナデ	5YR6/4 にぶい橙	やや密 石・長	良好
229	弥生土器 製塩土器		3.0	4.1	タテハラケズリ	ナデ	5YR6/6 橙	やや密 石・長	良好
230	弥生土器 製塩土器		3.6	2.2	指頭圧	ナデ	2.5YR6/6 橙	やや密 石・長	良
231	弥生土器 製塩土器		3.6	1.6	指頭圧	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	密 石・長	良好
232	弥生土器 製塩土器		3.8	1.8	指頭圧	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	密 石・長	良好
233	弥生土器 甕	15.0		1.7	ナデ 凹線1条	指頭圧, ヨコハラケズリ	7.5YR5/6 明褐	やや密 石・長	良好
234	弥生土器 甕	15.0		2.7	タテハケ 凹線1条	マメツ	2.5YR5/6 明赤褐	やや密 石・長	良
235	弥生土器 甕	18.4		2.3	粗いタテハケ	ナデ	5YR6/6 橙	密 石・長	良好
236	弥生土器 甕	16.0		2.7	マメツ	マメツ	2.5YR5/6 明赤褐	やや粗 石・長	良
237	弥生土器 甕	13.8		1.7	マメツ	マメツ	10YR5/4 にぶい黄褐	密 石・長	良好
238	弥生土器 甕	13.2		3.8	マメツ	板ナデ	2.5YR6/6 橙	やや密 石・長	良

239	弥生土器 甕	12.0		4.9	マメツ	マメツ	2.5Y5/2 暗灰黄	やや粗 石・長	良
240	弥生土器 甕	10.2		5.4	マメツ	マメツ	5YR6/6 橙	やや密 石・長	良好
241	弥生土器 甕	13.0		2.9	マメツ	マメツ	7.5YR5/4 にぶい褐	やや密 石・長	良
242	弥生土器 甕	14.0		4.2	タテハケ	ヨコハケ, 指頭圧	10R5/6 赤	やや密 石・長	良
243	弥生土器 甕	14.0		3.3	タテハケ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 石・長	良好
244	弥生土器 甕	17.0		2.9	指頭圧	指頭圧	5YR5/3 にぶい赤褐	やや密 石・長	良
245	弥生土器 甕	14.0		4.4	ヨコハケ	ヨコヘラケズリ後指頭圧	5YR5/2 灰褐	やや粗 石・長	良
246	弥生土器 甕	15.4		6.2	タタキ後タテハケ	ヨコヘラケズリ	7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗 石・長	良
247	弥生土器 甕	15.2		8.9	タテハケ	タテヘラケズリ後指頭圧	10YR6/4 にぶい黄橙	やや粗 石・長	良
248	弥生土器 甕	17.6		14.0	タテハケ後タテヘラミガキ	タテヘラケズリ後指頭圧	10YR6/4 にぶい黄橙	やや粗 石・長	良好
249	弥生土器 甕			10.5	ヨコハケ後タテハケ	タテヘラケズリ	7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗 石・長	良好
250	弥生土器 甕	15.6		2.6	マメツ	マメツ	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 石・長	良
251	弥生土器 甕	15.6		9.1	ヨコハケ後タテハケ	タテヘラケズリ後指頭圧	10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗 石・長	良好
252	弥生土器 甕	15.0		7.7	タテハケ	タテヘラケズリ後ヨコヘラケズリ	2.5YR6/8 橙	やや粗 石・長	良好
253	弥生土器 甕	14.4		6.9	マメツ	指頭圧	5YR6/6 橙	やや粗 石・長	良好
254	弥生土器 甕	11.8		8.5	マメツ	指頭圧	2.5YR5/6 明赤褐	やや粗 石・長	良
255	弥生土器 甕	12.6		7.7	マメツ	タテヘラケズリ	7.5YR7/6 橙	やや粗 石・長	良
256	弥生土器 甕	20.4		7.6	タテハケ	タテヘラケズリ後指頭圧	2.5YR4/4 にぶい赤褐	やや粗 石・長	良
257	弥生土器 長頸壺	12.0		1.0	マメツ	マメツ	5YR5/6 明赤褐	やや密 石・長	良
258	弥生土器 長頸壺	12.0		0.9	マメツ	マメツ	5YR6/8 橙	やや密 石・長	良
259	弥生土器 長頸壺	9.8		4.3	ナデ	ナデ	5YR5/6 明赤褐	やや密 石・長	良
260	弥生土器 長頸壺			9.2	タテハケ ハケ原体による刺突文	ナデ, 指頭圧	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 石・長	良好
261	弥生土器 鉢	11.0		4.0	マメツ	マメツ	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 石・長	良
262	弥生土器 鉢	24.0		2.7	ナデ	ナデ	5YR5/6 明赤褐	やや密 石・長	良好
263	弥生土器 鉢	35.4		5.6	ヨコハケ後タテハケ	指頭圧, ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	やや密 石・長	良好
264	弥生土器 鉢	35.0		3.2	ヨコハケ後タテハケ	ナデ	5YR5/6 橙	やや密 石・長	良好
265	弥生土器 鉢	28.2		3.8	ヨコハケ	ナデ	10YR6/2 灰黄褐	やや密 石・長	良
266	弥生土器 鉢	36.0		3.5	ヨコハケ	板ナデ	2.5YR5/6 明赤褐	やや密 石・長	良好
267	弥生土器 鉢	30.0		4.0	ヨコハケ	タテハケ後タテヘラミガキ	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 石・長	良好
268	弥生土器 鉢	29.0		4.0	タテヘラケズリ後タテハケ 焼成時の剥離痕	タテハケ後タテヘラミガキ	5YR5/4 にぶい赤褐	やや密 石・長	良好
269	弥生土器 高杯	17.6		3.0	ナデ	ナデ	5YR5/6 明赤褐	やや粗 石・長	良好
270	弥生土器 高杯	26.0		4.5	指頭ナデ	ナデ	2.5YR5/6 明赤褐	やや粗 石・長	良好
271	弥生土器 高杯	26.0		6.3	指頭圧	マメツ	5YR6/4 にぶい橙	やや粗 石・長	良好
272	弥生土器 高杯	24.6		5.6	タテヘラミガキ	タテヘラミガキ	2.5YR5/6 明赤褐	やや粗 石・長	良好
273	弥生土器 高杯	25.4		4.9	マメツ	マメツ	5YR6/4 にぶい橙	やや粗 石・長	良好
274	弥生土器 高杯	21.6		3.3	マメツ	マメツ	5YR5/6 明赤褐	やや粗 石・長	良好
275	弥生土器 高杯	26.0		2.9	ヨコヘラミガキ	ナデ後タテヘラミガキ	5YR6/6 橙	やや密 石・長	良好
276	弥生土器 高杯			4.4	マメツ	マメツ	7.5YR6/3 にぶい褐	粗 石・長	良
277	弥生土器 高杯			4.1	ナデ 沈線1条	タテヘラミガキ後ヨコヘラミガキ, ヨコヘラケズリ	5YR6/6 橙	やや粗 石・長	良
278	弥生土器 高杯			3.1	マメツ	マメツ	5YR4/4 にぶい赤褐	やや粗 石・長	良

279	弥生土器 高杯		9.0	2.9	ナデ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	やや密 石・長	良
280	弥生土器 高杯		22.4	5.8	マメツ 沈線3条, 凹線2条, 円形スカシ6方	ナデ	7.5YR6/6 橙	粗 石・長	良
281	弥生土器 高杯		18.4	3.3	ナデ 凹線2条	ヨコヘラケズリ	7.5YR4/2 灰褐	やや密 石・長	良
282	弥生土器 高杯		24.0	8.3	ナデ 円形スカシ2個1対	ヨコヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐	やや粗 石・長	良
283	弥生土器 鉢	11.9	3.1	8.5	タテヘラミガキ	タテヘラミガキ, 指頭圧	10YR5/4 にぶい黄褐	密 石・長	良好
284	弥生土器 鉢	11.4	3.0	5.6	タテヘラケズリ後ヨコヘラケズリ	指頭圧, ナデ後ヨコハケ	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 石・長	良
285	弥生土器 鉢	43.8		7.4	マメツ	ヨコヘラケズリ後タテヘラミガキ後ヨコヘラミガキ	7.5YR5/4 にぶい褐	やや密 石・長	良好
286	弥生土器 鉢	20.0		2.8	ナデ	ナデ	2.5YR5/6 明赤橙	やや密 石・長	良好
287	弥生土器 鉢	17.4		3.9	ヨコハケ	ヨコハケ	10YR6/3 にぶい黄橙	やや密 石・長	良
288	弥生土器 鉢	24.0		4.4	ヨコハケ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 石・長	良
289	弥生土器 鉢	29.2		5.9	ヨコハケ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	密 石・長	良好
290	弥生土器 鉢	28.0		10.1	ヨコハケ	ナデ	2.5YR6/4 にぶい赤褐	やや密 石・長	良
291	弥生土器 製塩土器	7.8		3.6	タテヘラケズリ	ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	やや粗 石・長	良
292	弥生土器 製塩土器	12.0		3.4	マメツ	マメツ	5YR6/6 橙	やや粗 石・長	良
293	弥生土器 製塩土器	9.4		4.3	タテヘラケズリ	ヨコハケ	5YR6/6 橙	やや粗 石・長	良
294	弥生土器 製塩土器	11.4		7.5	タテヘラケズリ	板ナデ後指頭ナデ	5YR6/4 にぶい橙	やや粗 石・長	良
295	弥生土器 製塩土器	10.4		6.8	タテヘラケズリ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗 石・長	良
296	弥生土器 製塩土器	10.8		3.7	タテヘラケズリ	ナデ	5YR6/4 にぶい橙	やや粗 石・長	良
297	弥生土器 製塩土器	10.4		4.6	タテヘラケズリ	マメツ	5YR5/4 にぶい赤褐	やや粗 石・長	良
298	弥生土器 製塩土器	8.0		6.0	タテヘラケズリ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 石・長	良
299	弥生土器 製塩土器	9.4		6.3	タテヘラケズリ	マメツ	7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗 石・長	良
300	弥生土器 製塩土器	10.0		6.2	タテヘラケズリ	ヨコハケ	7.5YR6/6 橙	やや粗 石・長	良
301	弥生土器 製塩土器		4.8	2.4	指頭圧	ナデ	10YR5/2 灰黄褐	やや密 石・長	良好
302	弥生土器 製塩土器		3.6	2.2	マメツ	マメツ	7.5YR6/8 橙	やや粗 石・長	良
303	弥生土器 製塩土器		4.0	2.3	マメツ	マメツ	7.5YR6/6 橙	やや粗 石・長	良
304	弥生土器 製塩土器		4.1	4.0	タテヘラケズリ, 指頭圧	ナデ	5YR6/4 にぶい橙	やや粗 石・長	良
305	弥生土器 製塩土器		3.4	4.4	タテヘラケズリ, 指頭圧	ナデ	5YR6/4 にぶい橙	やや粗 石・長	良
306	弥生土器 製塩土器		3.8	4.5	タテヘラケズリ, 指頭圧	ナデ, 指頭圧	5YR5/4 にぶい赤褐	やや粗 石・長	良
307	弥生土器 製塩土器		3.6	4.8	タテヘラケズリ	ナデ	7.5YR7/6 橙	やや粗 石・長	良
308	弥生土器 製塩土器		3.8	5.0	タテヘラケズリ, 指頭圧	ナデ, 指頭圧	7.5YR6/6 橙	やや粗 石・長	良
309	弥生土器 製塩土器		3.6	4.6	タテヘラケズリ, 指頭圧	ナデ, 指頭圧	7.5YR6/6 橙	やや粗 石・長	良
310	弥生土器 製塩土器		3.4	4.2	タテヘラケズリ, 指頭圧	タテハケ	7.5YR6/3 にぶい褐	やや粗 石・長	良
311	弥生土器 製塩土器			4.6	タテヘラケズリ	マメツ	10YR4/3 にぶい黄褐	やや粗 石・長	良
312	弥生土器 製塩土器		2.8	5.4	タテヘラケズリ	マメツ	10YR4/3 にぶい黄褐	やや粗 石・長	良
313	弥生土器 製塩土器		3.6	5.3	タテヘラケズリ, 指頭圧	指頭ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	やや粗 石・長	良
314	弥生土器 製塩土器		4.2	5.5	タテヘラケズリ, 指頭圧	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	やや密 石・長	良
315	弥生土器 製塩土器		3.6	5.4	タテヘラケズリ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗 石・長	良
316	弥生土器 製塩土器		3.8	5.7	タテヘラケズリ, 指頭圧	指頭ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗 石・長	良
317	弥生土器 製塩土器		4.0	5.4	タテヘラケズリ, 指頭圧	マメツ	7.5YR4/4 褐	やや粗 石・長	良
318	弥生土器 製塩土器		3.8	5.0	タテヘラケズリ, 指頭圧	板ナデ, 指頭圧	7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗 石・長	良

319	弥生土器 製塩土器		5.7	タテヘラケズリ	ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐	やや粗 石・長	良	
320	弥生土器 製塩土器	3.6	6.4	タテヘラケズリ, 指頭圧	ナデ	5YR6/3 にぶい橙	やや粗 石・長	良	
321	弥生土器 製塩土器	4.6	6.5	タテヘラケズリ, 指頭圧	指頭圧	10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗 石・長	良	
322	弥生土器 製塩土器	3.7	6.2	タテヘラケズリ	ナデ	7.5YR6/8 橙	やや粗 石・長	良	
323	弥生土器 製塩土器	4.0	7.0	タテヘラケズリ, 指頭圧	ナデ	5YR6/4 にぶい橙	やや粗 石・長	良	
324	弥生土器 製塩土器	3.8	6.2	タテヘラケズリ, 指頭圧	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗 石・長	良	
325	弥生土器 製塩土器	3.4	7.1	タテヘラケズリ, 指頭圧	マメツ	5YR6/6 橙	やや粗 石・長	良	
326	弥生土器 製塩土器	4.8	5.9	タテヘラケズリ, 指頭圧	ナデ	10YR5/4 にぶい黄褐	やや粗 石・長	良	
327	弥生土器 製塩土器	3.6	10.1	タテヘラケズリ, 指頭圧	ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐	やや粗 石・長	良	
328	弥生土器 製塩土器	4.1	8.5	タテヘラケズリ, 指頭圧	指頭圧	7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗 石・長	良	
329	弥生土器 製塩土器	3.8	14.8	タテヘラケズリ, 指頭圧	ナデ	5YR6/6 橙	やや粗 石・長	良	
330	弥生土器 製塩土器	3.8	7.9	タテヘラケズリ, 指頭圧	タテハケ	7.5YR5/2 灰褐	やや密 石・長	良	
331	弥生土器 製塩土器	3.8	10.0	タテヘラケズリ, 指頭圧	指頭ナデ	5YR5/6 明赤褐	やや粗 石・長	良	
332	弥生土器 製塩土器	8.0	3.4	11.7	タテヘラケズリ	ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐	やや粗 石・長	良
333	弥生土器 製塩土器	5.5	3.9	指頭圧	ナデ	5YR7/6 橙	やや密 石・長	良好	
334	弥生土器 製塩土器	5.0	5.2	ナデ, 指頭圧	ナデ	10YR4/1 褐灰	やや粗 石・長	良	
335	弥生土器 製塩土器	10.2	5.6	6.8	タテヘラケズリ, 指頭圧	タテハケ, ヨコヘラケズリ	7.5YR5/4 にぶい褐	やや密 石・長	良好
336	弥生土器 製塩土器	13.2	5.2	9.0	タテヘラケズリ, 指頭圧	指頭圧	5YR6/6 橙	やや粗 石・長	良
337	弥生土器 製塩土器	10.0	4.6	8.1	ナデ, 指頭圧	指頭ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	やや密 石・長	良好
338	弥生土器 製塩土器		3.2	タテハケ後指頭圧	指頭圧	5YR7/6 橙	やや粗 石・長	良	
339	弥生土器 製塩土器	10.4	4.5	タテヘラケズリ後タテハケ	ヨコハケ後指頭圧	5YR7/6 橙	やや密 石・長	良好	
340	弥生土器 甕	3.2	1.8	ナデ	ナデ	7.5YR6/3 にぶい橙	やや密 石・長	良好	
341	弥生土器 甕	4.8	3.1	タテハケ	タテヘラケズリ	2.5Y5/1 黄灰	やや密 石・長	良好	
342	弥生土器 甕	6.0	2.9	タテハケ後タテヘラミガキ	タテヘラケズリ	5YR5/3 にぶい赤褐	やや密 石・長	良好	
343	弥生土器 甕	4.8	2.1	ナデ, ハケ	タテヘラケズリ	7.5YR6/6 橙	やや密 石・長	良好	
344	弥生土器 甕	5.0	1.4	ヨコハケ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	密 石・長	良好	
345	弥生土器 甕	5.0	2.4	タテハケ	タテヘラケズリ後指頭圧	5YR5/4 にぶい赤褐	やや粗 石・長	良好	
346	弥生土器 甕	4.4	1.6	タテヘラケズリ, ハケ	タテハケ	5YR6/6 橙	密 石・長	良好	
347	弥生土器 甕	5.0	4.4	タテハケ 焼成前の穿孔	タテヘラケズリ	7.5YR4/3 褐	密 石・長	良好	
348	弥生土器 甕	4.6	5.5	マメツ	マメツ	7.5YR4/6 褐	やや粗 石・長	良	
349	弥生土器 甕	5.8	2.4	マメツ	タテヘラケズリ	10YR4/2 灰黄褐	やや粗 石・長	良好	
350	弥生土器 甕	5.8	1.7	マメツ	マメツ	10YR3/1 黒褐	やや密 石・長	良好	
351	弥生土器 甕	5.0	2.3	タテヘラミガキ	マメツ	7.5YR4/2 灰褐	やや粗 石・長	良	
352	弥生土器 甕	4.6	3.3	マメツ	指頭圧	10R5/6 赤	やや粗 石・長	良	
353	弥生土器 甕	5.0	3.2	マメツ	マメツ	5YR5/6 明赤褐	粗 石・長	良	
354	弥生土器 甕	6.2	2.5	タテヘラケズリ	板ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗 石・長	良好	
355	弥生土器 甕	4.6	3.9	タテハケ	タテヘラケズリ	7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗 石・長	良好	
356	弥生土器 甕	6.0	4.8	タテヘラミガキ	タテヘラケズリ, 指頭圧	7.5YR4/1 褐灰	やや密 石・長	良好	
357	弥生土器 甕	4.5	5.3	マメツ	タテハケ	5YR6/4 にぶい橙	やや密 石・長	良好	
358	弥生土器 甕	4.2	10.8	タテハケ	タテヘラケズリ後指頭圧	5YR4/3 にぶい赤褐	やや密 石・長	良好	

359	弥生土器 甕		8.0	7.4	タテハケ	ヨコヘラケズリ後指頭圧	5YR6/6 橙	やや粗 石・長	良好
360	弥生土器 甕		6.0	6.2	板ナデ	タテヘラケズリ	10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗 石・長	良好
361	弥生土器 甕		5.2	10.9	タテハケ	タテヘラケズリ後指頭圧	5YR6/4 にぶい橙	やや粗 石・長	良
362	弥生土器 壺		7.2	3.1	指頭圧	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗 石・長	良好
363	弥生土器 壺		9.0	1.8	タテヘラケズリ	ナデ	5YR5/6 明赤褐	やや密 石・長	良好
364	弥生土器 壺		8.0	1.9	指頭圧	指頭圧	5YR5/6 明赤褐	やや粗 石・長	良好
365	弥生土器 壺		6.7	2.9	タテハケ 焼成時の剥離痕	タテヘラケズリ	5YR5/8 明赤褐	やや粗 石・長	良好
366	弥生土器 甕	9.2		3.9	マメツ	マメツ	7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗 石・長	良
367	弥生土器 甕	14.0		2.5	タテハケ 接合痕	ナデ 接合痕	5YR4/6 赤褐	やや密 石・長・角・雲	良好
368	弥生土器 甕	13.6		3.9	マメツ	マメツ	7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗 石・長	良
369	弥生土器 甕	14.8		3.3	マメツ	ヨコヘラケズリ	2.5Y4/4 にぶい赤褐	やや粗 石・長	良
370	弥生土器 甕	17.6		1.8	粗いタテハケ	ナデ	5YR6/4 にぶい橙	やや密 石・長	良好
371	弥生土器 甕	20.0		2.9	粗いタテハケ	マメツ	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 石・長	良
372	弥生土器 甕	23.6		5.3	粗いタテハケ	タテヘラケズリ後ヨコヘラケズリ	5YR6/6 橙	やや密 石・長	良好
373	弥生土器 甕	14.0		5.6	タテハケ 楕円形の粘土板貼付2	ヨコヘラケズリ	7.5YR5/4 にぶい褐	やや密 石・長	良好
374	弥生土器 甕	15.6		7.9	タテハケ	タテヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐	やや密 石・長・雲	良好
375	弥生土器 甕	15.0		4.6	マメツ	マメツ	7.5YR5/6 明褐	やや密 石・長	良
376	弥生土器 高杯	20.0		4.2	マメツ	マメツ	7.5YR7/6 橙	やや粗 石・長	良
377	弥生土器 高杯	23.0		3.5	マメツ 沈線1条	マメツ	7.5YR5/4 にぶい褐	密 石・長	良好
378	弥生土器 高杯		22.0	4.4	タテハケ	マメツ	10R5/6 赤	やや粗 石・長	良
379	弥生土器 製塩土器	11.0		2.8	タテヘラケズリ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 石・長	良
380	弥生土器 製塩土器	12.0		5.8	タテヘラケズリ	板ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	やや密 石・長	良好
381	弥生土器 製塩土器	10.0		3.5	タテヘラケズリ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 石・長	良
382	弥生土器 製塩土器		3.0	6.6	タテヘラケズリ, 指頭圧	指頭圧	10YR6/3 にぶい黄橙	やや密 石・長	良好
383	弥生土器 製塩土器		3.0	2.4	マメツ	マメツ	5YR6/6 橙	やや密 石・長	良
384	弥生土器 製塩土器		3.4	2.5	タテヘラケズリ 接合痕	ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐	やや密 石・長	良好
385	弥生土器 製塩土器		3.8	4.0	タテヘラケズリ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	やや密 石・長	良好
386	弥生土器 製塩土器		3.9	6.1	タテヘラケズリ, 指頭圧	指頭ナデ	5YR5/8 明赤褐	やや粗 石・長	良
387	弥生土器 製塩土器		3.2	6.0	タテヘラケズリ	マメツ	7.5YR6/6 橙	やや粗 石・長	良
388	弥生土器 製塩土器		4.4	8.6	タテヘラケズリ, 指頭圧	指頭圧	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 石・長	良好
389	弥生土器 甕		5.6	3.0	タテハケ	タテヘラケズリ	7.5YR5/3 にぶい褐	やや密 石・長	良
390	弥生土器 甕		5.4	2.7	タテヘラミガキ	タテヘラケズリ	5YR4/6 赤褐	やや密 石・長	良
391	弥生土器 甕		2.0	3.0	ナデ	指頭圧	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密 石・長	良好
392	弥生土器 広口壺	10.3	7.0	18.1	ナデ後タテヘラミガキ 接合痕	指頭ナデ 接合痕	5YR5/3 にぶい赤褐	やや粗 石・長	良好
393	弥生土器 甕	20.0	3.5		ナデ	ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	やや密 石・長	良好
394	弥生土器 甕		10.0	7.5	タテヘラミガキ	指頭圧	5YR4/4 にぶい赤褐	粗 石・長	良
395	弥生土器 甕		8.6	4.8	マメツ	指頭圧	2.5YR6/6 橙	やや密 石・長	良好
396	弥生土器 高杯			7.5	指頭圧後板ナデ	ナデ, ヨコハケ	7.5YR6/6 橙	やや密 石・長	良好
397	須恵器 坏蓋			1.0	回転ナデ	回転ナデ	N6/0 灰	密 石・長	良好
398	須恵器 坏蓋	14.0		1.3	回転ナデ	回転ナデ	N6/0 灰	密 石・長	良好

399	須恵器 坏	13.5	9.5	3.3	回転ナデ, ヘラ切り 火襷	回転ナデ 火襷	N6/0 灰	密 石・長	良好
400	須恵器 平瓶		8.3	7.3	回転ヘラケズリ	回転ナデ	N5/0 灰	密 石・長	良好
401	須恵器 壺		8.8	20.1	回転ナデ	回転ナデ	N6/0 灰	密 石・長	良好
402	弥生土器 甕	16.0		8.0	タテハケ	ヨコヘラミガキ	7.5YR5/3 にぶい褐	やや密 石・長	良好
403	弥生土器 甕	16.0		7.0	ミガキ状の板ナデ	指頭ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	やや密 石・長	良好
404	弥生土器 甕		4.8	3.3	マメツ	マメツ	2.5YR5/6 明赤褐	粗 石・長	良好
405	土師器 鍋	42.0		5.8	指頭圧	ヨコハケ 接合痕	7.5YR7/8 黄橙	やや粗 石・長	良好
406	須恵器 坏	11.8	5.4	4.3	回転ナデ	回転ナデ	N6/0 灰	密 石・長	良好
407	土師器 甕	26.0		9.5	指頭圧後タテハケ後ヨコハケ	ナデ	10YR5/4 にぶい黄褐	やや密 石・長	良好
408	土師器 坏	12.4	9.0	4.2	マメツ	マメツ	2.5YR6/6 橙	やや密 石・長	良
409	土師器 坏	11.9	8.0	3.1	マメツ	ナデ	5YR8/3 淡橙	やや密 石・長	良好
410	土師器 坏	11.5	7.8	3.0	マメツ	マメツ	7.5YR8/6 浅黄橙	やや密 石・長	良好
411	土師器 皿	8.0	5.9	1.3	ナデ, ヘラ切り	ナデ	2.5YR6/6 橙	やや密 石・長	良好
412	土師器 皿	8.2	6.4	1.5	ナデ	ナデ	7.5YR7/6 橙	密 石・長	良好
413	土師器 皿	7.1	6.0	1.5	ナデ, 糸切り	ナデ	2.5YR6/6 橙	密 石・長	良好
414	土師器 皿	7.7	6.5	1.6	ナデ, 糸切り	ナデ	7.5YR7/6 橙	密 石・長	良好
415	土師器 皿	7.7	6.3	1.7	ナデ, 糸切り	ナデ	5YR6/6 橙	密 石・長	良好
416	土師器 皿	8.2	7.0	1.1	ナデ, ヘラ切り	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	密 石・長	良好
417	土師器 皿	7.3	6.5	1.4	ナデ, 糸切り	ナデ	5YR6/6 橙	密 石・長	良好
418	土師器 皿	7.1	6.4	1.2	ナデ, ヘラ切り	ナデ	7.5YR6/6 橙	密 石・長	良好
419	土師器 皿	7.6	6.4	1.2	ナデ, 糸切り	ナデ	5YR7/6 橙	密 石・長	良好
420	土師器 皿	7.7	6.5	1.6	ナデ, 糸切り	ナデ	5YR6/6 橙	密 石・長	良好
421	須恵器 碗	15.8	5.0	4.5	マメツ	マメツ	2.5Y8/1 灰白	密 石・長	良好
422	瓦器 碗	16.4		3.5	マメツ	マメツ	N5/0 灰	密 石・長	良好
423	土師器 碗		6.6	3.3	マメツ	マメツ	10YR3/1 黒褐	密 石・長	良好
424	磁器 皿		4.2	0.9	青磁釉, 高台無釉	青磁釉	7.5GY7/1 明緑灰	密 同安窯系	良好
425	磁器 碗			2.4	青磁釉 鎗蓮弁	青磁釉	7.5Y6/3 オリーブ黄	密 龍泉窯系	良好
426	磁器 碗		6.0	2.0	青磁釉, 高台無釉 鎗蓮弁	青磁釉	2.5GY6/1 オリーブ灰	密 龍泉窯系	良好
427	磁器 碗			2.9	青磁釉 鎗蓮弁	青磁釉	10Y5/2 オリーブ灰	密 龍泉窯系	良好
428	磁器 碗			3.4	青磁釉	青磁釉 草花文	7.5Y6/3 オリーブ黄	密 龍泉窯系	良好
429	磁器 碗			2.6	青磁釉 鎗蓮弁	青磁釉	5Y6/4 オリーブ黄	密 龍泉窯系	良好
430	磁器 碗	14.6		3.0	青磁釉 鎗蓮弁	青磁釉	2.5GY6/1 オリーブ灰	密 龍泉窯系	良好
431	磁器 碗	17.0		3.6	青磁釉 櫛目文	青磁釉 沈線1条	7.5Y7/2 灰白	密 同安窯系	良好
432	弥生土器 甕	20.0		2.7	マメツ 櫛描直線文	マメツ	5YR5/6 明赤褐	やや粗 石・長	良好
433	弥生土器 甕	22.0		8.9	タテハケ 櫛状工具による刺突文	ヨコヘラミガキ	2.5Y7/4 浅黄	密 石・長	良好
434	弥生土器 広口壺	17.7		1.6	ナデ 斜格子文	ナデ	10YR4/2 灰黄褐	やや密 石・長	良
435	弥生土器 広口壺	15.6		3.5	ナデ 焼成前の円孔2個1対	ナデ	7.5YR7/6 橙	やや密 石・長	良好
436	弥生土器 甕		5.5	2.9	マメツ 焼成前の穿孔	マメツ	2.5YR5/8 明赤褐	粗 石・長	良
437	弥生土器 甕		5.3	2.9	マメツ	マメツ	10R4/4 赤褐	やや粗 石・長	良
438	弥生土器 甕		7.6	5.2	タテヘラミガキ	ナデ	5YR5/6 明赤褐	やや粗 石・長	良好

439	弥生土器 甕		5.1	7.6	タテヘラミガキ	指頭圧	10R5/8 赤	密 石・長	良好
440	弥生土器 甕		6.4	7.1	タテヘラミガキ	ナデ	10YR4/3 にぶい黄褐	やや粗 石・長	良好
441	弥生土器 甕		5.7	4.1	タテヘラミガキ	指頭圧	7.5YR5/4 にぶい褐	密 石・長	良好
442	弥生土器 甕		5.0	3.9	タテヘラミガキ	ナデ	5YR4/6 赤褐	やや密 石・長	良好
443	弥生土器 甕		5.8	8.8	マメツ	ナデ	10R4/8 赤	やや粗 石・長	良
444	弥生土器 壺		8.0	3.5	ナデ	ナデ, 指頭圧	10YR5/3 にぶい黄褐	やや粗 石・長	良好
445	弥生土器 紡錘車			5.9	ナデ 刺突文, 焼成後の穿孔, 土器転用	ナデ	5YR6/6 橙	密 石・長	良好
446	須恵器 高杯			1.9	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y8/2 灰白	密 石・長	良好
447	須恵器 壺		10.0	1.9	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/1 灰	密 石・長	良好
448	須恵器 坏	16.0		4.1	回転ナデ	回転ナデ	5Y8/1 灰白	やや密 石・長	良好
449	土師器 皿	23.2		3.3	ナデ, ヨコヘラミガキ	ナデ, 暗文	2.5YR6/8 橙	密 石・長	良好
450	土師器 甕	16.6		5.9	ナデ	タテヘラケズリ後指頭圧 接合痕	2.5YR5/6 明赤褐	やや密 石・長	良好
451	土師器 甕	23.0		7.9	粗いタテハケ	タテハケ後指頭圧	7.5YR5/4 にぶい褐	やや密 石・長	良好
452	土師器 鍋	43.8		13.1	タテハケ後指頭圧	ナデ, 指頭圧	7.5YR6/6 橙	やや密 石・長	良好
453	土師器 鍋			13.8	タテハケ	指頭圧後板ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	やや密 石・長	良好
454	弥生土器 甕	22.0		6.7	ナデ 凹線1条	指頭圧後タテハケ	2.5YR7/2 灰黄	やや密 石・長	良好
455	弥生土器 甕	24.0		3.3	タテハケ 凹線3条	ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	やや粗 石・長・角	良好
456	弥生土器 甕		7.6	13.0	タテヘラミガキ	タテヘラミガキ, 指頭圧	10YR6/3 にぶい黄橙	やや密 石・長	良好
457	弥生土器 壺		11.8	3.3	マメツ	マメツ	7.5YR5/6 明褐	粗 石・長	良好
458	弥生土器 壺		12.0	2.9	マメツ	マメツ	2.5Y7/1 灰白	粗 石・長	良好
459	弥生土器 甕		6.6	3.9	マメツ	マメツ	7.5YR7/6 橙	粗 石・長	良好
460	弥生土器 甕		6.0	3.0	マメツ	マメツ	5YR7/6 橙	やや粗 石・長	良好
461	弥生土器 甕		6.6	7.6	タテヘラミガキ	マメツ	10YR7/2 にぶい黄橙	やや粗 石・長	良
462	弥生土器 製塩土器		4.0	2.1	ナデ	ナデ	10YR6/2 灰黄褐	やや密 石・長・角	良好
463	弥生土器 製塩土器		4.0	1.2	マメツ	マメツ	10R5/4 赤褐	密 石・長・角	良好
464	弥生土器 製塩土器		3.0	1.7	マメツ	マメツ	10YR5/2 灰黄褐	密 石・長・角	良好
465	弥生土器 製塩土器		4.6	2.1	マメツ 接合痕	マメツ	7.5YR6/3 にぶい橙	やや密 石・長・角	良好
466	弥生土器 製塩土器		4.0	2.4	マメツ	マメツ	2.5Y6/2 灰黄	密 石・長・角	良好
467	弥生土器 製塩土器		3.8	2.4	マメツ	マメツ	2.5YR5/4 にぶい赤褐	密 石・長・角	良好
468	弥生土器 製塩土器		3.8	2.4	マメツ	マメツ	2.5Y6/2 灰黄	やや密 石・長・角	良好
469	弥生土器 製塩土器		4.0	2.2	マメツ	マメツ	2.5Y6/1 黄灰	やや密 石・長・角	良好
470	弥生土器 製塩土器		3.2	2.5	マメツ	マメツ	10YR6/2 灰黄褐	やや密 石・長・角	良好
471	弥生土器 製塩土器		4.0	2.3	マメツ	マメツ	7.5YR6/3 にぶい褐	密 石・長・角	良好
472	弥生土器 製塩土器		3.4	2.3	マメツ	マメツ	10YR6/2 灰黄褐	やや密 石・長・角	良好
473	弥生土器 高杯		11.0	4.5	マメツ	マメツ	7.5R4/4 にぶい赤	粗 石・長	良好
474	須恵器 蓋			2.4	回転ナデ	回転ナデ	N5/0 灰	やや粗 石・長	良好
475	須恵器 蓋	16.0		2.0	回転ナデ	回転ナデ	N5/0 灰	密 石・長	良好
476	須恵器 坏		10.0	1.1	回転ナデ	回転ナデ	5Y6/1 灰	密 石・長	良好
477	須恵器 坏		11.2	0.9	マメツ	マメツ	N7/0 灰白	やや密 石・長	良好
478	須恵器 坏		10.0	1.7	マメツ	マメツ	10YR6/4 にぶい黄橙	密 石・長	良

479	須恵器 平瓶		15.6	1.9	回転ナデ	回転ナデ	N6/0 灰	やや密 石・長	良好
480	土師器 鍋	40.0		6.7	マメツ	マメツ	7.5YR5/3 にぶい褐	粗 石・長	良好
481	土師器 鍋	32.0		6.8	ヨコハケ	板ナデ	5YR4/4 にぶい赤褐	やや粗 石・長	良好
482	土師器 鍋			12.0	指頭ナデ		2.5YR5/6 明赤褐	やや粗 石・長	良好
483	土師器 鍋			5.1	指頭ナデ		5YR5/6 明赤褐	やや粗 石・長	良好
484	土師器 坏	11.0		2.8	ナデ	ナデ	5YR5/6 橙	密 石・長	良好
485	須恵器 坏	12.4	6.4	4.2	回転ナデ, ヘラ切り	回転ナデ	N6/0 灰	密 石・長	良好
486	土師器 坏		7.0	2.6	ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密 石・長	良好
487	土師器 坏	11.4	6.2	3.8	マメツ	マメツ	10YR5/3 にぶい黄褐	密 石・長	良好
488	土師器 坏		6.0	1.4	マメツ	マメツ	2.5Y4/1 黄灰	密 石・長	良好
489	土師器 坏		6.0	1.3	マメツ	マメツ	10YR8/3 浅黄橙	密 石・長	良好
490	土師器 皿	9.0		1.2	ナデ	ナデ	10YR8/2 灰白	やや密 石・長	良好
491	土師器 皿	8.0	6.7	1.5	ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密 石・長	良好
492	土師器 皿	6.0	4.8	1.2	ナデ	ナデ	10YR6/2 灰黄褐	密 石・長	良好
493	土師器 皿	7.8	5.0	1.4	マメツ	マメツ	10YR4/3 にぶい黄褐	密 石・長	良好
494	土師器 皿	8.3	6.0	1.4	ナデ	ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐	密 石・長	良好
495	磁器 碗		5.0	2.1	長石釉, 高台無釉	長石釉	10Y8/1 灰白	密 白磁	良好
496	磁器 碗		5.0	2.2	青磁釉, 高台無釉 鎬蓮弁	青磁釉	7.5Y5/3 灰オリーブ	密 龍泉窯系	良好
497	備前焼 播鉢	30.0		5.2	ナデ	ナデ 播目	7.5YR5/4 にぶい褐	密 石・長	良好
498	備前焼 播鉢		14.0	4.3	ナデ	ナデ 播目	2.5YR6/6 橙	密 石・長	良好
499	土師器 羽釜	20.6		2.2	マメツ	マメツ	10YR5/2 灰黄褐	粗 石・長	良好
500	土師器 坏		8.0	1.2	ナデ	ナデ	2.5Y8/2 灰白	密 石・長	良好
501	土師器 坏		6.0	1.1	マメツ	マメツ	7.5YR7/4 にぶい橙	密 石・長	良好
502	土師器 鍋			10.8	指頭ナデ		10YR7/1 灰白	やや密 石・長	良好
503	土師器 鍋			8.2	指頭ナデ		2.5Y8/2 灰白	やや密 石・長	良好
504	土師器 鍋			8.4	指頭ナデ		2.5Y8/2 灰白	やや粗 石・長	良
505	土師器 鍋			7.0	指頭ナデ		10YR6/2 灰黄褐	やや粗 石・長	良好

金属器観察表

番号	器種	法量(cm)			特 徴
		長	幅	厚	
K1	刀子	7.7	0.9	0.4	先端部は細くなるが、丸みを帯びている。
K2	煙管吸口	6.0	1.1	1.0	非常に薄いつくり。側部にバリ痕残る。

石器観察表

	器種	石材	法量 (cm)			(g)	特 徴
			長	幅	厚	重量	
S1	石鏃	サヌカイト	3.0	2.3	0.6	2.9	凹基式。片面より調整。
S2	石庖丁	サヌカイト	4.7	6.0	1.1	35.8	加工時に破損あるいは再利用で削器として使用したと考えられる。
S3	石槍	サヌカイト	10.5	4.1	1.3	42.7	刃部は両面より調整。先端部破損後左側縁部を敲打し石包丁として再利用。
S4	磨製石庖丁	緑泥片岩	6.3	6.4	1.0	47.7	刃部は欠損しており不明。紐部の円孔は両面より穿孔。
S5	石核	チャート	2.3	3.4	2.3	21.3	自然面1面を残し、3面に剥離面を持つ。
S6	砥石	粘板岩	7.8	5.1	1.0	82.6	長方形になると考えられ、前面に擦痕が見られる。
S7	砥石	砂岩	8.3	9.6	4.4	462.6	両面とも擦痕が見られる。上面は被熱により赤変している。
S8	石皿	砂岩	10.1	10.1	4.3	366.5	平坦面側に擦痕が見られる。上面は被熱により赤変している。
S9	石庖丁	流紋岩	8.5	6.3	1.6	118.3	砥石を転用。
S10	削器	サヌカイト	3.5	4.6	0.7	12.6	側縁部に自然面を残す。刃部は片側より調整。
S11	磨石	花崗岩	11.1	6.7	3.9	410.5	全面に擦痕が見られる。被熱により赤変および黒変している。
S12	石皿	砂岩	10.4	5.6	3.2	343.6	上面に擦痕が見られる。全体に被熱により赤変している。
S13	石皿	砂岩	20.2	13.0	6.3	2500.0	上面に擦痕が見られる。全体に被熱により赤変している。
S14	石鏃	サヌカイト	2.4	1.9	0.5	0.9	凹基式。片面より調整。
S15	石鏃	サヌカイト	2.9	1.7	0.5	1.8	基部欠損。剥片を利用し、刃部の細かい調整はほとんどしない。
S16	石鏃	サヌカイト	3.0	1.3	0.5	1.8	凸基式。両面より調整。
S17	石鏃	サヌカイト	2.1	1.3	0.4	0.7	先端部と基部を欠く。剥片を利用し、刃部の細かい調整はほとんどしない。
S18	石鏃	サヌカイト	3.8	1.3	0.4	1.1	凸基式。両面より調整。
S19	石槍	サヌカイト	2.7	2.5	0.9	7.0	先端部と基部を欠く。両面より調整。
S20	削器	サヌカイト	3.2	3.8	0.6	12.8	側縁部に自然面を残す。刃部は両面より調整。
S21	削器	サヌカイト	4.8	4.5	0.8	20.2	側縁部に自然面を残す。刃部は剥片をそのまま利用。
S22	削器	サヌカイト	4.0	5.7	0.8	12.3	剥片を僅かに調整し刃部をつくる。
S23	削器	サヌカイト	3.6	8.6	0.7	18.4	主要剥離面は調整しない。裏面は自然面を残し、打点付近を敲打によりつぶしを行なっている。
S24	石庖丁	サヌカイト	3.9	2.4	1.0	15.2	両側縁部は欠損。背面は敲打されており、刃部は両面より調整。
S25	削器	サヌカイト	5.3	3.6	0.7	11.0	剥片を僅かに調整し刃部をつくる。
S26	石庖丁	サヌカイト	3.7	6.0	0.8	25.8	側縁部に抉りをもつ。背面は敲打されており、刃部は両面より調整。
S27	石庖丁	サヌカイト	4.2	5.4	1.2	21.8	長方形を呈すると考えられる。両面より調整。
S28	石庖丁	サヌカイト	3.5	3.6	0.7	9.3	側縁部に抉りをもつ。背面は敲打されており、刃部は両面より調整。
S29	削器	サヌカイト	6.4	4.8	1.2	44.0	背面から両側縁部にかけて敲打痕が見られ、わずかに刃部の調整が見られる。
S30	石鏃	サヌカイト	2.9	2.0	0.4	2.8	有茎式。先端部欠損。大まかな調整が両面から施されている。
S31	石鏃	サヌカイト	7.0	6.6	1.3	71.9	両側縁部に敲打痕が見られる。刃部と基部は欠損。

写 真 图 版

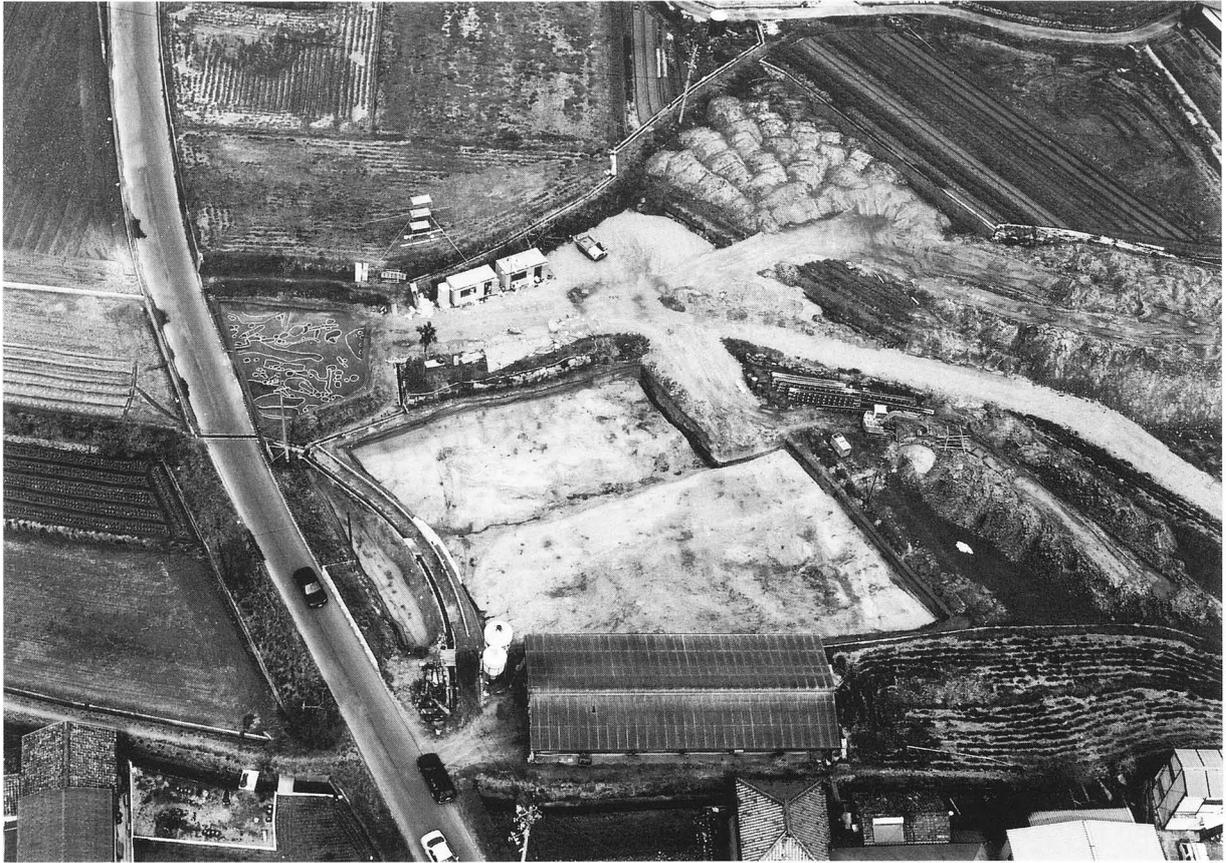


写真1 I～Ⅲ区調査区全景（南から）



写真2 IV～Ⅵ区調査区全景（西から）

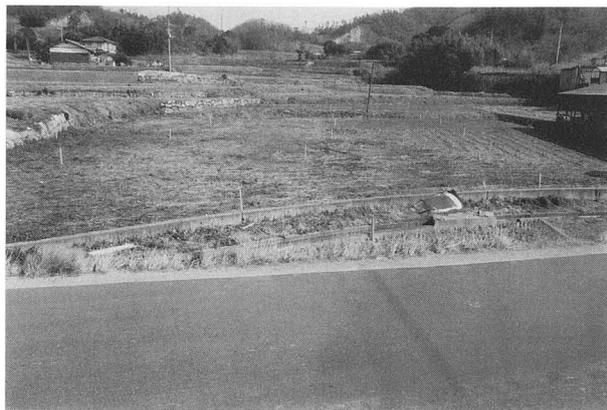


写真3 II・III区調査前全景（西から）

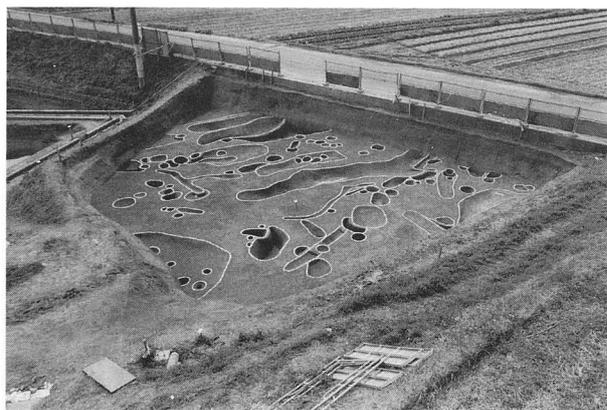


写真4 I区完掘状況（東から）

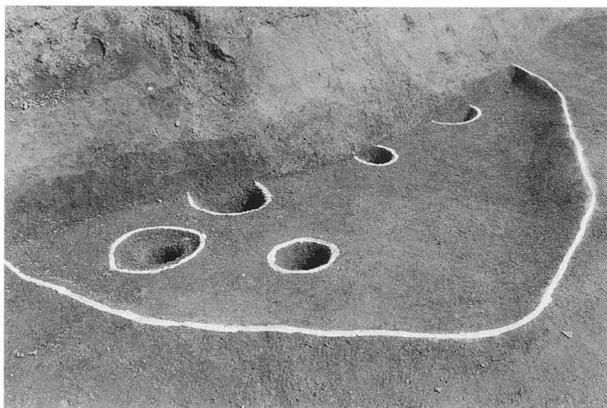


写真5 SH11001完掘状況（西から）



写真6 SD11008土器出土状況（南から）

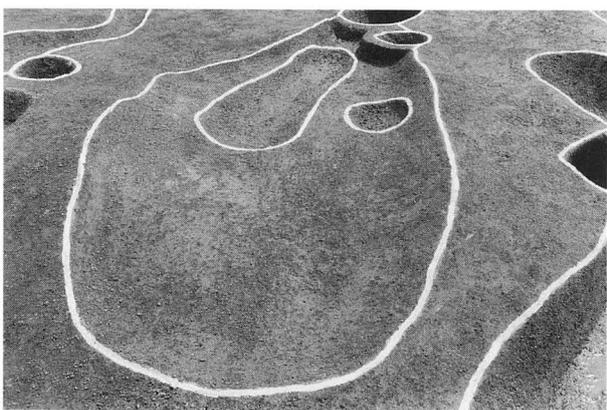


写真7 SK11012完掘状況（西から）

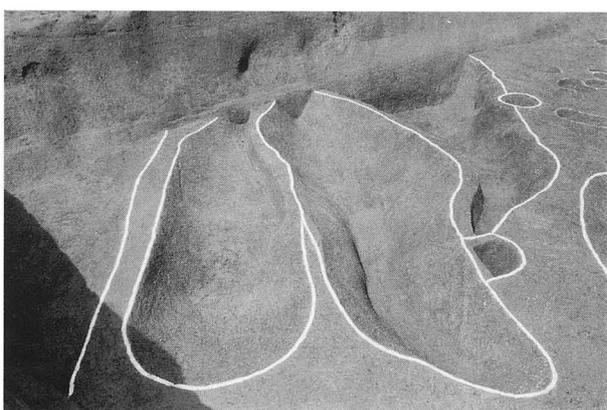


写真8 SK11013・11014完掘状況（東から）



写真9 III区NR31001掘削風景（北から）



写真10 II区西壁断面（北から）



写真11 Ⅲ区NR31001完掘状況（西から）

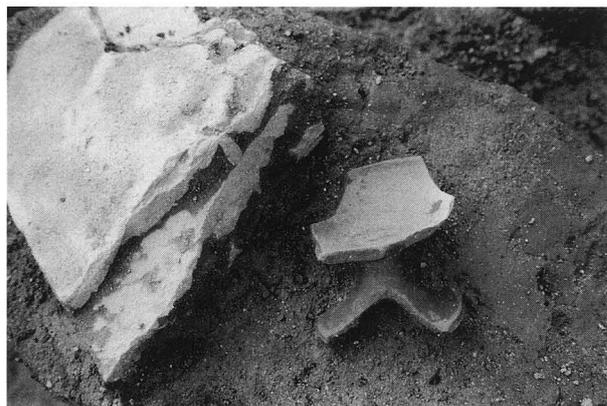


写真12 Ⅲ区NR31001土器出土状況（東から）



写真13 Ⅳ区西壁断面（南から）



写真14 Ⅳ・Ⅴ区完掘状況（北から）



写真15 SH42001完掘状況（南から）



写真16 SH42002完掘状況（東から）



写真17 SH42003・SB42003完掘状況（南から）

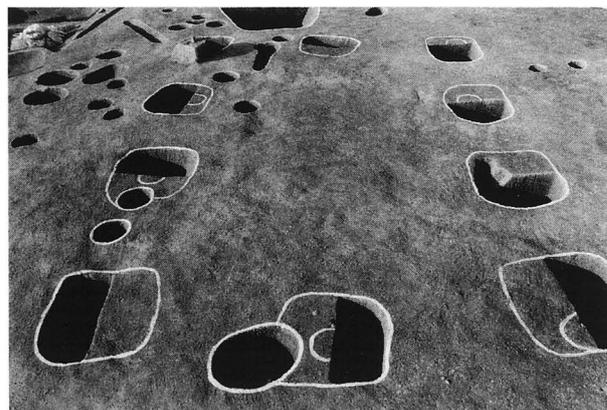


写真18 SB42001半掘状況（南から）

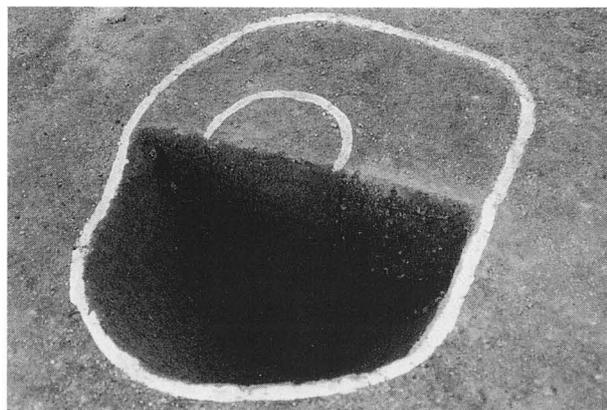


写真19 SB42003柱穴断面（南から）

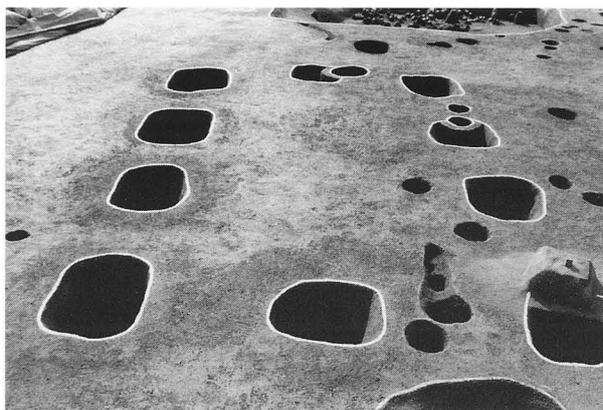


写真20 SB42003完掘状況（北から）



写真21 SB42002完掘状況（東から）



写真22 SK42018完掘状況（東から）



写真23 IV区土坑群完掘状況（南から）



写真24 SD42002完掘状況（北から）



写真25 SK42063掘削状況（東から）



写真26 SK42063掘削状況（西から）

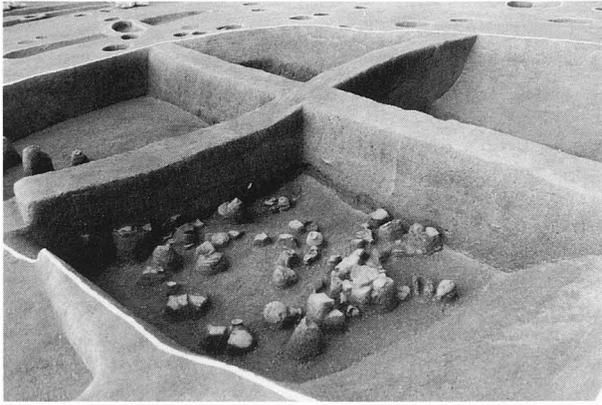


写真27 SK42063断面（南東から）



写真28 SK42063断面（北東から）



写真29 SK42063土器出土状況（北東から）



写真30 SK42063土器出土状況（南から）

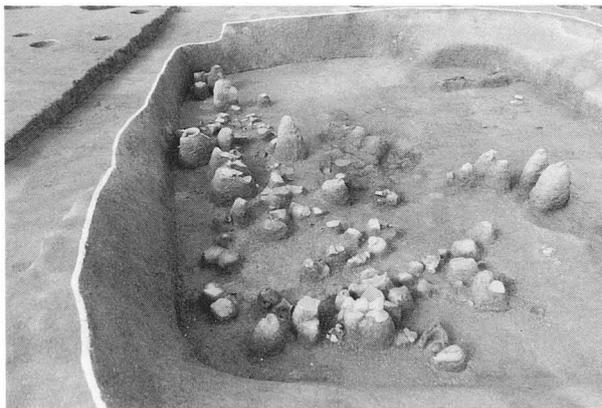


写真31 SK42063土器出土状況（東から）



写真32 SK42063土器出土状況（西から）



写真33 SK42063平面図作成風景（北東から）



写真34 SK42063完掘状況（東から）

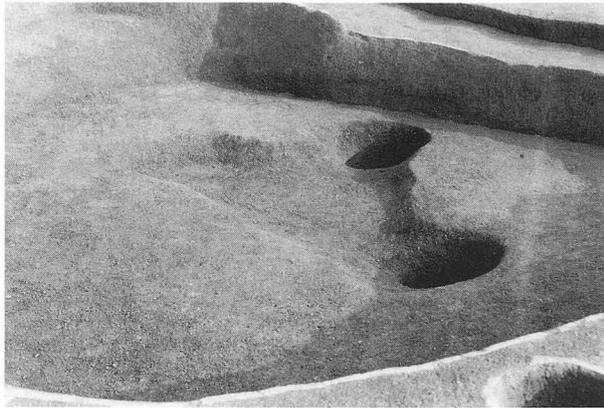


写真35 SK42063下部遺構（北西から）



写真36 SK42063土器出土状況（南から）



写真37 SK42063土器出土状況（南から）

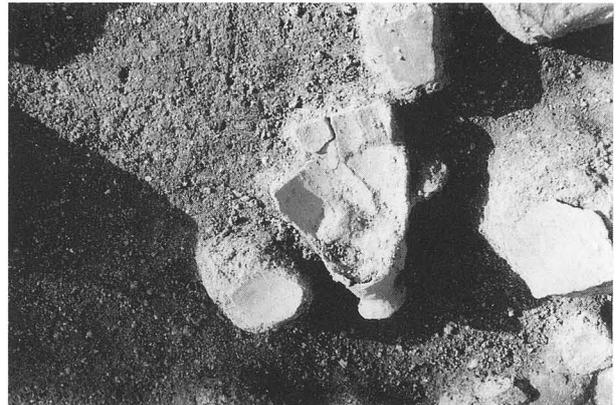


写真38 SK42063土器出土状況（東から）



写真39 SK42063土器出土状況（南から）



写真40 SK42063土器出土状況（北から）



写真41 SK42063土器出土状況（北から）

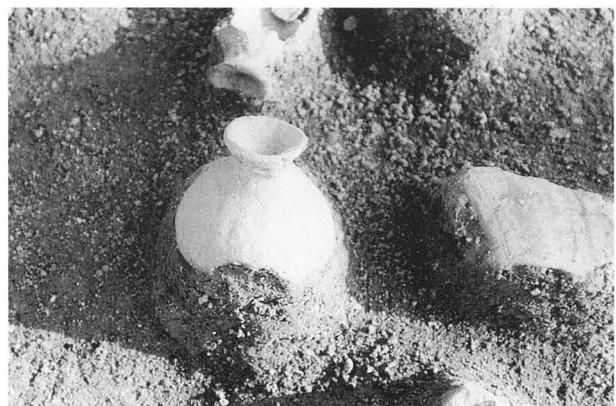


写真42 SK42063土器出土状況（西から）

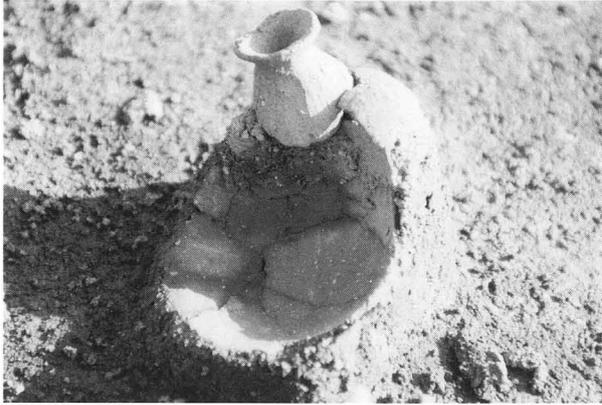


写真43 SK42063土器出土状況（西から）



写真44 SK42063土器出土状況（北から）



写真45 SK42063土器出土状況（北から）



写真46 SK42063土器出土状況（南から）

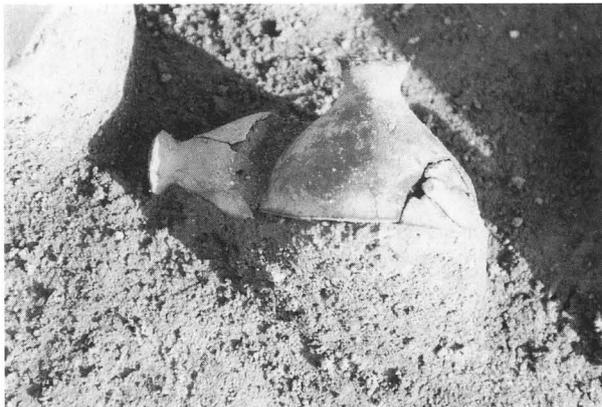


写真47 SK42063土器出土状況（西から）

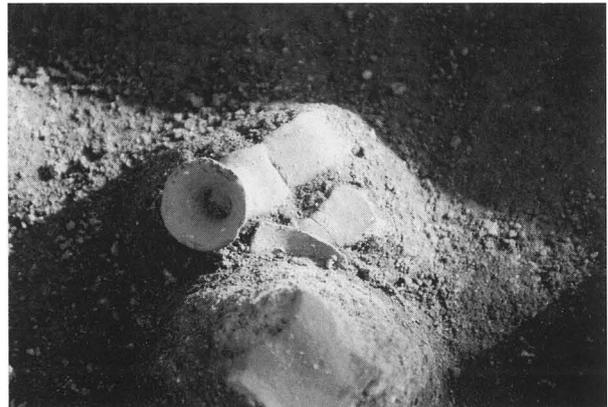


写真48 SK42063土器出土状況（北から）



写真49 SK42063土器出土状況（東から）



写真50 SK42063炭化材検出状況（南から）

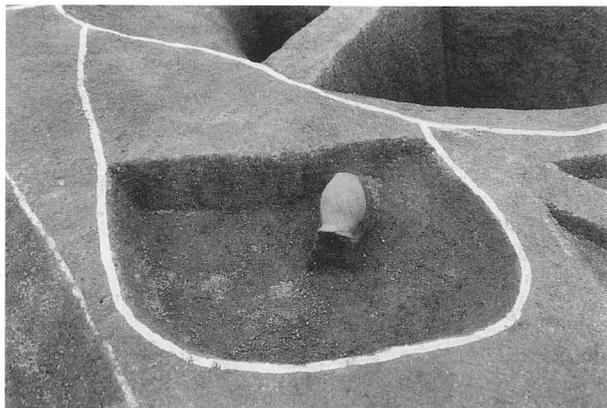


写真51 SK42068断面（南から）



写真52 SK42068土器出土状況（西から）



写真53 SB41001完掘状況（北西から）



写真54 IV区作業風景（東から）

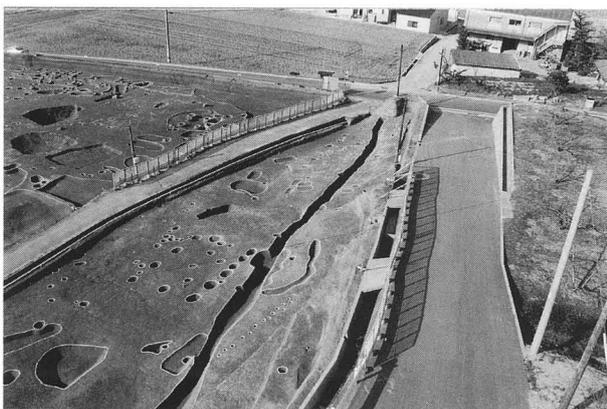


写真55 V区完掘状況（東から）



写真56 SH53001完掘状況（西から）



写真57 SH53001完掘状況（東から）

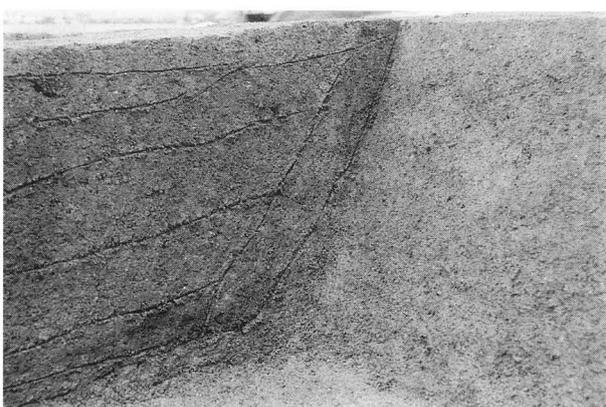


写真58 SH53001壁部分断面（北から）